

三石代遺跡発掘調査報告

－三重県伊賀市下神戸所在－

2007（平成19）年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

大阪湾に注ぎ込む淀川の上流である木津川は、布引山地に端を発し、伊賀市付近では周囲にいくつもの小盆地を形成し、大規模な伊賀盆地に流れ出ます。三石代遺跡は、木津川が小盆地から伊賀盆地に流れ出る場所の左岸に立地します。付近には、縄文時代からの多くの遺跡が認められます。古代には「上郡」「古郡」「下郡」など「郡」を冠する地名や、古代寺院も確認され、古代伊賀郡の中心地であったと考えられています。

今回の発掘調査は、県道上野島ヶ原線の整備に伴って行われたもので、開発に伴う緊急調査です。我々が現代社会をより豊かに暮らすためには、開発は必要不可欠なものです。その一方で地域の歴史を語る遺跡が失われていくにあたり、これらを記録保存し、後世に伝えていくのも我々の使命であると考えております。今後は、こうして蓄積された成果をより多くの人々に有効に活用されるように努力していきたいと考えております。

なお、最後になりましたが、調査にあたりましては地元の方々をはじめ、伊賀市教育委員会、三重県県土整備部の方々には多大なるご理解とご協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 吉水康夫

例　　言

1. 本書は、三重県伊賀市（発掘当時は上野市）下神戸字三石代に所在する、三石代遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の原因是、平成15年度の県道上野島ヶ原線緊急地方道路整備事業である。当該調査にかかる費用は、三重県県土整備部が負担した。
3. 当該調査及び整理体制は下記のとおりである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

平成15年度 調査研究Ⅰグループ 主事 船越重伸・臨時技術補助員 酒井巳紀子

平成16年度 調査研究Ⅰグループ 主事 山口聰嗣

整理担当 三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅰグループ・情報普及グループ・企画調整グループ（平成15・16年度）

調査研究Ⅰ課（グループ）・支援研究課（グループ）（平成17・18年度）

発掘調査委託先 平成15年度 安西工業株式会社

平成16年度 株式会社総合文化企画

4. 調査期間は下記のとおりである。

平成15年度 平成15年5月1日～平成15年10月19日 776m²

平成16年度 平成16年7月12日～平成16年11月30日 1,762m²（下層313m²を含む）

5. 調査にあたっては、地元の方々、伊賀市教育委員会、三重県県土整備部道路整備グループ（室）、及び伊賀建設事務所からのご協力を得た。
6. 報告書作成にあたり、遺構図版の作成は山口聰嗣が、遺物図版の作成は穂積が行った。執筆は穂積裕昌・西村美幸が行ない、目次および文末に氏名を記した。全体の編集および遺物写真の撮影は西村が行なった。
7. 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　　例

<地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、上野市都市計画図（現伊賀市）である。上野市都市計画図は、国土調査法の日本測地系による座標第IV系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年4月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
- 2 挿図の方位は、世界測地系・測地成果2000による座標北で表している。なお、真北は座標北の西偏 $0^{\circ}16'$ 、磁北は座標北の西偏 $6^{\circ}40'$ である。

<遺構類>

- 3 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（第9版1989年）を用いた。
- 5 本書で使用した遺構表示略号は下記のとおりである。

S A : 墓 S B : 掘立柱建物 S H : 竪穴住居 S K : 土坑 S D : 溝 S X : 墓 S R : 自然流路
S Z : 磯層 P i t · P : 柱穴・小穴

<遺物類>

- 6 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。
- 7 遺物実測図は、当報告書を通じて通番としている。
- 8 当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。
- 9 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号	……………	挿図掲載番号である。
次数	……………	調査の次数（1次、2次）を示す。
実測番号	……………	実測段階の登録番号である。
様・質	……………	「弥生土器」「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。
器種など	……………	遺物の器種を示す。
グリッド	……………	調査時に設定したグリッド名を記した。
遺構・層名	……………	遺物の出土した遺構や層名を記した。
法量（cm）	……………	遺物の法量を示す。（口）は口縁部径、（基）は基部径、（頸）は頸部径、（台）は台部径、（高）は器高を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。
調整・技法の特徴	……	主な特徴を示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。
胎土	……………	小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
色調	……………	その遺物の代表となる色調を記載した。表記は前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存度	……………	その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残る。
特記事項	……………	遺物の特徴となる事項を記した。

<写真図版>

- 10 写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。
- 11 握図と写真図版の遺物番号は、それぞれの遺跡毎の実測図番号と対応している。
- 12 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本文目次

第1章 前 言	
第1節 調査に至る経緯と経過	（穂積） 1
第2節 調査の方法	（穂積） 2
第2章 位置と環境	（穂積） 3
第3章 旧地形と層序の概要	
第1節 旧地形	（穂積） 5
第2節 基本層序	（穂積） 6
第4章 遺 構	
第1節 遺構配置の概要	（穂積） 9
第2節 上層遺構	（穂積） 9
第3節 下層遺構	（穂積・西村） 9
第5章 遺 物	
第1節 遺構出土の遺物	（穂積・西村） 28
第2節 包含層等出土遺物	（穂積・西村） 30
第6章 調査のまとめ	
第1節 古墳時代以前の状況	（穂積） 45
第2節 古墳時代の遺構と遺物	（穂積） 45
第3節 古代の遺構と遺物	（西村） 45
第4節 中世の遺構と遺物について	（西村） 46

図版目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 調査区周辺地形図	7
第3図 調査区位置図	7
第4図 調査区北壁土層断面図	8
第5図 遺構配置図	14
第6図 遺構平面図（1）	15
第7図 遺構平面図（2）	16
第8図 S R 163実測図	17
第9図 S Z 164実測図	18
第10図 S H151～155実測図	19
第11図 S H157～162実測図、S K40遺物出土状況図	20
第12図 S B 146・147実測図	21
第13図 S B 148・149実測図	22
第14図 S A 141、S B 142～145実測図	23
第15図 S B 150・S X 117実測図、S X 109・114遺物出土状況図	24
第16図 S X 118遺物出土状況図	25
第17図 出土遺物実測図（1）	38
第18図 出土遺物実測図（2）	39
第19図 出土遺物実測図（3）	40
第20図 出土遺物実測図（4）	41
第21図 出土遺物実測図（5）	42

第22図	出土遺物実測図（6）	43
第23図	出土遺物実測図（7）	44

表 目 次

第1表	竪穴住居観察表	25
第2表	堀・掘立柱建物観察表	26
第3表	遺構一覧表（1）	26
第4表	遺構一覧表（2）	27
第5表	遺物観察表（1）	31
第6表	遺物観察表（2）	32
第7表	遺物観察表（3）	33
第8表	遺物観察表（4）	34
第9表	遺物観察表（5）	35
第10表	遺物観察表（6）	36
第11表	遺物観察表（7）	37

写 真 目 次

図版1	三石代遺跡下層	47
図版2	上：三石代遺跡全景、下：三石代遺跡調査区全景	48
図版3	上：上層東半部、下：上層東半部	49
図版4	上：S H151～159、中：S B146・169、下：S B147	50
図版5	上：S A141・S B142～145、下：S X109	51
図版6	上：S X114遺物出土状況、下：S X117	52
図版7	上：S R163、下：S Z164	53
図版8	上：調査前風景、下：道路工事風景	54
図版9	出土遺物1	55
図版10	出土遺物2	56
図版11	出土遺物3	57
図版12	出土遺物4	58

第1章 前 言

第1節 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

三石代遺跡は、平成4年刊行の『三重県上野市遺跡地図』（上野市教育委員会）ではすでに中世の遺物を包含した遺物包蔵地として周知の遺跡であった。その後、木津川河川改修事業に伴って、平成6年度に河川脇を対象とした範囲確認調査を実施したが、この時は遺構・遺物は確認されなかった。

この三石代遺跡を縦断する県道上野島ヶ原線緊急地方道路整備事業の計画書の提出が行われたのは平成10年であった。この後、県教育委員会および三重県埋蔵文化財センターでは、遺跡の保存を巡って県上野土木事務所と協議を重ねたが、すぐ東側に木津川を越える鉄橋の新設が予定された関係上、ルートの変更が困難で、最終的に範囲確認調査を経て遺跡範囲が確定した後は記録保存として対応することに合意した。

これを受けて、三重県埋蔵文化財センターでは平成12年に事業対象地4,000m²を対象とした範囲確認調査を実施した。その結果、事業地内に中世を中心とした時期の遺構が広がっていることを確認するとともに、事業地内の遺跡範囲を確定し、その後の協議で本調査は平成15年度に実施することで合意した。

2 調査経過

本調査は、平成15年5月より開始することが予定された。ところが、三石代遺跡の調査へ入る事前の現地確認の際、すでに工事の始まっていた西側丘陵上で分布調査や範囲確認調査では見逃されていた古墳がルート上に存在することが判明（工事に伴う樹木の伐採・抜根によって顕在化、一部はすでに未調査のまま工事済）、俄かにそれへの対応が緊急の課題として浮上した。これらの古墳は、後に天童山古墳群の北端に属する古墳であることが判明するが、工事中不時発見のかたちで確認されたため、調査スタッフの構成など苦慮を重ね、結果として同事業ですぐ近接地でもある三石代遺跡の調査チームを拡大する

かたちで急遽対応することになった。

天童山古墳群の調査は、当初は作業員・機材等を事業者側の労務提供による対応で乗り切ろうとしたが、事業地内に残る古墳が2基存在したこと（うち1基は1墳丘2石室タイプ）ことや、さらに下層にも弥生時代後期の遺構が存在したことから困難を極め、途中より三石代遺跡で予定されていた調査委託を天童山古墳群にも拡大適用することで事態を乗り切った。

しかし、三石代遺跡の調査は、天童山古墳群とセットになった2現場同時進行という体制で臨むこととなったため、当初予定していた人員が整わないなど想定外の事態が生じ、調査の進捗に大きな影響をもたらした。調査は、中近世の耕作痕かとみられる素掘溝が全面を覆うなか、それに切られるかたちで存在する中世遺構を対象に開始したが、その過程で範囲確認調査の際にはわからなかった下層面の存在も判明し、当初予定された期間内には調査が終了できないことが明らかとなった。

この事態を受けて、事業部局と改めて協議の場をもち、天童山古墳群については工事中不時発見ということもあって本体工事との契約上、至急に調査を完了させること、三石代遺跡に関しては次年度に下層を中心とした未調査部分を改めて調査することで合意した。そのため、三石代遺跡は調査未了のまま、掘削が終了した部分の記録作業を行って、埋め戻しは行わずに次年度調査へ引き継がれた。

調査2年目となる平成16年度の調査は、7月より開始した。上層に存在した素掘溝等を除去し、砂層をベースとした古代～中世を中心とする時期の遺構が現れたが、その検出、維持には困難をきわめ、1日の最も光線具合が良い時間帯にかろうじて検出ラインが見えるということもしばしばであった。

さらに、調査の過程で遺構が東側へ30mほど伸びていることと、下層面の一部がそれ以前に存在した埋没流路の埋土上に形成されていることも判明し、

最終的にこの部分も含めて記録作業を行った後、11月に漸くすべての調査作業を終了した。

最終的な調査面積は、上層部776m²、下層部1,762m²、下層部の一部ベースとなる埋設流路部分313m²であった。

3 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

- ・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）

平成15年5月28日付け賀建第192号

- ・文化財保護法第58条の2第1項（県教育長宛）
 - 一次調査 平成15年5月13日 教理81号
 - 二次調査 平成16年7月14日 教理148号
- ・遺失物法による文化財発見・届出通知（上野警察署長宛）
 - 一次調査 平成16年2月3日 教委12-9-24号（県教育長通知）
 - 二次調査 平成16年12月21日 教委12-4-24号（県教育長通知）

第2節

調査区の設定 今回の三石代遺跡では、調査対象区域が県道路線地内という細長い形状であったため、調査区の設定は国土座標には基づかず、調査効率を重視して調査区長軸に沿って任意で設定した。

三重県埋蔵文化財センターの調査では、調査区内を4m×4mの方眼（小地区）に分割し、それを調査の基本単位となるグリッドの1単位として調査を行っている。その際、グリッド名の表記は、通常グリッドの北西隅を表示の原点としているが、今回の三石代遺跡の調査では、通例とは異なって南西隅を表示の原点としている。具体的には、トレーナー長辺に平行するラインは算用数字を西側から、直交する短辺ラインはアルファベットを南側から付与し、その南西隅交点を小地区表示の基準とした。

そして、遺構実測の段階で、国土座標（新座標）を調査区に付与し、調査区全体の位置関係を座標レベルで把握できるようにした。

表土除去 包含層より上位は、重機（バックフォー）による表土除去を実施した。さらに、上層面調査終了後の下層面へ移行する際も、重機を使用した。

検出・掘削 表土除去後、人力による包含層掘削を実施し、その後、遺構検出を行った。

遺構カード 小地区を単位として1/40で作成し、略図・土質・切り合いを記すとともに、遺物取り上げにおける遺構番号の注記台帳として使用した。

遺構番号の付与 当センターが基本としている発掘調査における遺構番号付与は、ピット以外は遺構種

調査の方法

別を超えた遺跡毎の通し番号方式で、本遺跡においてもそれに従った。上層から下層の移行に際しても、基本的に上層部から連続する番号を付与し、統一性を図った。しかし、下層の堅穴住居と掘立柱建物は、先の連続番号に乗せず新たに1から付与している。従って、この部分については、番号の重複をなくすため、本書において遺構番号を変更した。

また、三重県の調査方式上致し方ないが、基本的に遺物遺構はその量や性格に関わらず一律に遺構番号が付与されるため、報告段階で不要と認めた遺構も番号が残る一方、重要性があっても遺物の出土がなければ現場レベルで遺構番号が付与されない場合も生じる。このため、本書においても、特に前者に関しては、遺構番号があっても必ずしも本文中で説明が加えられているわけではないことを明記したい。

実測 土層や、詳細な図化が必要と認められた遺構は、実測を行った。調査区土層は1/20、遺物出土状況や個別遺構の実測図は1/10の作図を基本とした。調査区全体の遺構実測も手描きとし、この場合は1/20作図とした。

遺構写真撮影 基本的に4×5インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助・メモ的に35mm判白黒ネガおよびカラーリバーサルも使用した。

遺物写真撮影 報告書掲載遺物から任意に選択し、基本的にプローニー判白黒ネガで撮影した。集合写真などは4×5インチ判白黒ネガもしくはカラーリバーサルも使用している。
(穂積)

第2章 位置と環境

伊勢と伊賀を隔てる布引山地に端を発した木津川は、伊賀市阿保の小盆地まで東流するが、伊賀市羽根で竜王山の岩盤に遮られて竜王山を回り込んで流れを北に転じ、比土・古郡の小盆地、上神戸の小盆地を縫うように流れた後、上野盆地へと流れ出る。三石代遺跡（1）は、ちょうど木津川が上流の小盆地群から上野盆地中央部へ踊り出ようとする場所の、左岸域を扼するように所在している。

上野盆地は、南側が木津川本流（長田川）水系でほぼ旧の伊賀郡域に、北側が木津川支流の柘植川と服部川下流部（服部川は上流部が旧の山田郡）の水系でほぼ旧の阿揖郡に相当する。両郡ともに地域の開発は早く、縄文土器の出土も認められるほか、弥生時代には銅鐸も出土している。

このうち、木津川本流域の伊賀郡側の状況を概観すると、弥生時代後期には阿保小盆地と比土小盆地（2）で突線鉢式銅鐸が、上野盆地東側となる伊賀市友生地内の丘陵内で破碎銅鐸片が出土している。弥生時代後期には、こうした小盆地や谷筋を単位として、銅鐸を保持し、集団の結合が図られつつあつたことがわかる。三石代遺跡とは木津川を挟んだ対岸となる伊賀市才良には、後期の環壕集落かと推定される才良遺跡（3）が所在し、長頸壺などに線刻された絵画・記号文土器が出土することで注目されている⁽¹⁾。後期の絵画土器は、盆地中央の伊賀市猪田の田中遺跡（4）からも出土している⁽²⁾。また、三石代遺跡西側の丘陵上に所在する天童山古墳群（5）の下層からも弥生時代後期の土器が出土しており⁽³⁾、



第1図 遺跡位置図 (1: 50,000) (国土地理院 1: 25,000「伊勢路」「月ヶ瀬」より作成)

集落ないしは墳墓群が所在した可能性を示している。

古墳時代に入っても、本地域の開発は引き続き進展し、多くの遺跡や古墳の形成が続く。例えば、阿保小盆地には首長居館である沢代遺跡⁽⁶⁾や中期～後期の楓ヶ森遺跡⁽⁷⁾が、比土・古郡小盆地には貼石を伴った首長関連の祭祀遺跡と推定される前期後半の城之越遺跡⁽⁸⁾などが形成される。これら遺跡は、いずれも古墳時代段階の貼石遺構を伴うのが特徴で、遺跡形成の主体者が首長層を含む相当な有力者クラスであることを示唆するとともに、古墳葺石以外では極めて珍しい当該期の貼石遺構が顕著にみられる地域として列島内でも稀有な地域として認識できる。

古墳形成を考えるにおいても、本地域は県内でも極めて重要な地域である。すなわち、木津川支流の比自岐川が開析した比自岐小盆地の北側丘陵には、全長120mの前方後円墳である著名な石山古墳⁽⁹⁾が所在する。また、比土・古郡小盆地を望む南西側の台地上には、中期初頭から後期まで首長系譜が続く国史跡・美旗古墳群が築造される。これら有力古墳の直接的な基盤は、古代伊賀郡にあるとみられ、一貫して本地域が伊賀における重要な拠点地域であることが窺える。

前方後円墳が築造されなくなる6世紀中葉以降も、本地域には多数の群集墳や遺跡が形成される。このうち、三石代遺跡を見下ろす西側丘陵上には、天童山古墳群が築造される。天童山古墳群は、6世紀中葉以降に群形成を開始する全14基の後期群集墳である。多くが大きな盗掘を受けているため内部主体の不明なものが多いが、中心部に位置する1号墳～3号墳は径20m前後の円墳で、腰高の墳丘と大きな盗掘跡は、かなり大型の横穴式石室が存在していた様子を窺わせている。古墳群としては端になる丘陵北隅に位置する平成15年度の8号墳と13号墳の発掘調査でも、横穴式石室をもつ古墳であることが判明している。⁽⁷⁾天童山古墳群は、木津川がちょうど盆地中央部へと流れ出ようとする丘陵突端に位置し、広く伊賀郡の南域を見通すことが可能で、重要遺跡が周辺に集中することと含めて、古墳の占地においてはこの時期最もいい場所に占地した古墳群といえるであろう。

律令期に入っても、三石代遺跡周辺は一貫して古代伊賀郡の中心部を占めたようで、三石代遺跡の所在地自体が伊賀市「上郡」であるほか、南側には「古郡」地名、北側には延暦年間の木簡が出土して平安期の郡衙関連施設の可能性が提起されている下郡遺跡⁽⁸⁾が所在する。

さらに、伊賀郡唯一の古代寺院、財良廃寺もちょうど三石代遺跡の対岸、弥生時代の才良遺跡があつた場所に造営される。伊賀国には、国分寺・国分尼寺以外では各郡毎に1寺院ずつの古代寺院が造営され、各郡の郡司層がそれぞれ造営に関わった「郡名寺院」的な様相をとるが、財良廃寺も川原寺式系や東大寺式系の軒瓦類が採集されており、その成立は白鳳期に遡る。伽藍配置の詳細など今後の調査に帰する部分が大きいが、遠からず郡司層の居住空間自体も近傍に所在したと推定される。

このように、当地は、古代寺院が造営されたり、「郡」を冠した地名が集中することなど、古代伊賀郡の中心域であったと思われるが、こうした古代の公的施設を考える上で重要な視点となるのが古代官道である。飛鳥から東国に至る主要道は、この時期、名張市美旗古墳群の脇をすり抜けて伊賀市古郡に入り、そのまま木津川左岸を北上、下郡を越えたところで木津川を渡って東進、伊賀市市部にある森脇遺跡付近で再び北進に転じ、伊賀国分寺を経て伊賀国府に至るルートが想定されている。⁽¹⁰⁾つまり、この想定による限り、三石代遺跡は「古代東海道」ともいいうべき主要道上ないしはその縁辺に位置する遺跡ということになる。同様の遺跡として、古郡の高賀遺跡⁽¹¹⁾、下神戸の浮田遺跡⁽¹²⁾、下郡の下郡遺跡などがあるが、このうち高賀遺跡では奈良期の掘立柱建物群と円面鏡などが出土している。

中世期の状況は、特に中世前半は不明な部分が大きいが、前述の高賀遺跡で総柱の大型掘立柱建物が発掘されたのをはじめ、才良遺跡や浮田遺跡、やや北側にはずれるが北堀池遺跡などでも当該時期の遺構が確認されている。

中世後期～戦国期にかけては、一般集落の様相は明らかではないが、下郡遺跡をはじめ各地で居館遺構（中世城館）が営まれており、下郡遺跡では中世館の堀から木製品や鋸等の鉄製品なども出土してい

⁽¹²⁾ る。伊賀におけるこれら中世城館の一般的成立時期は、最も年代の指標になる信楽焼擂鉢の年代観から14世紀末～15世紀前葉頃と推定されており、最終的に伊賀惣国一揆として結集する小領主層がヨコに連携する動きが顕在化する。

こうした小領主連合による伊賀支配を終わらせたのが北畠（織田）信雄を中心とした織田勢による伊賀侵攻で、天正6年には侵攻の拠点として三石代遺跡の対岸に三重県屈指の中世山城、丸山城⁽¹³⁾が築造された。この動きに対し、小領主層を中心とした地元勢は、三石代遺跡の南東側にある天童山寿福寺に集結、丸山城に押し出して一度は織田勢を退けたと地元伝承は伝える。ちなみに『信長公記』には当地をめぐる抗争の記述はないが、神宮文庫蔵の『小川新九郎覚書』（北畠旧臣、小川新九郎が江戸期に子孫に伝えるために記したとされる自己の回想録）には丸山城をめぐる抗争も記されており、地元伝承も断片的ではあるが何がしかの事実を伝えているものと思われる。ちなみに丸山城の虎口は、城郭史の観点からは典型的な織豊系城郭に特徴的なものとされ、天正年間の指標のひとつになっている。⁽¹⁴⁾ 三石代遺跡周辺には、上神戸に丸山城に対抗するかのような発達した郭形態を示す我山城⁽¹⁴⁾ が存在するほか、各地に小領主層の平時の拠点である居館遺構が点在している。⁽¹⁵⁾

このように、三石代遺跡周辺の上野盆地南部地域は、主要道路に沿う立地であることを背景に一貫して伊賀国における重要拠点地域のひとつであり、壬申の乱や織田勢の侵攻など日本史を彩る著名な歴史事件の舞台としてもしばしば顔を見せる地域でもあった。

（穂積）

〔註〕

- (1) 三重県埋蔵文化財センター『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊』1990
- (2) 笠井賢治「田中遺跡」『上野市史考古編』伊賀市 2005
- (3) 三重県埋蔵文化財センター『天童山古墳群発掘調査報告』2006
- (4) 伊賀市教育委員会『沢代遺跡発掘調査報告』2006
- (5) 青山町教育委員会ほか『七ヶ城遺跡・七ヶ城古墳群・槻ヶ森遺跡発掘調査報告書』1995
- (6) 三重県埋蔵文化財センター『三重県上野市比土城之越遺跡』1992
- (7) 前掲註(3)文献
- (8) 上野市教育委員会『下郡遺跡発掘調査報告』1978
- (9) 早瀬保太郎『伊賀史概説上』1973
- (10) 山田猛「第二 伊賀」『新修国分寺の研究 第二卷』吉川弘文館 1991
- (11) 三重県埋蔵文化財センター『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第3分冊』1991
- (12) 三重県教育委員会『下郡遺跡第三・四次発掘調査概報』1982
- (13) 山田猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会 1990
- (14) 千田嘉博「織豊系城郭の構造－虎口プランによる縄張編年の試みー」『史林』70-2 1987
- (14) 伊勢中世城館調査会『伊賀の中世城館』1997

第3章 旧地形と層序の概要

第1節

三石代遺跡は、木津川左岸（西岸）、標高154mほどの自然堤防上に立地する。

この地は、比土・古郡小盆地から上神戸・下神戸小盆地の狭隘部を通って北流する木津川が、上野盆地の中央部へと流れ出る地に相当している。西側に

旧地形

は、木津川にほぼ併行して南北丘陵が走り、丘陵上には天童山古墳群が所在する。

西側丘陵と、三石代遺跡の乗る自然堤防との間に、自然堤防の後背低地があり、ある時期（かなり古い時代）には木津川の旧河道（枝流含）であった

可能性が高い。自然堤防と、後背低地の比高差は、現地表面で約1mである。つまり、三石代遺跡は、木津川沿いの東側が自然堤防のトップに相当して最も高く、遺跡中央が一段低いものの安定した面として続くが（途中、旧河道S R 163が入っている）、そこを過ぎると西側は後背低地に向かって低くなっていく地形となっている。

このように、三石代遺跡の所在する場所は、周辺地形よりも一段高くなった微高地となっており、排水などの安定性は高かったと思われる。実際、この微高地には畑が営まれているのに対し、その周囲では水田を形成していることも、この微高地の安定性を示すものであろう。

ただし、自然堤防の形成は、基本的に木津川の堆積作用によるものであり、砂礫層で形成されている。このため、三石代遺跡の遺構検出面は周辺地域に比べて一段高い地形を形成しているといえ、基本的

には砂層のため安定した基盤層とは言いがたく、遺構検出においては困難を極めた。

なお、現況地形を仔細に観察すると、調査区を含む部分は南北300m、東西130mほどの橢円形状微高地のほぼ中央部に相当している。この微高地は、東側を流れる木津川によってある時期に北東部分が削られている可能性も考慮すると、本来はもう少し長方形形状を呈していたことも想定される。

このように見えてくると、三石代遺跡は盆地中央部へ入ろうとする木津川左岸の微高地上に立地し、西側丘陵部からの出水はこの微高地との間に入る西側後背低地によって遮断される極めて安定した場所に占地していることがわかる。遺構が直接形成される面が砂の堆積層であることも、水捌けの良さに転化する。このような立地上の安定性こそ、三石代遺跡に集落が形成された立地上の前提となったものであろう。

第2節

三石代遺跡の土層は、1～5層が近現代の耕作に伴う耕作土・盛土で、その下位の6層も土質の締まりが全くなく、層中に現近代の遺物も含まれることから近世以降の整地や客土の類と判断された。

この6層を取り払った7層灰白細砂の上面が最初の遺構検出面である（上層遺構面）。その面は、中近世以降の耕作跡を中心とした面であるが、遺構自体の安定性は悪く、攪乱も相当数及んでいるものと判断された。ただし、元の地形が自然堤防のため当初から高かった調査区東側（S R 163以東）では7層自体の堆積がなく、その部分では6層（6層の堆積自体が確認できない調査区東側では5層）の下面で上層と下層を同時検出した。

一方、下層面は、上層遺構面が乗る7層やそれに続く堆積層である9層～11層を除去した後、その下層となる黄色系の砂礫土上面で遺構検出を行った（下層遺構面）。この面は、灰黄褐色砂礫土を基本としてお

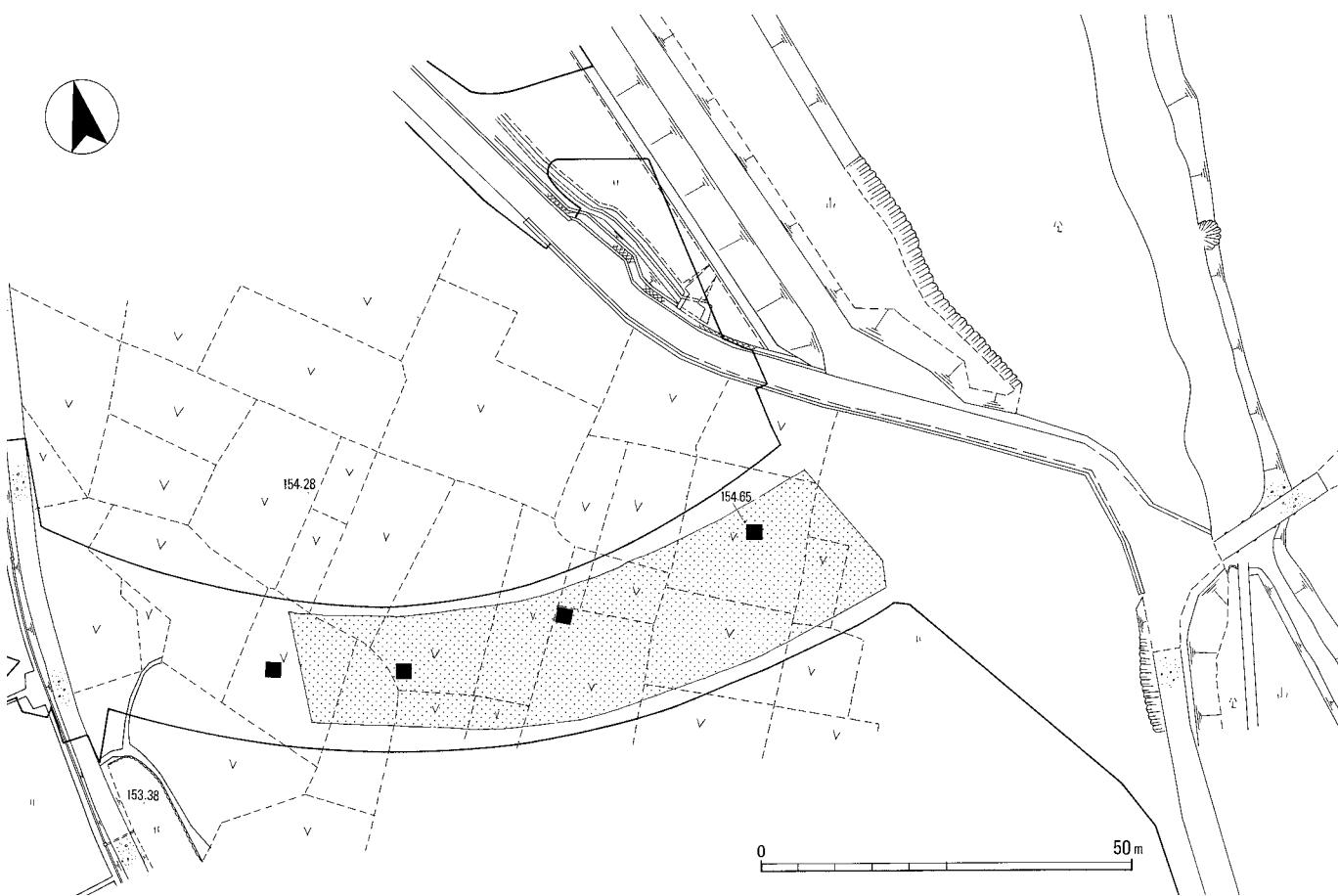
り、色調や土質の差異で別層名としているがS R 163以西では12層、以東では34～35層が相当し、これらは基本的にはS R 163の貫入によって分断された同一層序と判断される。これら層の上面(検出面)は、より上位層からの汚れ等の浸潤のため検出しづらいところも多かったが、それら部分についてはいくぶん掘り下げて検出した。この下層面は、三石代遺跡におけるメインの遺構面であり、古墳時代から中世までの遺構を含む。

以上が基本層序となるが、それ以外に付与した層名をみておくと、21層～33層はS R 163の埋土で、S R 163は12層をベースとして存在している（東側では34層がベース層）。また、14～16層、18～20層はS R 163が存在したために窪んだ部分に堆積した層であるが、西側が性格不明の貫入層である17層によって分断されており、基本層序との関連がいまひとつ明瞭にされ得なかった。

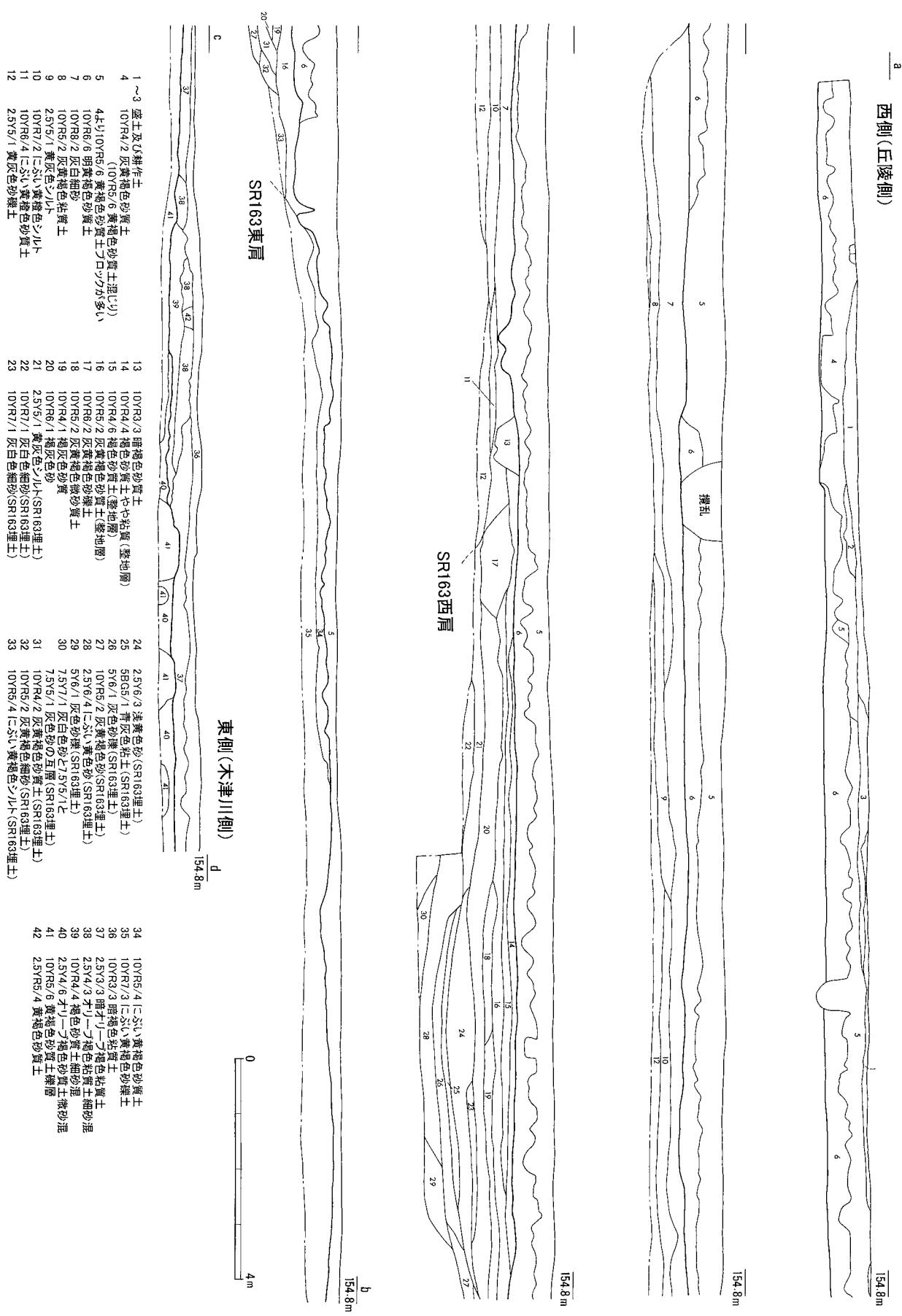
（穂積）



第2図 調査区周辺地形図 (1:5,000) [■:遺跡範囲 ■:調査範囲]



第3図 調査区位置図 (1:1,000) [■:試掘坑]



第4図 調査区北壁土層断面図 (1 : 100)

第4章 遺構

第1節 遺構配置の概要

三石代遺跡では、前章でみたように、上下2面の調査面が存在した。

このうち上層面は、第7層灰白色細砂層の上面で検出したもので、中近世以降の耕作痕を中心としている。ただし、堆積の浅い部分では、下層遺構面まで検出してしまった部分もあり、図上では下層部分が若干含まれているところもみられる。

一方、下層面は、12層・34～35・40～41層の上面で検出したもので、上層遺構で深い遺構については本面まで掘り込みが及んでいるものもあった。この下層面は、三石代遺跡におけるメインの遺構面であり、主たる遺構はこの面で検出・掘削された。

下層面の調査は、最初、層の上面で遺構検出を行って掘削・図化した後、全体を少し掘り込んでから再度遺構検出を試みている。つまり、検出と掘削を2度にわたり繰り返したことになる。これは、他遺構との重複や上位層からの攪乱土の浸潤、それに砂層であることによる検出面の不安定さなどが重なって、ある程度まで掘り下げねば遺構のプランが明瞭に捉えられなかつたことによる。しかし、調査区北壁の土層観察の所見からは、基本的には当初検出を試みた面から掘り込まれた遺構が多いことがわかる。つまり、下層遺構面は、同じ層内で2度の遺構検出を試みたわけであるが、これは最上面で全ての遺構を把握することが困難であったためで、基本的には同

一面で存在していたものと判断される。

以下、下層遺構面における遺構配置の概要を確認しておこう。

古墳時代の遺構は、ほぼ調査区東半部に集中する。この部分は、木津川によって形成された自然堤防に相当し、東端部は木津川へ、西半部は調査区中央部（旧河道S R 163所在地）へ向かって落ちていく緩斜面となるが、このうち西側（S R 163側）へ向かって落ちていく部分に古墳時代の堅穴住居群がまとまって存在する。

古代～中世の遺構は、ほぼ調査区の全面で確認することができる。このうち、調査区の中央部から西側にかけての部分では、古代から中世の掘立柱建物群と土坑群が存在するが、集落東部に相当する調査区東側（木津川寄りの部分）には掘立柱建物はなく、堅穴住居1基と土坑を中心とした遺構が展開する。なお、これら遺構の一部は、それらが造られた以前に存在していた旧河道S R 163の埋没埋土の上面に形成されたものである。

西端部は、遺構密度は希薄になっていくが、若干のピットや土坑があり、中世期の小規模な掘立柱建物が存在している。

なお、下層遺構面においても木津川へ落ちていく調査区東端部を除いて、ほぼ全域に耕作痕かと推定される平行する素掘小溝が存在する。（穂積）

第2節

上層遺構は、耕作痕かと推定される素掘小溝を中心とし、それに若干のピットを伴うが、特に今回の報告に際して個別に報告する遺構はない。

全体として、これら素掘小溝は、南北主軸の溝がN 25～35°N、東西主軸の溝がほぼそれに直交する主軸

上層遺構

の方位を探っており、方位において一定の傾向がみられる。これら素掘小溝は、長さも最長で16m以内で一定しており、これを耕作痕とするなら畑1畝の長さに関連している可能性があろう。なお、素掘小溝は、南北主軸のものが大半を占める。（穂積）

第3節

1 古墳時代の遺構

三石代遺跡の古墳時代遺構は、調査区のほぼ中央、

下層遺構

旧河道であるS R 163の東側にまとまって存在している。それらは古墳時代の堅穴住居を中心とした遺構

群であるが、旧河道 S R163もその形成時期は古墳時代に遡るものと判断される。

a 壺穴住居

いずれも残りは極めて悪く、検出時にかろうじて輪郭の痕跡が確認されただけのものも多い。出土遺物から確実に古墳時代と判断できるものは少ないが、切り合い関係の新しいものに古墳時代遺物が認められたことから、奈良時代の S H160を除く壺穴住居はすべて古墳時代に属するものと判断した。以下、個別にみておこう。

S H151 やや歪な形状であるが、これは流出もしろくは削平のため、北側の残りが悪いためであろう。検出面が砂礫土のためプラン確認が困難で、周溝や主柱穴も未確認なため壺穴住居とするには疑問も残るが、一応、長辺4.8m×短辺4.4mの略正方形を呈する壺穴住居の可能性を考えている。住居中央やや南東寄りに焼土があり、炉の痕跡と思われる。埋土から、古墳時代前期の土器が出土した。

S H152 長辺4.8m×短辺4.0mの略正方形プランの壺穴住居で、西側を S H151に切られる。周溝や主柱穴は確認できなかったため住居として疑問も残るが、住居ほぼ中央に小穴があり、炉跡の可能性がある。図示しうるほどの出土遺物はないが、炉跡とすると古墳時代前～中期と推定される。

S H153 長辺4.8m×短辺4.0mの長方形プランの壺穴住居である。住居東壁中央に焼土痕があり、袖部などが削平されたカマドの痕跡と推定される。埋土から古墳時代後期の土器が出土している。

S H154 一辺4.7mの正方形プランの壺穴住居と考えているが、炉やカマドの存在を推測させる焼土痕や周溝がなく、疑問も残る。ただし、1個ではあるが、住居の南西主柱穴に相当する柱穴が認められる。古墳時代前期の土器が出土した S H155を切って造られているが、同じく隣接する S H156との関係はピット重複のため不明である。

S H155 S H154に切られて存在する方形プランの壺穴住居である。一辺は4.8m～5.4mであるが、東側は別の壺穴住居の重複のため明らかでない。埋土から古墳時代前期の遺物が出土している。切り合い関係から S H157に後続し、S H154・156・158～159に先行する。

S H156 1辺が3.7mの比較的小規模な方形プランの壺穴住居であるが、別の壺穴住居の重複のため大半が不明で、詳細はわからない。切り合い関係では、古墳時代前期の土器をもつ S H155に後続し、中期の土器をもつ S H159に先行する。

S H157 切り合い関係でみると、相互に重複する壺穴住居 S H154～162のなかで最も先行する壺穴住居であるが、住居自体の残りは少なく、詳細は不明である。ただし、他の壺穴住居の所属時期から、古墳時代前期には遡ると考えられる。

S H158 切り合い関係から S H155～157に後続する壺穴住居で、4.5m×3.9m以上の方形プランを呈する。

S H159 切り合い関係から奈良時代の壺穴住居 S H160よりは古く、S H156と S H161よりは新しい壺穴住居で、長辺6.2m×短辺5.0mの長方形プランを呈する。埋土より古墳時代中期の土器が出土している。

S H161 4.0m×3.0m以上の方形プランをもつ壺穴住居である。本住居跡自体からの出土遺物はないが、切り合い関係から古墳時代中期の土器が出土した S H159よりも先行するため、本住居跡も古墳時代前期には遡る。

S H162 切り合い関係から S H161に先行する壺穴住居である。方形プランであることは確認できるが、調査区際に存在することと、他の壺穴住居に切られた部分が大きいことから詳細は不明である。

b 流路・その他

S R163 調査区のほぼ中央部に存在する旧河道で、幅約10m、深さ0.8mを測る。流路底面には人頭大の礫が一面に存在するが規則性に乏しく、自然形成の可能性が高い。埋土は基本的に砂層である。埋土から古墳時代～古代の遺物が出土しているほか、本遺構埋没後に広汎な掘立柱建物の成立をみており、基本的に古代集落の形成前に存在した南西から北東に向かって流れる自然流路とみられる。東側に所在する木津川が幾重にも分流しつつ北へ流れていった頃の名残であろう。

S Z164 S R163の東岸（右岸）に存在する。拳大から人頭大の礫が長径6.0mから短径4.0mの範囲で面的に存在する。本来はもう少し広範に存在した

ものと思われる。また、南東側が高く、北西側（S R163側）へ向かって低くなっている。本来はS R163の法面に投棄された礫の溜まりであった可能性もある。その場合は、S R163自体がもう少し大きなものであった可能性を示す。

整地層 S R163と多少重複してその東側に広がる整地層部分で、ちょうど古代の掘立柱建物であるS B146～149などが建てられた部分をほぼ覆っている。出土遺物からも時期的には古代に属しようが、整地自体は切り合い関係からも掘立柱建物群の成立以前に形成されたものである。

（穂積）

2 古代の遺構

古代の遺構は、調査区東方で古墳時代の堅穴住居と重複する形で堅穴住居1棟等がある他は、主に調査区中央部のS R163や整地層の上面で確認されている。この場所からは、掘立柱建物4棟と土坑数基が確認されている。

a 堅穴住居

S H160・S K40 長辺4.4m×短辺2.6m以上の略正方形プランの堅穴住居で、南側は調査区外に伸びる。古墳時代の堅穴住居S H161・162を切る。周溝や主柱穴は確認できなかったため住居として疑問も残る。北東部にS K40があるが、これはS H160の貯蔵穴であった可能性が高い。S H160、S K40とともに奈良時代後期の土師器杯や甕が出土している。

b 掘立柱建物

4棟が確認されている。遺構の検出に関しては、現地が砂層で、柱穴の輪郭が不明瞭であったため、建物規模も明瞭でないものがある。

S B146 長辺3間（6.4m）×短辺2間（4.9m）、総柱の南北棟で、方位はN9°Eである。東辺と南辺には不明瞭だが柱穴の痕跡があり、規模が長辺4間（8.5m）×短辺3間（7.3m）となる可能性もある。柱堀形は1辺約2mの方形、柱痕跡は径約0.6mである。S B149と大きく重複し、S B149に切られる。遺物は平安時代中期と考えられる須恵器甕や土師器杯とともに、混入品と考えられる瓦器皿が出土している。

S B147 4間（9.1m）×1間以上（2.1m以上）、総柱で東西棟と考えられる。方位はE18°Sである。柱堀形は1辺約2.0mの方形、柱痕跡は径約0.6mであ

る。南部が調査区外に伸びる。遺物は小片が多く細かい時期の特定は難しいが、遺構の形態がS B146等と類似しており、同時期のものと想定する。

S B148 1辺が2間以上（4.2m以上）で大部分が調査区外に伸びるため全様は不明である。方位はE18°Sである。柱堀形は1辺約2.0mの方形、柱痕跡は径約0.6mである。S B149と大きく重複する。遺物は、土師器、須恵器が少量出土しているのみだが、ほかの建物との類似性から平安時代と想定する。

S B149 長辺4間（8.4m）×短辺3間（6.4m）、総柱の南北棟で、方位はN12°Eである。柱堀形は1辺約2.0mの方形、柱痕跡が径約0.6mである。S B146と大きく重複し、S B146を切る。遺物は、古墳時代、奈良から平安時代、鎌倉時代のものが出土しており、混入が疑われるが、主体は平安時代である。

c 土坑

S K18 調査区東端で確認した。長径1.4m×短径1.0mの楕円型の土坑で、中からはこぶし大の礫が出土している。遺物は、奈良から平安時代の土師器甕が出土している。

S K105 調査区中央を流れるS D78に切られる形で確認した。長辺2.8m×短辺1.4mの隅丸方形の土坑で、遺物は須恵器、土師器杯の小片が出土している。

S K110 調査区中央を南北に流れるS D78の東で確認した。径1.8mの円形土坑と考えられるが、耕作溝に切られる。土師器、須恵器の小片が出土している。

3 中世の遺構

中世の遺構は、調査区中央部から西部にかけて分布している。塙1列、掘立柱建物4基、埋葬施設と考えられる土坑4基のほか、性格不明の土坑・溝が確認された。

a 塙

S A141 長さ6.1mの塙である。方位はE0°で、S B144・145と平行する。柱堀形は1辺約0.6mの略方形、柱痕跡が径約0.3mである。柱間はそろっていない。

b 掘立柱建物

S B142 3間以上（6.3m）×3間（6.3m）、総柱で南北棟と考えられる。方位はN18°Eである。柱堀

形は径約0.6mの円形、柱痕跡が径約0.2~0.3mである。北部が調査区外に伸びる。12世紀前半の瓦器椀が出土している。

S B143 2間以上(4.2m以上)×2間(4.2m)、側柱で南北棟と考えられる。方位はN37°Eである。柱堀形は径約0.6mの円形、柱痕跡が径約0.2mである。南部が調査区外に伸びる。また、S B142と隣接する。距離や建物方向から同時存在とは考えられないが、重複しておらず前後関係は不明である。

S B144 3間(7.2m)×3間(5.3m)、総柱の南北棟で、方位はN0°である。柱堀形は1辺約0.7m、柱痕跡が約0.2~0.3mである。S A141と1.1m隔てて平行する。S B145と重複して切られるためか、確認されていない柱穴が多い。柱堀形は1辺約0.6mの略方形及び円形、柱痕跡が径約0.3mである。

S B145 3間(7.2m)×3間(6.6m)、総柱の南北棟で、方位はN0°である。柱堀形は1辺約0.7mの略方形及び円形、柱痕跡が約0.2~0.3mである。S A141と1.4m隔てて平行し、S B145を切る。柱堀形は1辺約0.6mの略方形、柱痕跡が径約0.3mである。13世紀前半の瓦器椀が出土している。

S B150 3間(6.6m)×3間(5.1m)、側柱の東西棟で、方位はN21°Eである。柱堀形は1辺約0.5~0.7mの円形、柱痕跡が約0.2mである。13世紀前半の瓦器椀・皿が出土している。

c 墓葬施設

S X109 調査区中央部、S D78の東側で確認した。長径1.4m、短径1.0mの長円形、深さ0.4mである。底は平らで、底面から0.3mほどの高さに20cmほどの石が置かれている。遺物は瓦器椀が出土している。配石墓であろうか。

S X114 S B146・149を切る形で確認した。長径2.1m、短径1.1m、深さ0.2mの略方形で、主軸はN40°Wである。11世紀後半の瓦器椀1点が中央から出土している。上部が削平された埋葬施設の可能性がある。

S X117 S B146・149の東で確認した。長辺3.2m、短辺1.4~1.9mの略方形で、主軸はほぼ東西方向である。中に長辺2.0m、短辺0.6~1.1mの主体部があり埋葬施設であると考えられる。瓦器椀、土師器皿が出土している。

S X118 S X117の東で確認した。耕作溝に切られるが、長辺2.8m以上、短辺1.4mの略方形で、主軸はN29°Eである。長辺2.0mの主体部があり、埋葬施設であると考えられる。13世紀前半の瓦器椀が出土している。

d 土坑

調査区中央付近で、0.5~1.5mほどの隅丸方形や不定円形などの形をした土坑を多数確認した。これらの土坑の中には、こぶし大の礫を含むものが多く見られた。S X118との関連から、中世墓である可能性もあるが、礫がかたまって出土しないなどの違いもあるため、ここでは土坑とした。

なお、古代の遺物のみの出土や、遺物が出土していないものもあるが、それらも形状や礫を含むことの類似性から、この時期のものと考えた。

S K79~86・112・165 S B144・145の東で確認した。0.8~1.4mの隅丸方形もしくは不定形の土坑で、中からはこぶし大の礫が出土している。S K79・83~84からは瓦器が出土している。S K85・86からは土師器小片しか出土しておらず、S K80・81・112・165からは遺物の出土はないが、他の遺構との類似性からこの時期のものとした。S K82からは、瓦器とともに、奈良～平安時代の土師器甕も出土している。

S K87・92~95 調査区中央を流れるS D78に切られる形で確認した。1~2m前後の不定形もしくは隅丸方形の土坑で、中からはこぶし大の礫が出土している。S K92・95からは、瓦器とともに古代の土師器杯が出土している。S K87・93からは中世の遺物は出土せず、古代の土師器が出土しているのみで、S K94からは遺物が出土していないが、上述のS K79等との遺構の形状の類似やこぶし大の礫が出土することなどから、遺物は混入と考え、この時期のものとした。

S K106 調査区中央を南北に流れるS D78の東で確認した。ピットと攪乱坑に切られる。瓦器皿が出土している。

S K107・108 調査区中央を南北に流れるS D78の東で確認した。径0.7~0.8mの円形土坑である。遺物は出土していないが、他の土坑との類似からこの時期のものとした。

S K111・115 S B146・149を切る形で確認した。

S K111はこぶし大の礫が集積したもの、S K115は長径1.0mほどの不定円形の土坑で、中からはこぶし大の礫が出土している。遺物はS K111からは土師器、須恵器の小片のみが出土し、S K115からは遺物の出土はない。他の土坑との類似からこの時期のものとした。

S K113 S B147を切る形で確認した。長径1.1m×短径0.9mの不定円形の土坑である。中からはこぶし大の礫が出土している。遺物は出土していないが、他の土坑との類似からこの時期のものとした。

S K121・122 S D120を切る形で確認した。1.6～0.6mの不定円形の土坑である。中からはこぶし大の礫が出土している。S K121からは土師器、須恵器の小片が出土し、S K122からは土器は出土していないが、他の土坑との類似からこの時期のものとした。

4 時期不明の遺構

a 溝

上層でも確認された耕作溝と考えられる溝（N25°E～N35°Eおよび、それに直行した方向のもの）と方向が類似した溝が多数確認された。遺物は、古代

から中世の遺物を含む。切り合い関係から中世以降と考えられるが、詳細な時期は不明である。ここでは、幅の広い特徴的な溝について概述する。その他の遺構については、遺構一覧表を参照されたい。

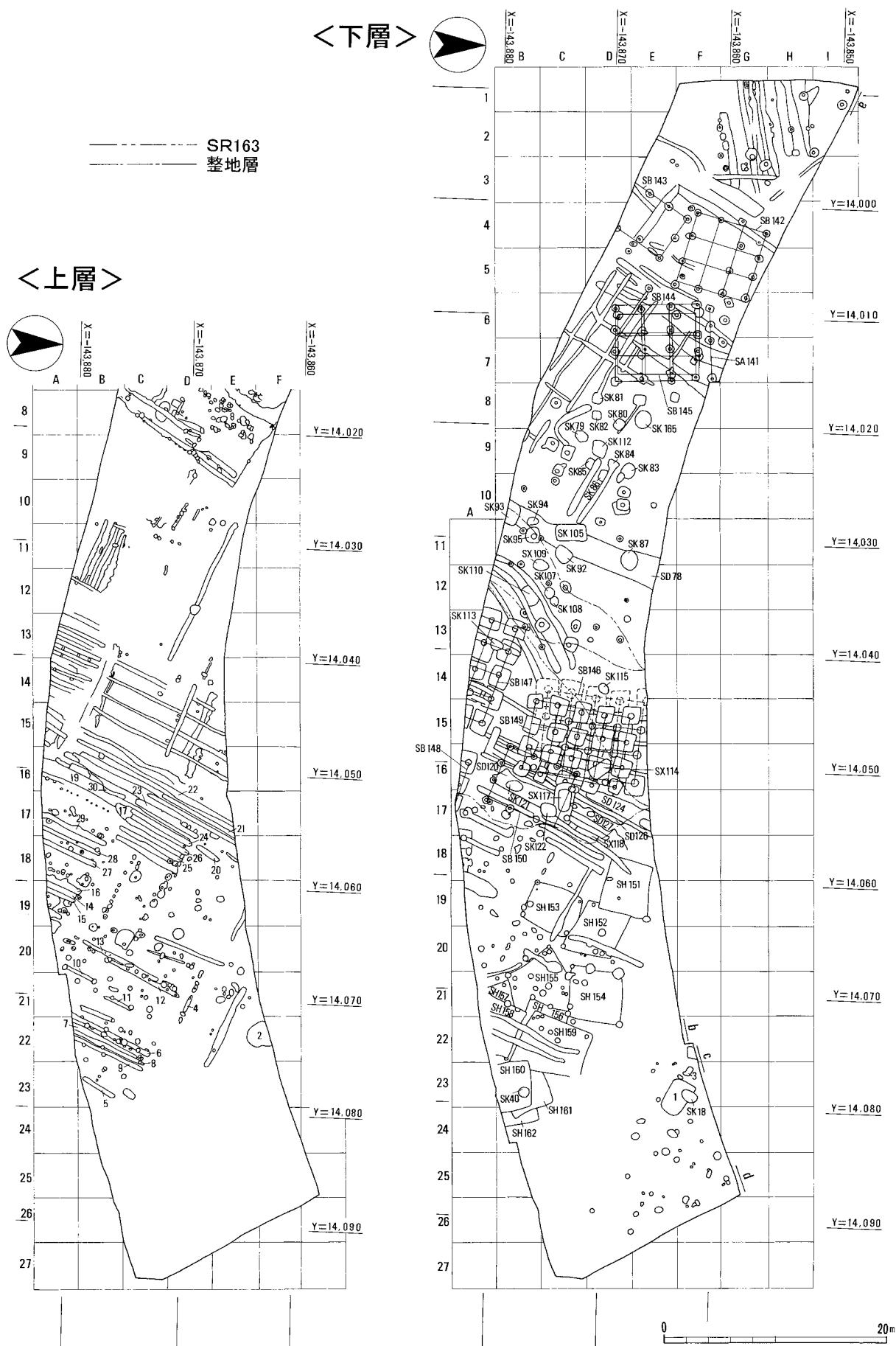
S D78 調査区中央部で確認した。幅1.6～2.6m、深さは0.1～0.2mである。方向はN22°Eである。S K87・92～95・105を切る。遺物は小量しか出土していない。

S D120 S B146・149の東で確認した。幅1.4m、深さ0.15mの溝である。方向はN28°Eで、耕作溝と同じ方向である。S B150を切り、S K121・122、S X117に切られる。遺物は平安時代初頭の須恵器杯が出士しているが、混入品であろう。

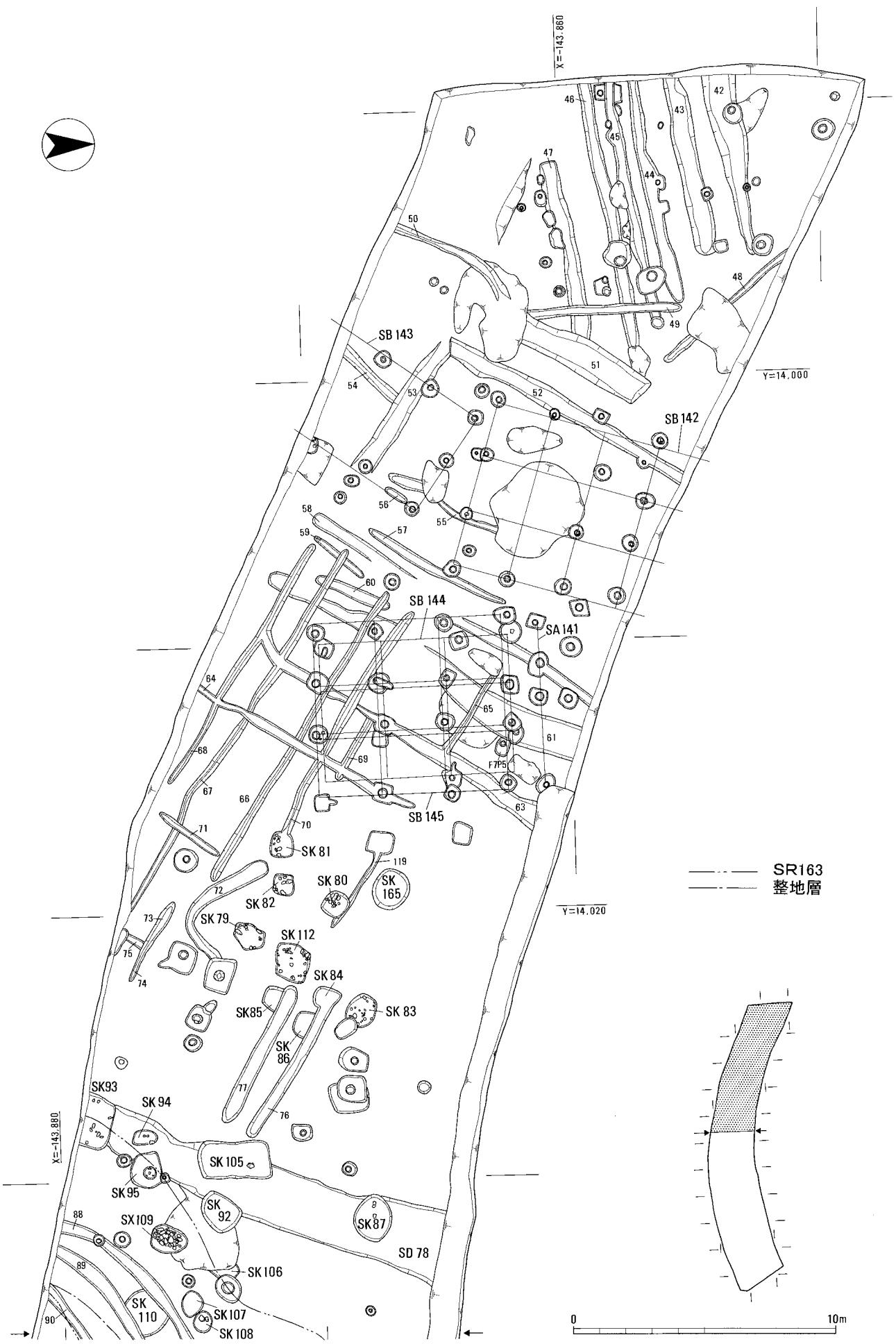
S D124 S D120の西にほぼ平行して確認した。幅2.8m、深さ0.15mの溝である。S B149を切る。遺物は出土していない。

S D127 S D120の北、S D124の東にほぼ平行して確認した。幅0.8m、深さ0.1mの溝である。S K117に切られる。

(西村)



第5図 遺構配置図 (1 : 500)



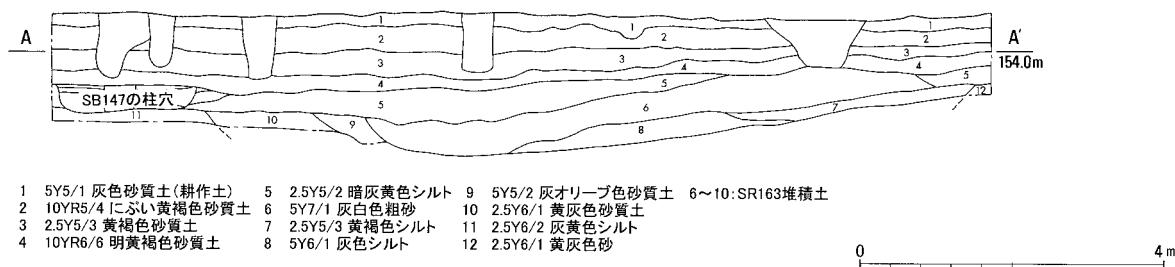
第6図 遺構平面図 (1) (1:200)



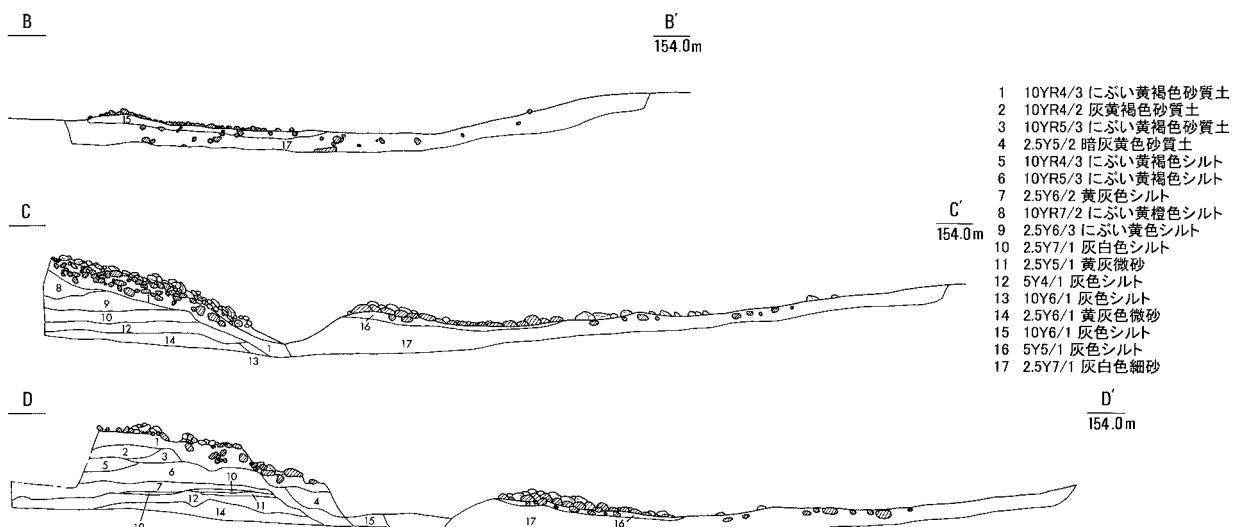
第7図 遺構平面図（2）(1:200)



<トレーニング南壁土層断面図>



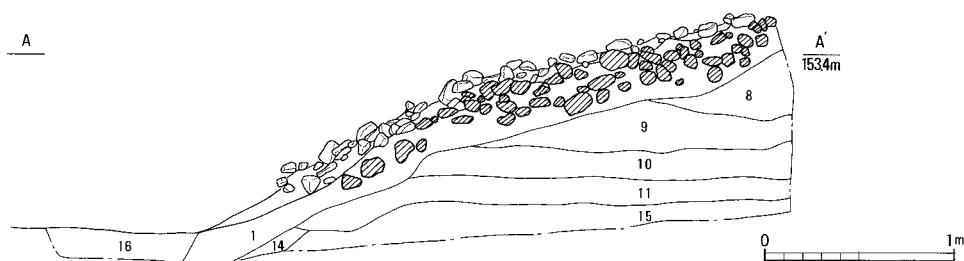
<SR163土層断面図>



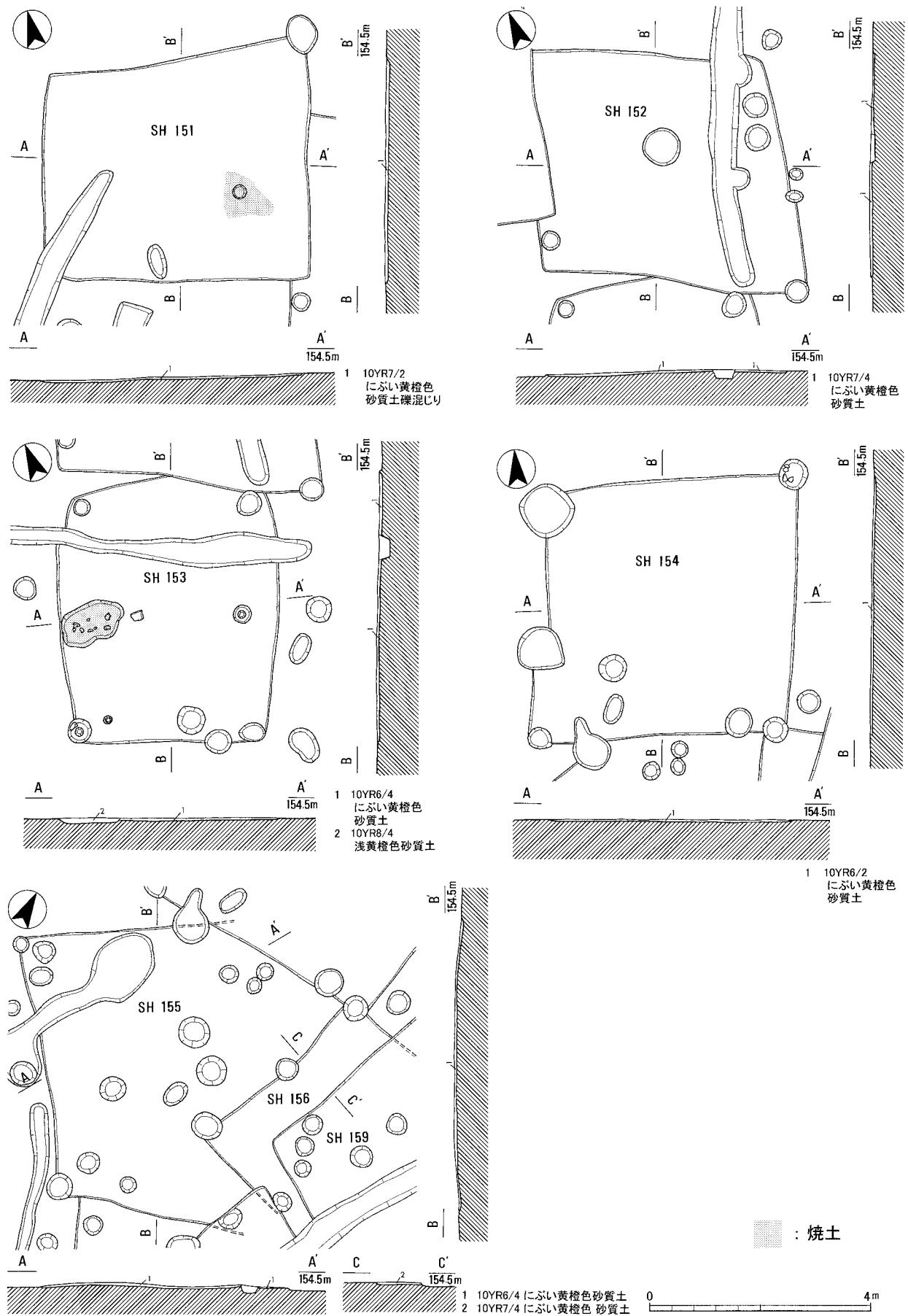
第8図 SR163実測図 (平面図 1:200、断面図 1:100)



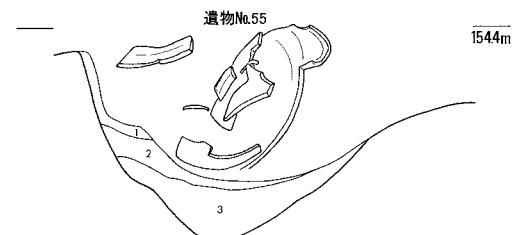
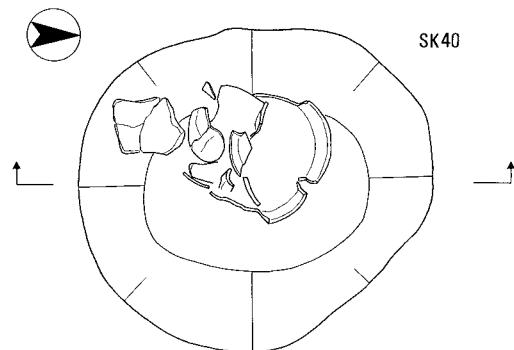
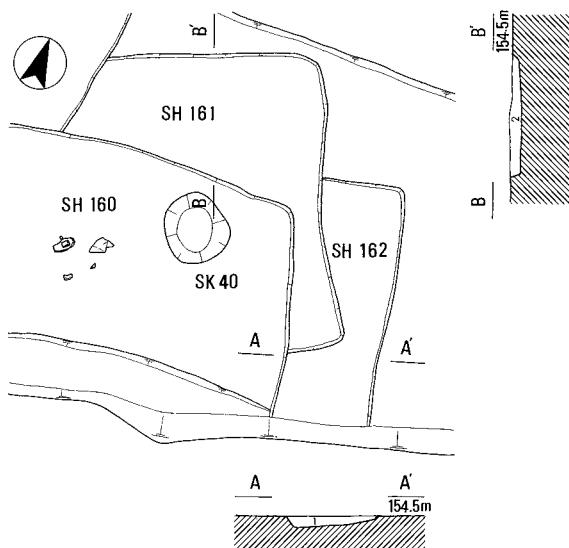
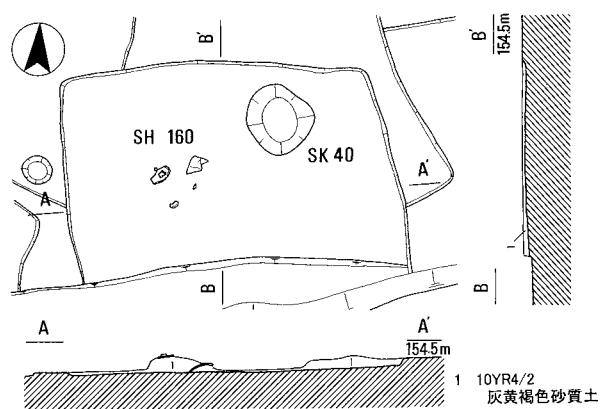
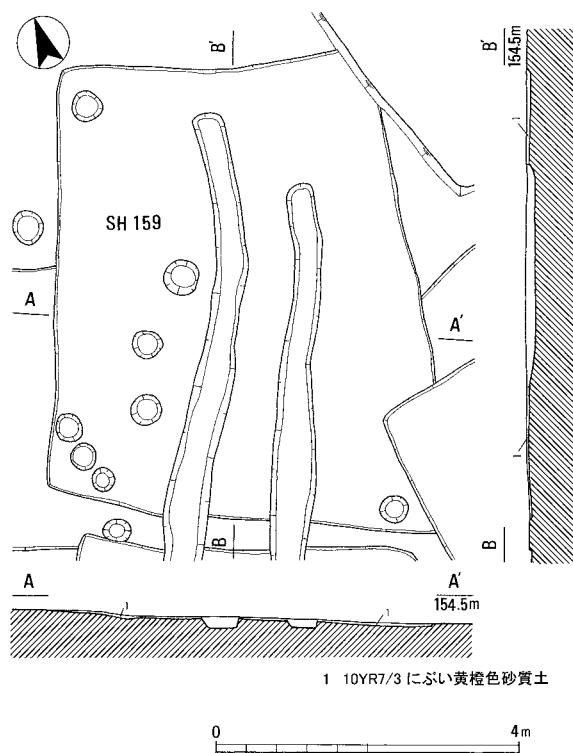
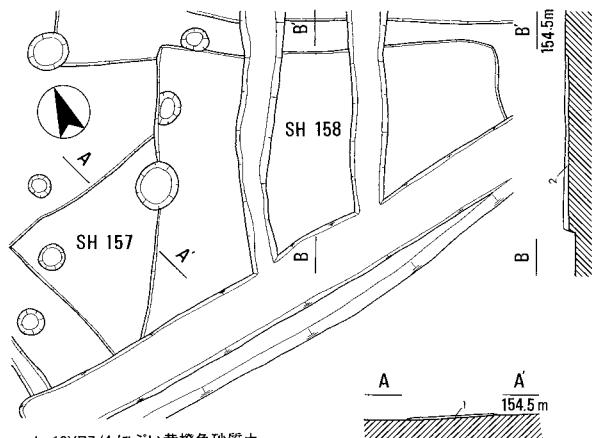
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
 4 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
 5 2.5Y6/2 黄灰色シルト
 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
 7 10YR7/2 灰色シルト
 8 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト
 9 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
 10 2.5Y7/1 灰白色シルト
 11 5Y4/1 灰色シルト
 12 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
 13 2.5Y7/1 灰白色シルト
 14 10Y6/1 灰色シルト
 15 2.5Y6/1 黄灰色微砂
 16 2.5Y7/1 灰白色細砂



第9図 SZ 164実測図 (1 : 40)



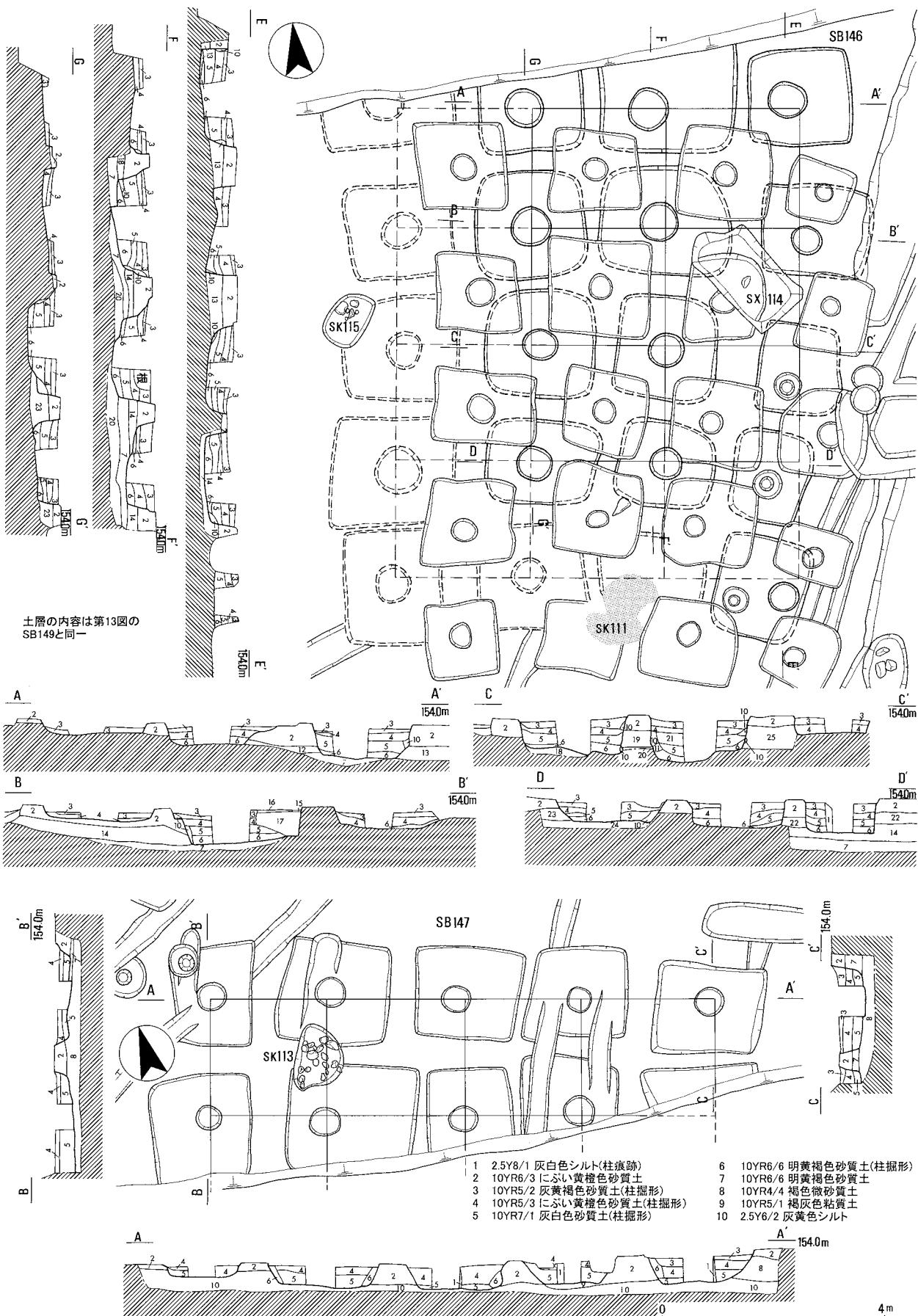
第10図 SH 151~155実測図 (1 : 100)



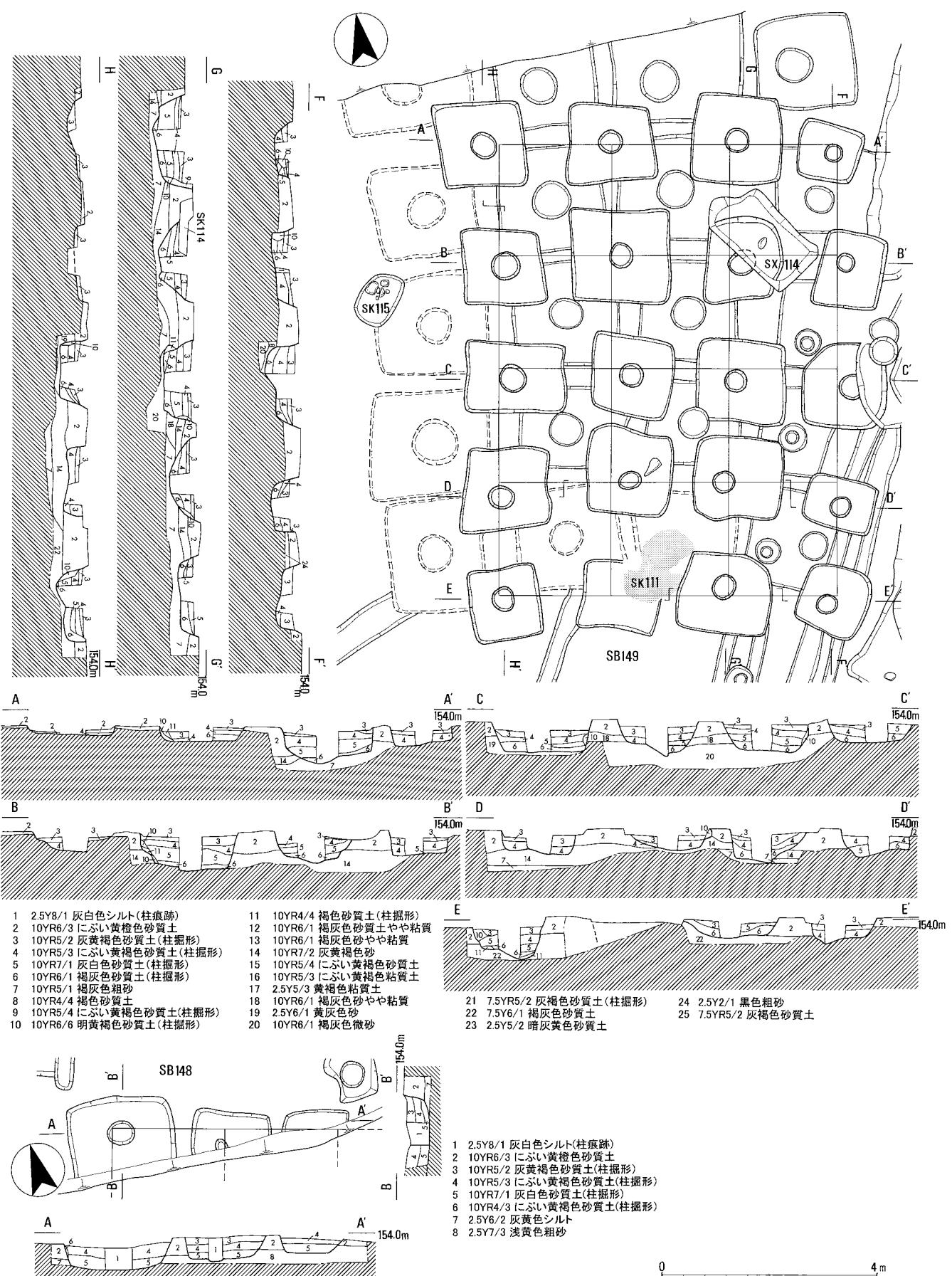
1 10YR3/2 黒褐色砂礫土
(10YR6/4 にぶい黄橙色砂礫土混)
2 10YR3/3 暗褐色砂礫土

1 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に炭化物・焼土混
3 10YR4/4 褐色砂質土様混

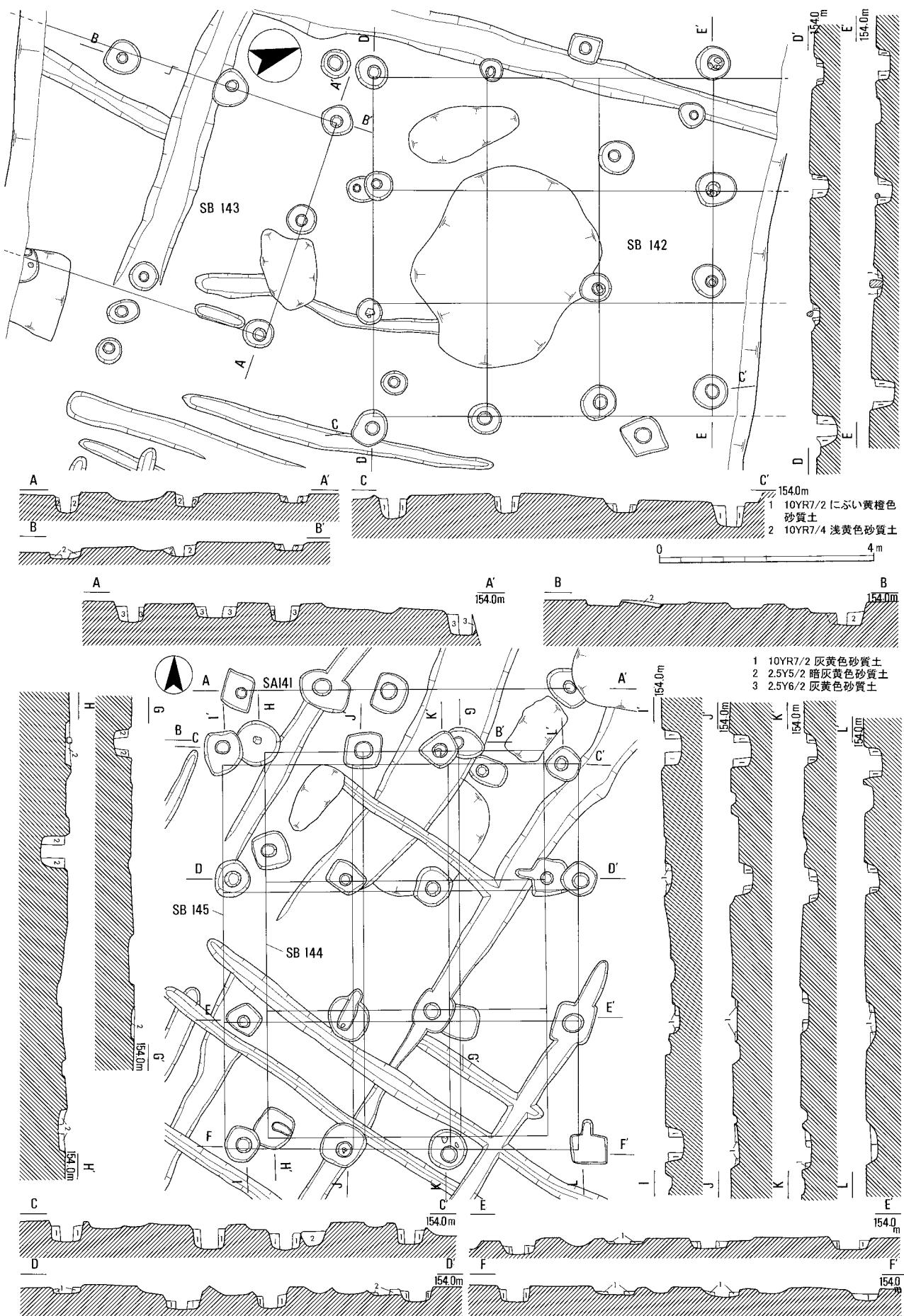
第11図 SH157~162実測図 (1:100)、SK40遺物出土状況図 (1:20)



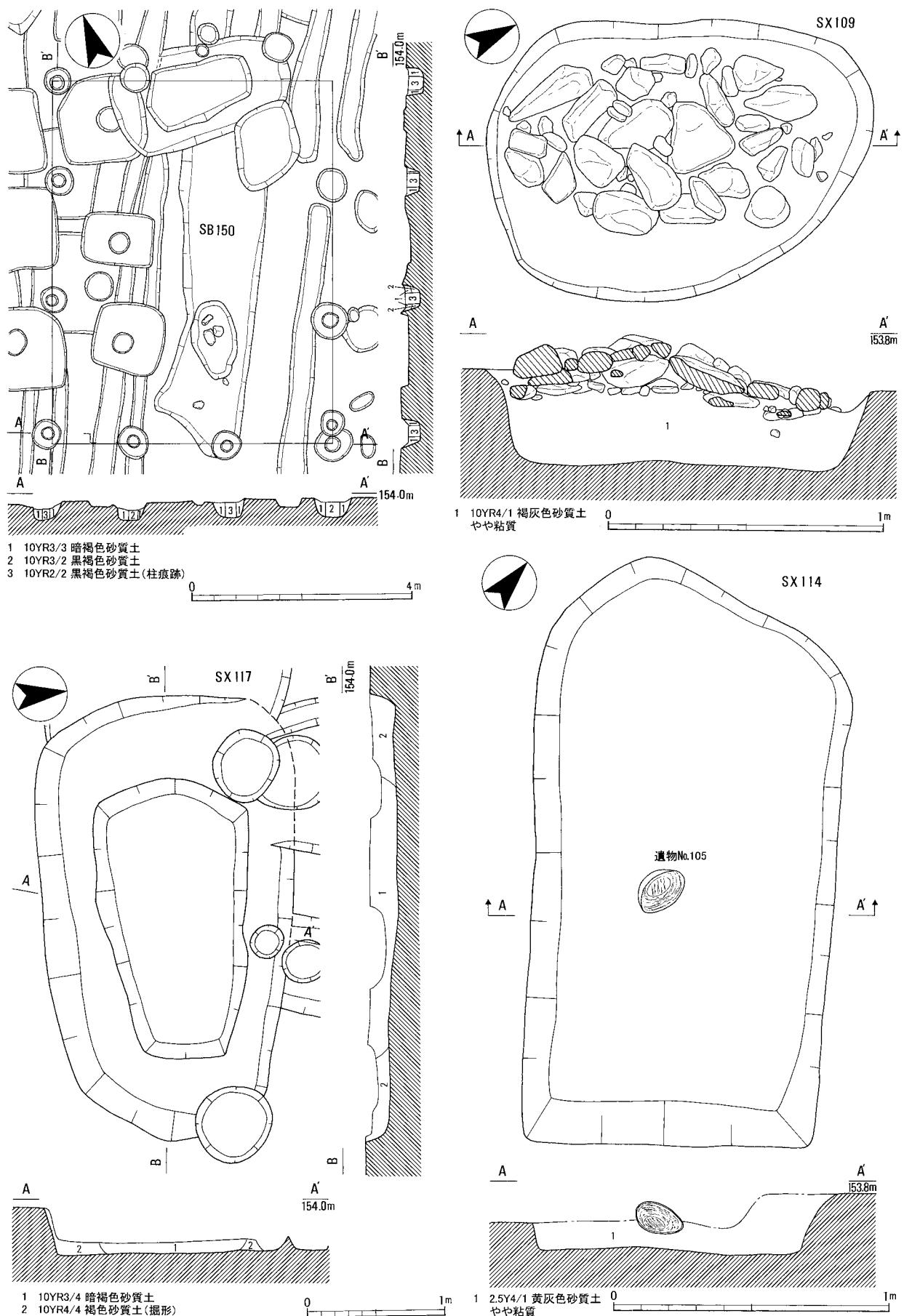
第12図 SB146・147実測図 (1 : 100)



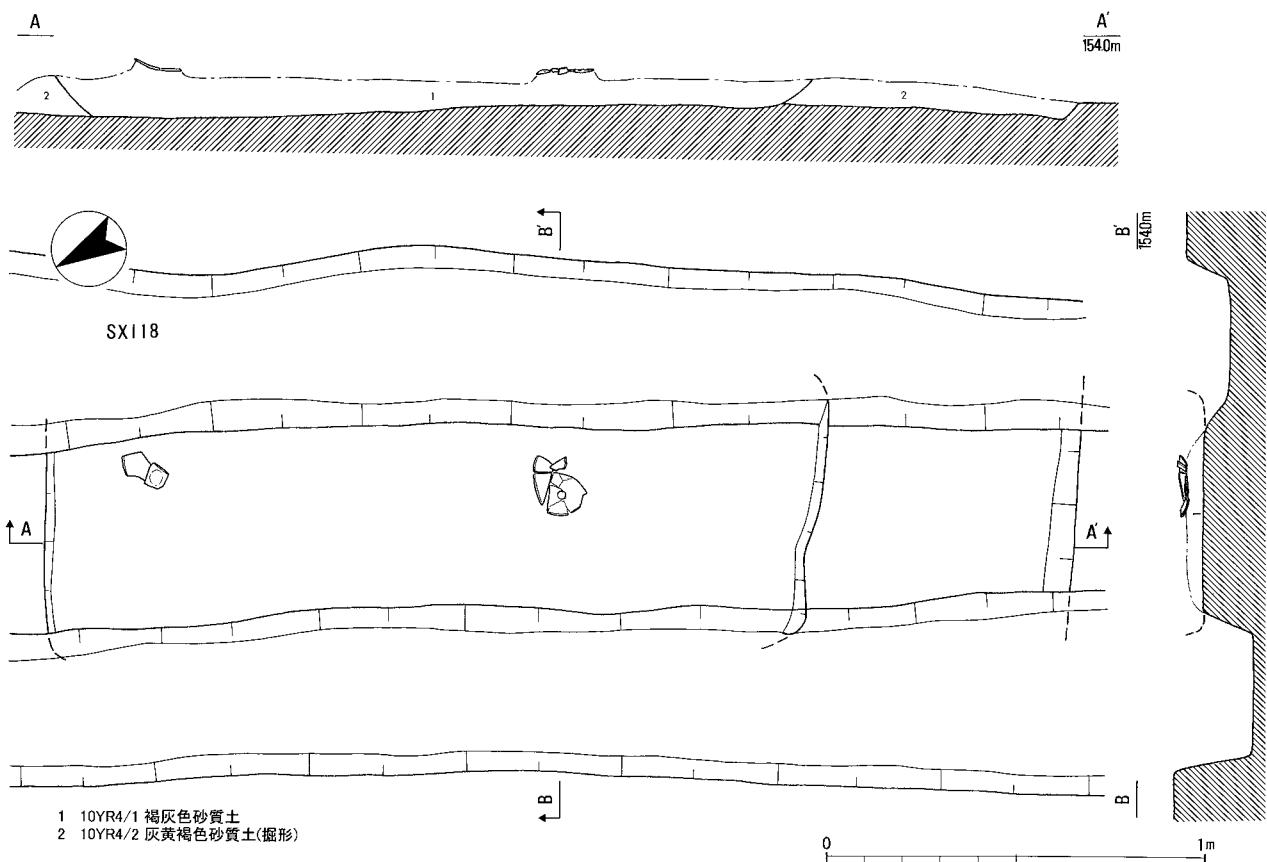
第13図 SB148・149実測図 (1 : 100)



第14図 SA141、SB142~145実測図 (1 : 100)



第15図 SB150実測図 (1:100)、SX117実測図 (1:40)、SX109・114遺物出土状況図 (1:20)



第16図 SX118遺物出土状況図 (1: 20)

豎穴住居

遺物番号	検出時	規模				主軸方向	柱穴	周溝	焼土面	時期	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	面積(m ²)						
S H151	S H 1	4.8	4.4	0.05	21.1	E15° S	未確認	未確認	西壁付近	古墳前期	S H152を切る
S H152	S H 2	4.8	4.0	0.05	19.2	E27° S	未確認	未確認	中央	古墳前～中期	S H151・153に切られる
S H153	S H 3	4.8	4.0	0.05	19.2	N24° E	未確認	未確認	東壁中央(竈跡か)	古墳後期	S H152を切る
S H154	S H 4	4.7	4.7	0.05	22.1	N8° E	1本確認	未確認	未確認	古墳時代	S H155を切る
S H155	S H 5	4.8～5.4	不明	0.05	不明	N26° W	未確認	未確認	未確認	古墳前期	S H157を切り、S H154・156に切られる
S H156	S H 6	3.7	不明	0.05	13.7	N19° E	未確認	未確認	未確認	古墳前～中期	S H155を切り、S H158・159に切られる
S H157	S H 7	不明	不明	0.05	不明	N22° W	未確認	未確認	未確認	古墳前期	S H155に切られる
S H158	S H 8	4.5	3.9以上	0.05	17.6以上	N24° E	未確認	未確認	未確認	古墳時代	S H155・156に切られる
S H159	S H 9	6.2	5.0	0.05	31.0	N21° E	未確認	未確認	未確認	古墳中期	S H156・161を切り、S H160に切られる
S H160	S H 10	4.4	2.6以上	0.05	11.4以上	E6° N	未確認	未確認	未確認	奈良後期	S H159を切る。 S K 40は貯蔵穴か
S H161	S H 11	4.0	3.0	0.15	12.0	N20° W	未確認	未確認	未確認	古墳前期	S H162を切り、S H159に切られる
S H162	S H 12	不明	不明	0.15	不明	N11° W	未確認	未確認	未確認	古墳前期	S H161に切られる

第1表 豊穴住居観察表

塀・掘立柱建物

遺物番号	検出時	規模				棟方向	柱間寸法		柱掘形	時期	備考	
		間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)		桁行(m)	梁行(m)				
S A141	S A 1	2	6.1	—	—	E0°	東から2.7 +3.4	—	略方形	中世か	S B144・145と平行	
S B142	S B 1 ・2	3以上×3	6.3以上	6.3	40.0以上	総柱	N18°E	2.1等間	2.1等間	円形	12C前半	
S B143	S B 3	2以上×2	4.2以上	4.2	19.7以上	側柱	N37°E	2.1等間	東から1.9 +2.3	円形	中世か	S B142に隣接
S B144	S B 4	3×3	7.2	5.3	38.2	総柱	N0°	2.4等間	東から1.8 +1.8+1.6	略方形 ・円形	中世か	S B145に切られる
S B145	S B 5	3×3	7.2	6.6	47.5	総柱	N0°	2.4等間	東から2.4 +1.8+2.4	略方形	13C前半	S B144を切る
S B146	S B 6	4×3	8.4	7.2	62.0	総柱	N9°E	2.1等間	2.4等間	方形	平安中期	S B149に切られる
S B147	S B 7	4×1以上	9.1	2.1以上	19.1以上	総柱	E18°S	東から2.1+2.5 +2.1+2.4	2.1	方形	平安か	
S B148	S B 8	2以上×?	4.2以上	不明	不明	不明	E18°S	2.1等間	不明	方形	平安か	
S B149	S B 9	4×3	8.4	6.4	53.8	総柱	N12°E	2.1等間	2.1等間	方形	平安	S B146を切る
S B150	S B 10	3×3	6.6	5.1	34.2	側柱	N21°E	東から1.8 +2.2+2.6	北から1.8 +1.8+1.5	円形	13C前半	

第2表 塀・掘立柱建物観察表

遺構一覧表

新遺構番号	旧遺構番号	上層 下層	調査年度	グリッド	規模 (m)	深さ (m)	時期	備考
SK1	SK1	上層	H15	E23.E24.F23 .F24			不明	攪乱土坑か
SK2	SK2	上層	H15	E22.F22			不明	攪乱土坑か
SK3	SK3	上層	H15	F23			不明	攪乱土坑か
SD4	SD4	上層	H15	D20.D21			不明	耕作痕か
SD5	SD5	上層	H15	B23			不明	耕作痕か
SD6	SD6	上層	H15	B22.C22.C23			不明	耕作痕か
SD7	SD7	上層	H15	B22.C22.C23			不明	耕作痕か
SD8	SD8	上層	H15	B22.C22.C23			不明	耕作痕か
SD9	SD9	上層	H15	B22.B23.C22 .C23			不明	耕作痕か
SD10	SD10	上層	H15	A21.B21			不明	耕作痕か
SD11	SD11	上層	H15	B21.C21			不明	耕作痕か
SD12	SD12	上層	H15	B21.C22.D22			不明	耕作痕か
SD13	SD13	上層	H15	B20.C20.C21 .D21			不明	耕作痕か
SD14	SD14	上層	H15	A19.B19			不明	耕作痕か
SD15	SD15	上層	H15	A19.B19			不明	耕作痕か
SD16	SD16	上層	H15	A19.B19			不明	耕作痕か
SK17	SK17	上層	H15	C17			不明	攪乱土坑か
SK18	SK18	下層	H15	F23.F24	長径1.4、短径1.0	0.25	古代	石あり
SD19	SD19	上層	H15	B17.C17.D17			不明	耕作痕か
SD20	SD20	上層	H15	D18.E18			不明	耕作痕か
SD21	SD21	上層	H15	D17.E17.E18			不明	耕作痕か
SD22	SD22	上層	H15	D17.E17			不明	耕作痕か
SD23	SD23	上層	H15	C17.D17.D18			不明	耕作痕か
SD24	SD24	上層	H15	C17.C18.D17 .D18			不明	耕作痕か
SD25	SD25	上層	H15	C17.C18.D18			不明	耕作痕か
SD26	SD26	上層	H15	C17.C18.D18			不明	耕作痕か
SD27	SD27	上層	H15	A18.B18			不明	耕作痕か
SD28	SD28	上層	H15	A17.A18.B18			不明	耕作痕か
SD29	SD29	上層	H15	A17.B17.B18			不明	耕作痕か
SD30	SD30	上層	H15	B17.C17.			不明	耕作痕か
欠番	SA31	上層	H15	—			—	柵跡として確認できなかった

新遺構番号	旧遺構番号	上層 下層	調査年度	グリッド	規模 (m)	深さ (m)	時期	備考
欠番	SA32	上層	H15	—			—	柵跡として確認できなかった
欠番	SB33	上層	H15	—			—	建物跡として確認できなかった
欠番	SB34	上層	H15	—			—	建物跡として確認できなかった
欠番	SB35	上層	H15	—			—	建物跡として確認できなかった
欠番	SK36	上層	H15	C12?			中世	遺構位置不明
欠番	SK37	上層	H15	E10?			中世	遺構位置不明
欠番	? 38	上層	H15	—			—	欠番
欠番	? 39	上層	H15	—			—	欠番
SK40	SK40	下層	H15	B23	長径0.8、短径0.9	0.5	古代	SH160の貯蔵穴か
包含層	SK41	下層	H16	A17			古代	遺構位置不明
SD42	SD42	下層	H16	H1.H2			不明	耕作痕か
SD43	SD43	下層	H16	H1.H2			不明	耕作痕か
SD44	SD44	下層	H16	G1.G2.H2.H3			不明	耕作痕か
SD45	SD45	下層	H16	G1.G2.G3			不明	耕作痕か
SD46	SD46	下層	H16	G1.G2.G3			不明	耕作痕か
SD47	SD47	下層	H16	F2.G2.G3			不明	耕作痕か
SD48	SD48	下層	H16	H3.I3			不明	耕作痕か
SD49	SD49	下層	H16	H3.G3			不明	耕作痕か
SD50	SD50	下層	H16	E2.D2.F3.G3 .G4			不明	耕作痕か
SD51	SD51	下層	H16	F3.G3.G4			不明	耕作痕か
SD52	SD52	下層	H16	F3.F4.G4.G5			不明	耕作痕か
SD53	SD53	下層	H16	E3.E4.F3			不明	耕作痕か
SD54	SD54	下層	H16	E3.E4			不明	耕作痕か
SD55	SD55	下層	H16	E4.E5.F5			不明	耕作痕か
SD56	SD56	下層	H16	E5			不明	耕作痕か
SD57	SD57	下層	H16	E5.F5.F6			不明	耕作痕か
SD58	SD58	下層	H16	D5.E5.E6.F6 .G6.G7			不明	耕作痕か
SD59	SD59	下層	H16	D5.E5.E6.F6			不明	耕作痕か
SD60	SD60	下層	H16	D5.E5.E6.F6			不明	耕作痕か
SD61	SD61	下層	H16	D5.D6.E5.E6 .F6.F7.G7			不明	耕作痕か

第3表 遺構一覧表(1)

新遺構番号	旧遺構番号	上層	下層	調査年度	グリッド	規模(m)	深さ(m)	時期	備考
SD62	SD62	下層	H16	E6.E7				不明	耕作痕か
SD63	SD63	下層	H16	D6.D7.E6.E7.F7.F8				不明	耕作痕か
SD64	SD64	下層	H16	C6.C7.D7.E7				不明	耕作痕か
SD65	SD65	下層	H16	F6.F7.E7				不明	耕作痕か
SD66	SD66	下層	H16	C8.D6.D7.D8.E6				不明	耕作痕か
SD67	SD67	下層	H16	B8.C7.C8.D5.D6.D7				不明	耕作痕か
SD68	SD68	下層	H16	C6.C7.D5.D6				不明	耕作痕か
SD69	SD69	下層	H16	D7.E7				不明	耕作痕か
SD70	SD70	下層	H16	D6.D7.D8.E6				不明	耕作痕か
SD71	SD71	下層	H16	C8				不明	耕作痕か
SD72	SD72	下層	H16	C8.C9.D8				不明	耕作痕か
SD73	SD73	下層	H16	B9.C8.C9				不明	耕作痕か
SD74	SD74	下層	H16	B9				不明	耕作痕か
SD75	SD75	下層	H16	B9				不明	耕作痕か
SD76	SD76	下層	H16	C10.C11.D9.D10				不明	耕作痕か
SD77	SD77	下層	H16	C10.D9.D10				不明	耕作痕か
SD78	SD78	下層	H16	B10.B11.C10.C11.D11.D12.E11.E12	幅1.6~2.6	0.1 ~ 0.2	不明		
SK79	SK79	下層	H16	C9.D9.E8	長径1.4、短径1.0	0.15	中世	石あり	
SK80	SK80	下層	H16	D8.D9	長径1.0、短径1.0	0.2	中世	石あり	
SK81	SK81	下層	H16	D8	長径1.0、短径0.8	0.1	中世	石あり	
SK82	SK82	下層	H16	D8	長径0.8、短径0.7	0.15	中世	石あり	
SK83	SK83	下層	H16	D9.D10.E9.E10	長径1.2、短径1.1	0.15	中世	石あり	
SK84	SK84	下層	H16	D9	長径0.8	0.1	中世		
SK85	SK85	下層	H16	D9	長径1.0	0.1	中世		
SK86	SK86	下層	H16	D9.D10	長径1.1	0.1	中世		
SK87	SK87	下層	H16	D11.D12.E11.E12	長径1.8、短径1.5	0.1	中世	SD78に切られる石あり	
SD88	SD88	下層	H16	B11.B12.C12.C13.C14			不明	耕作痕か	
SD89	SD89	下層	H16	A12.B12.B13.C13.C14			不明	耕作痕か	
SD90	SD90	下層	H16	A12.B12.B13.B14.C14			不明	耕作痕か	
SD91	SD91	下層	H16	A13.B13			不明	耕作痕か	
SK92	SK92	下層	H16	C11	長径1.6、短径1.2	0.3	中世	SD78に切られる石あり	
SK93	SK93	下層	H16	B10.B11	長径2.0	0.2	中世	SD78に切られる石あり	
SK94	SK94	下層	H16	B11	長径1.0、短径0.5	0.1	中世	SD78に切られる石あり	
SK95	SK95	下層	H16	B11	長径1.3、短径1.1	0.3	中世	SD78に切られる石あり	
SD96	SD96	下層	H16	-		-	-	欠番	
SD97	SD97	下層	H16	A14.B14.B15.C15.D15.D16.E16			不明	耕作痕か	
SD98	SD98	下層	H16	A14.A15.B15			不明	耕作痕か	
SD99	SD99	下層	H16	A15			不明	耕作痕か	
SD100	SD100	下層	H16	B15.B16			不明	耕作痕か	
SD101	SD101	下層	H16	B15.B16			不明	耕作痕か	
SD102	SD102	下層	H16	A16.B16.C16			不明	耕作痕か	
SD103	SD103	下層	H16	B16.C16.C17			不明	耕作痕か	
SD104	SD104	下層	H16	A16.B16.C16.C17			不明	耕作痕か	
SK105	SK105	下層	H16	C11	長径2.8、短径1.4	0.3	不明	SD78に切られる	
SK106	SK106	下層	H16	C12	長径1.5	0.1	中世		
SK107	SK107	下層	H16	C12	長径1.1、短径0.8	0.05	中世		
SK108	SK108	下層	H16	C12	長径0.8、短径0.8	0.05	中世	石あり	
SX109	SX109	下層	H16	B11.B12.C11.C12	長径1.4、短径1.0	0.4	中世		
SK110	SK110	下層	H16	B12	長径1.8	0.05	不明		
SK111	SK111	下層	H16	B15	長径1.5、短径1.3	-	中世	SB146.SB149を切る、石あり	
SK112	SK112	下層	H16	D9	長径1.6、短径1.3	0.1	中世	炭・焼土多い。石あり	
SK113	SK113	下層	H16	A13.B13	長径1.1、短径0.9		中世	SB147に切られる石あり	
SK114	SK114	下層	H16	D16	長径2.1、短径1.1	0.2	中世	SB146.SB149を切る	

新遺構番号	旧遺構番号	上層	下層	調査年度	グリッド	規模(m)	深さ(m)	時期	備考
SK115	SK115	下層	H16	D14		長径1.0、短径0.7	0.05	中世	石あり
SD116	SD116	下層	H16	C20.D20.E20				不明	耕作痕か
SX117	SK117	下層	H16	C16.C17	長径3.2、短径1.4	0.2	中世	SB149を切る	
SX118	SK118	下層	H16	C17.C18.D17.D18	長径2.8以上、短径1.4	0.05	中世		
SD119	SD119	下層	H16	D8.D9.E8	幅0.2、長3.3	0.05	不明		
SD120	SD120	下層	H16	A16.B16.B17.C16	幅1.4、長8.0	0.15	不明	SK121、SK122、SK117に切られる	
SK121	SK121	下層	H16	B16	長径1.4、短径0.8	0.15	中世	石あり	
SK122	SK122	下層	H16	C17	長径1.4、短径0.7	0.2	中世		
SD123	SD123	下層	H16	A16.A17				不明	耕作痕か
SD124	SD124	下層	H16	D17.E17	幅2.8		0.15	不明	
SD125	SD125	下層	H16	C17.D17.E17				不明	耕作痕か
SD126	SD126	下層	H16	C17.D17	幅0.5		-	不明	SK117に切られるSD127を切る
SD127	SD127	下層	H16	C17.D17.D18.E17.E18	幅0.8	0.1	不明	SK117に切れる	
SD128	SD128	下層	H16	C17.C18.D18				不明	耕作痕か
SD129	SD129	下層	H16	C17.C18.D18				不明	耕作痕か
SD130	SD130	下層	H16	C18.D18				不明	耕作痕か
SD131	SD131	下層	H16	C18.C19.C20.D18				不明	耕作痕か
SD132	SD132	下層	H16	C18.C19.C20.D18				不明	耕作痕か
SD133	SD133	下層	H16	A17.B17				不明	耕作痕か
SD134	SD134	下層	H16	A18.B18				不明	耕作痕か
SD135	SD135	下層	H16	A19.A19				不明	耕作痕か
SD136	SD136	下層	H16	B20.C20.C21				不明	耕作痕か
SD137	SD137	下層	H16	A20.A21.B20.B21				不明	耕作痕か
SD138	SD138	下層	H16	A21.B21.B22.C22				不明	耕作痕か
SD139	SD139	下層	H16	A22.B22.C22			-	不明	耕作痕か
SA141	SA1	下層	H16	F6.F7.E7	桁行6.1		-	中世	
SB142	SB1	下層	H16	H4.G4.G5.G6.F4.F5.F6	桁行6.3以上×梁行6.3		-	中世	
SB2	SB2	下層	H16	D4.E3.E4.E5.F4	桁行4.2以上×梁行4.2		-	中世	
SB143	SB3	下層	H16	D6.D7.E7.E8.F6.F7	桁行7.2×梁行5.3		-	中世	
SB144	SB4	下層	H16	D6.E6.D7.E7.F6.F7	桁行7.2×梁行6.6		-	中世	
SB145	SB5	下層	H16	B14~16.C14~16.D14~16.E14~16			-	古代	
SB146	SB6	下層	H16	A16~17.B16~17.C16~17.D16~17.E16~17	桁行8.4×梁行7.2		-	古代	
SB147	SB7	下層	H16	A13~15.B13~15	桁行9.1×梁行2.1以上		-	古代	
SB148	SB8	下層	H16	A16.A17	桁行4.2以上×梁行		-	古代	
SB149	SB9	下層	H16	B15~16.C14~16.D15~17.E14~16	桁行8.4×梁行6.4		-	古代	
SB150	SB10	下層	H16	A16~17.B16~17.C16~17.D16~17.E16~17	桁行6.6×梁行5.1		-	中世	
SH151	SH1	下層	H16	D18.D19.E18.D19	長辺4.8、短辺4.4	0.05		古墳	
SH152	SH2	下層	H16	C19.C20.D19	長辺4.8、短辺4.0	0.05		古墳	
SH153	SH3	下層	H16	B19.C19.C20	長辺4.8、短辺4.0	0.05		古墳	
SH154	SH4	下層	H16	C20.C21.C22.D21.D22	長辺4.7、短辺4.0	0.05		古墳	
SH155	SH5	下層	H16	B20.B21.B22.C20.C21	長辺4.8~5.4、短辺	0.05		古墳	
SH156	SH6	下層	H16	B21.C21.C22	長辺3.7、短辺不明	0.05		古墳	
SH157	SH7	下層	H16	A21.B21	不明	0.05		古墳	
SH158	SH8	下層	H16	A21.A22.B21.B22	長辺4.5、短辺3.9以上	0.05		古墳	
SH159	SH9	下層	H16	B21.B22.B23.C22.C23.D22	長辺6.2、短辺5.0	0.05		古墳	
SH160	SH10	下層	H16	B22.B23.B24	長辺4.4、短辺2.6以上	0.05		古代	
SH161	SH11	下層	H16	B23.B24.C23	長辺4.0、短辺3.0	0.15		古墳	
SH162	SH12	下層	H16	B24	不明	0.15		古墳	
SR163	SR1	下層	H16		幅10.0	0.8		古墳	
SZ164	SZ164	集石	下層	H16	長径6.0、短辺4.0	-		古墳	
SK165	SK165	下層	H16	E8	短辺1.4、長辺1.6	0.2	中世		

第4表 遺構一覧表（2）

第5章 遺物

第1節 遺構出土の遺物

1 古墳時代遺構出土遺物

S R163出土遺物（1～36）

土師器では、小型丸底壺（1～3）・高杯（4～10）・甕（11～13・15～17）・杯（18～21・29）・甑（22）・異形器台（23）・蓋のつまみ（29）がある。須恵器では、杯（24～28）・杯蓋（30）・壺（31）・甕（32・33）がある。さらに、土製品として、志摩式製塩土器（34）、轆羽口（35）、土師質の土錘（36）がある。1～13はおむね古墳時代（12は古代の可能性も有）、15以下は飛鳥時代に属しよう。このうち、高杯は、10が前期の有稜高杯、4～9が中期を中心とした屈折脚高杯である。14は、口縁部に刻みが入る外面タテハケ・口縁内面ヨコハケ調整の「く」字形甕で、弥生時代中期の所産であろう。

S H151出土遺物（48～49）

48は須恵器壺、49は土師器長胴甕で、口縁部の多くを欠損するため不確定な部分が大きいが、胴部内外をタテハケ調整する。

S H153出土遺物（50～51）

土師器の「く」字形甕（50）と甑（51）がある。50は、上半部のみを残すだけだが、体部はかなり球形を呈し、ナデ調整による。51は、把手等は残存しない。

S H155出土遺物（52）

土師器高杯である。東海系有稜高杯の新しい段階に相当しよう。

S H159出土遺物（53）

土師器小型丸底壺である。整形時のハケを残す粗製化したものである。古墳時代中期の所産であろう。
(穂積)

2 古代遺構出土遺物

S Z164出土遺物（37～45）

いずれも奈良時代ごろの所産である。土師器では、甑（37）・甕（38～41）・高杯（42～43）、須恵器では杯蓋（44）と杯（45）を図示した。

整地層出土遺物（46～47）

須恵器鉢（46）と土師器高杯（47）を図示した。

S H160・S K40出土遺物（54～61）

54・59・61がS H160から、55～58・60がS K40から出土している。土師器長胴甕（54・55）は、内面と外部上半部をハケ調整し、外部下半部をケズリ調整している。土師器皿（58・59）は外面にミガキ・内面に螺旋状の暗文を施している。土師器杯（60）の底面には焼成前に刺突が行なわれている。これらは奈良時代後期に位置づけられよう。

S B146出土遺物（62～69）

須恵器甕（62）・蓋（63）、土師器椀（66・67）、黒色土器椀（68）は、平安時代中期に位置付けられよう。羽釜（65）は畿内で平安時代に一般的に見られるものである。土師器（64）は器種・時期が不明である。瓦器皿（69）は12世紀ごろのもので、混入品であろう。

S B147出土遺物（70～73）

須恵器杯（70）は端部が外傾する脚部を持つ。高杯（71）は三方に透かしを持つ。72は壺の底部であろうか。これらは、総じて飛鳥時代～平安時代前期（7世紀後半～9世紀前半）のものであると考えられる。瓦器皿（73）は12世紀ごろのものである。遺物の時期には開きがあるが、遺構がS B146等と類似しており、同時期と考えたい。

S B149出土遺物（74～88）

古墳時代のものと考えられるミニチュア土器高杯（74）、手捏ね土器（75）土師器小型壺（82）・高杯（83）、須恵器横瓶（81）と、奈良～平安時代に位置付けられる土師器杯（76）・甕（77～79）、須恵器杯（80）、志摩式製塩土器（85）、黒色土器椀（87）、平安時代末～鎌倉時代に位置付けられる瓦器椀（86）・皿（88）、山茶椀（84）を図示した。74は柱痕跡、外はすべて柱掘形からの出土である。84は渥美産で藤澤氏による編年の第5型式のものである。遺物の時期には開きがあるが、遺構がS B146等と類似しており、同時期と考えたい。

S K18出土遺物（89）

外面にハケメをもち、頸部が緩やかに外反する土師器甕（89）を図示した。

3 中世遺構出土遺物

S K82出土遺物（90）

中世の遺構と考えられるが、ここでは古代の土師器甕（90）を図示した。

S K93出土遺物（91）

中世の遺構と考えられるが、ここでは古代の「く」字状に口縁部が外反する土師器甕（91）を図示した。

S K95出土遺物（92）

中世の遺構と考えられるが、ここでは奈良時代後期に位置付けられる土師器杯（92）を図示した。

S D120出土遺物（93）

遺構は、切りあいから中世に位置付けられるが、平安時代初頭に位置付けられる須恵器杯（93）を図示した。

S B142出土遺物（94）

底部内面に連結輪状文を持つ瓦器椀（94）を図示した。伊賀の瓦器椀編年の2期に位置付けられる。

S B145出土遺物（95）

外面にミガキを施さない瓦器椀（95）を図示した。伊賀の瓦器椀編年の5期に位置付けられる。

S B150出土遺物（96～97）

外面にミガキを施さない瓦器椀（96）、土師器小皿（97）を図示した。伊賀の瓦器椀編年の5期に位置付けられる。

S K79出土遺物（99～100）

瓦器皿（99）・椀（100）を図示した。99は燻化が不良なためか、白っぽい色調を呈する。底部から口縁部にかけては屈曲せずに緩やかに立ち上がっていいる。

S K83出土遺物（101）

101は、外面にミガキを施さない瓦器椀である。

S K84出土遺物（102）

102は、外面にミガキを施さない瓦器椀である。燻化が不良なためか、白っぽい色調を呈する。

S K106出土遺物（103）

103は、口径が10.0cmと小形の瓦器椀である。

S X109出土遺物（104）

104は、瓦器椀の底部である。

S X114出土遺物（105）

105は、底部内面見込みにジグザグ状文をもつ瓦器椀で、伊賀の瓦器椀編年の2期に位置付けられる。当遺跡の瓦器椀の中では古い様相を示す。

S X117出土遺物（106～108）

106・107は、外面にミガキを施さない瓦器椀である。108は口縁部が屈曲する土師器皿である。

S X118出土遺物（109～113）

瓦器皿（109）・椀（110～113）が出土している。110～113はいずれも外面に、ミガキを施さず底部内面に連結輪状文が退化したラセン文を施すもので、伊賀の瓦器椀編年の5～6期に位置付けられる。113の外面には火櫻が見られる。

C－2 O p 4 出土遺物（116）

内面に放射状暗文を持つ、平城宮編年の平城II（8世紀前半）の杯Cである。口縁部は内傾せず丸くおさめる。

F－7 p 5 出土遺物（117）

底部内面に連結輪状文を持つ瓦器椀である。2期のものであろう。

C－16 p 4 出土遺物（118）

底部内面に連結輪状文を持つ瓦器椀である。3期のものであろう。

C－12 p 1 出土遺物（119～120）

瓦器皿（119）・椀（120）を図示した。

4 時期不明遺構出土遺物

古代・中世の遺物を含む溝であるが、遺物は混入と考えられ、遺構の時期は不明である。

S D78出土遺物（114～115）

須恵器壺の底部（114）・瓦器椀（115）を図示した。

S D52出土遺物（121）

瓦器椀（121）を図示した。

S D55出土遺物（122）

大宰府編年のIV類の白磁椀（122）を図示した。

S D58出土遺物（123）

土師器甕（123）を図示した。奈良から平安時代にかけてのものであろう。

S D59出土遺物（124）

土師器皿（124）を図示した。平安時代中期ごろのものであろう。

S D60出土遺物（125～127）

大和型土師器羽釜の口縁部（125）、瓦器椀（126～127）を図示した。

S D 61出土遺物（128～131）

瓦器椀（128～129）、瓦質羽釜の脚部（130）、灯明皿（131）を図示した。128・129は底部内面に連結輪状文を持つ瓦器椀で、2期のものであろう。128の表面は充分燻化されていないためか、白っぽい色調を呈する。130は12世紀後半から近江や山背でみられる。131は近世のものであり、混入品であろう。

S D 64出土遺物（132）

瓦器椀（132）を図示した。伊賀の瓦器椀編年の6期に位置付けられる。

S D 65出土遺物（133）

瓦器椀（133）を図示した。伊賀の瓦器椀編年の4期に位置付けられる。

S D 67出土遺物（134）

瓦器皿（134）を図示した。

S D 76出土遺物（135）

瓦器椀（135）を図示した。

S D 99出土遺物（136）

瓦器皿（136）を図示した。

S D 100出土遺物（137）

瓦器椀（137）を図示した。伊賀の瓦器椀編年の5～6期に位置付けられる。

S D 102出土遺物（138）

山茶椀（138）を図示した。小片であるが、藤澤氏による編年の尾張型第4型式に相当しようか。

S D 103出土遺物（139）

瓦器椀（139）を図示した。伊賀の瓦器椀編年の5～6期に位置付けられる。

S D 104出土遺物（140）

土師器杯（140）を図示した。奈良時代後期のものであろう。

（西村）

第2節 包含層等出土遺物

1 弥生時代の遺物（143～145）

143は、サスカイト製で調整痕跡のある剥片である。144は緑泥片岩系の石包丁である。145は中期の広口壺で、口唇部上下に刻みを入れ、頸部に直線文と刻目隆帯を施している。

2 古墳時代の遺物（146～157）

いずれも土師器で有段鉢（146）・有稜高杯（147）・小型丸底壺（148）・手捏ね土器（149）・受口甕（150）・「く」字形甕（151）・小型壺（152）・甕類底部（153・154）・椀（155～157）がある。このうち、146は内外面に赤い色が見られ、赤彩されていた可能性がある。「く」字形甕151は端部が肥厚した内彎する口縁部をもち、体部外面にハケ、内面にヘラケズリを施すいわゆる布留式系の甕である。（穂積）

3 古代の遺物（98・141・142・158～178・180～189）

土師器高杯（158）・杯（98・159～161・163・164）・皿（165～167）・甕（142・168・178）、陶製円面硯（180）、須恵器杯（181～183）・蓋（184～185）、壺（186・187）・甕（188・189）、黒色土器椀（162）、志摩式製塙土器（141）を図示した。土師器杯のうち98は、内面に放射状暗文を持つ、平城宮編年の平城II（8世紀前半）

に相当する杯Cである。160・161は、飛鳥藤原宮編年の飛鳥III期～IV期に相当しよう。当遺跡から出土している「律令系土器様式」の土器では最古のものである。159は飛鳥IV期～V期（平城I期）のものである。土師器甕には小形のものと長胴になるものがある。180は直径12.7cmの円面硯で、胴部に「+」状の透かし穴を持つ。

4 中世の遺物（190～267・273）

白磁椀（192～195・273）、黒色土器（196）、瓦器椀（197～225）・小椀（226～227）・皿（228～241）、山茶椀（242）、土師器皿（243～267）・羽釜（179・190・191）が出土している。白磁椀は192が大宰府編年のII類、193がIV類、194・273がV類、195がVII類のものである。

瓦器椀は、内外面に緻密なミガキが施され底面に格子状やジグザグ状の暗文が施された伊賀の瓦器椀編年2期（12世紀前半）から、6期（13世紀前半）に位置付けられるものまでが出土している。226・227は小椀である。瓦器皿は内面にジグザグ状文をもつものがほとんどであるが、241は連結輪状文をもつめずらしいものである。山茶椀は渥美産と考えられ、藤澤氏による編年の第5型式のものである。土師器

皿は、直径8~10cmのもの(243~263)、12~14cmのもの(264~266)、台付きの「て」字状台付皿(267)がある。

5 近世の遺物(268~272、274~277)

瓦質土器皿(268)、陶器灯明皿(269)、磁器小皿(270・271)、陶器燭台(272)・天目茶碗(274)・鉢(275)、瓦質土器(276)、陶器擂鉢(278)を図示した。277は陶器製の加工円盤である。

6 時期不明の遺物(279~284)

土錘(279)、鉄製品(280~284)を図示した。280は刀子、281は鎌の刃部である可能性がある。282~284は釘であろうか。

(西村)

[参考文献]

各時代の土器の分類や編年は、以下の文献による。

- ・古代の土師器は、『古代の土器1 都城の土器集成』(1992年、古代の土器研究会)
- ・瓦器は、福田典明「伊賀地域における瓦器に関する覚書」(2006年、『中近世土器の基礎的研究XX』日本中世土器研究会)
- ・貿易陶磁は、横田賢次郎・森田強「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」(1978年、『北九州歴史資料館研究論集4』)
- ・山茶碗は、藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第三号』(1994年、三重県埋蔵文化財センター)

(一)

番号	次数	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等		法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	2	26-6	土師器	小型丸底壺	E17	S R163		(頸)5.4	外:板ナデ・ケズリ?→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR7/4	頸部完存
2	2	22-2	土師器	小型壺	C16	S R163		(頸)5.2	外:ケズリ→ナデ→オサエ 内:ナデ	やや粗	浅黄橙	10YR8/4	頸部11/12 外面に黒斑?
3	2	22-6	土師器	小型壺	C16	S R163		(底)3.4	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	浅黄橙	10YR8/3	底部6/12
4	2	21-3	土師器	高杯	C16	S R163		(口)16.4	外:ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部わずか 内面に黒変あり
5	2	21-1	土師器	高杯	C16	S R163		(口)17.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	灰白・黄灰	10YR8/2・ 2.5Y6/1	口縁部4/12 外面に黒変あり
6	2	23-5	土師器	高杯	C16	S R163		(基)3.0	外:脚部:ナデ 内:杯部:ナデ 脚部:シボリ痕・ナデ	やや密	浅黄橙	10YR8/4	基部完存 3方透かし孔
7	2	22-3	土師器	高杯	C16	S R163		(脚縫)11.2	外:面取りナデ→ヨコナデ 内:シボリ→ケズリ→ナデ	粗	にぶい橙	5YR7/4	脚柱12/12
8	2	22-7	土師器	高杯	C16	S R163		(基)3.4	外:板ナデ 内:ケズリ	やや密	淡橙	5YR8/3	基部完存 外面に黒変あり
9	2	24-5	土師器	高杯	D15	S R163		(基)3.8	外:脚部:ハケメ 内:脚部	密	浅黄橙	10YR8/3	基部5/12
10	2	23-6	土師器	高杯	C16	S R163		(基)3.6	外:脚部:ハケメ→ミガキ 内:杯部:ミガキ? 脚部:ナデ	やや粗	浅黄橙	7.5YR8/4	基部完存
11	2	21-2	土師器	甕	C16	S R163		(口)15.0 (頸)12.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	7.5YR8/4・ 8/6	頸部3/12
12	2	26-5	土師器	甕	C14	S R163			外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/3	小片
13	2	23-2	土師器	甕	C16	S R163		(口)12.8	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	淡橙	5YR8/4	口縁部2/12 外面に煤付着
14	2	22-4	弥生土器	甕	C16	S R163		(口)13.0	外:ハケメ→キザミ 内:ナデ→ハケメ	やや密	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部1/12
15	2	24-2	土師器	甕	D15	S R163		(口)26.1 (頸)22.1	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部1/12
16	2	25-1	土師器	甕	D16	S R163		(口)21.6 (頸)19.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/12
17	2	25-3	土師器	甕	D16	S R163		(口)25.5 (頸)23.1	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:浅黄橙 内:浅黄橙	10YR8/4 7.5YR8/4	口縁部2/12
18	2	21-5	土師器	杯	C16	S R163		(口)12.0 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	10YR8/3	口縁部4/12
19	2	22-1	土師器	杯	C16	S R163		(口)14.0 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙	7.5YR7/6	口縁部3/12
20	2	22-5	土師器	杯	C16	S R163		(口)12.0 (高)2.9	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	淡橙	5YR8/4	口縁部2/12
21	2	21-7	土師器	杯	C16	S R163		(口)14.0 (高)2.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	5YR7/6	口縁部少量
22	2	23-1	土師器	甕	C16	S R163		(口)38.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ	粗	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部1/12 外面に黒変あり
23	2	26-7	土師器	異形器台	C14	S R163		(口)25.6	外:ケズリ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	10YR8/4	口縁部1/12
24	2	23-3	須恵器	杯	C16	S R163		(口)11.6 (受)13.6	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰・灰赤	5Y5/1・ 10R5/2	口縁部・受部1/12
25	2	24-4	須恵器	杯	D15	S R163		(底)10.4	外:ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ 内:ロクロナデ→ナデ	密	灰白	N7/0	底部2/12
26	2	24-3	須恵器	杯	D15	S R163		(台)12.2	外:ロクロナデ・ナデ→貼付ナデ 内:ロクロナデ・ナデ	密	灰	N5/0	台部2/12

第5表 遺物観察表(1)

番号	次数	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等		法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項	
27	2	26-4	須恵器	杯	C14	S R163		(台)9.4	外:クロナデ→貼付ナデ 内:クロナデ・ナデ	密	灰	5Y6/1	台部2/12	
28	2	23-4	須恵器	杯	C16	S R163		(底)9.2	外:クロナデ→貼付ナデ 内:クロナデ	密	灰	5Y6/1・N6/	底部2/12	
29	2	21-6	土師器	蓋のツマミ	C16	S R163		(ツマミ)3.6	外:ナデ 内:-	密	橙	5YR7/6	つまみ部のみ	
30	2	21-4	須恵器	杯蓋	C16	S R163			外:クロケズリ 内:クロナデ	やや粗	灰白	5Y7/1	小片	
31	2	26-2	須恵器	壺	C12	S R163		(口)5.6 (底)3.6	外:クロナデ 内:クロナデ	密	灰白	5Y7/1	頸部完存	
32	2	24-1	須恵器	甕	C15	S R163		(口)27.9 (底)22.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	灰白	5Y7/1	頸部3/12	
33	2	25-2	須恵器	甕	D16	S R163			外:タキ→ヨコナデ 内:あて具痕→ヨコナデ	密	灰白・灰	N7/0・N4/0	小片	
34	2	26-3	土師質	製塙土器	C14	S R163			外:オサエ 内:ナデ	やや密	橙	5YR7/6	小片	志摩式
35	2	24-6	土師質	輪羽口	D16	S R163		(径)4.3	外:オサエ 内:ナデ	密	灰	N4/0・N6/0	径3/12	
36	2	23-7	土師質	土錐	C16	S R163		(長)5.3 (幅)1.8	外:ナデ 内:ナデ	密	淡黄	2.5Y8/3・ 2.5Y7/3	ほぼ完存	重量15.65g
37	2	19-2	土師器	甕	H16	S Z 164			外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	小片	
38	2	19-1	土師器	甕	H16	S Z 164			外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	10YR7/4	小片	
39	2	19-3	土師器	甕	H16	S Z 164			外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	7.5YR7/6	小片	外面に煤付着
40	2	19-4	土師器	鍋	H16	S Z 164			外:ナデ・ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ・ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	10YR8/3	小片	
41	2	20-6	土師器	甕	H16	S Z 164			外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	にぶい橙	7.5YR7/4	小片	
42	2	20-2	土師器	高杯	H16	S Z 164		(基)3.8	外:脚部:ケズリ 内:脚部:ナデ・シボリ痕	やや密	橙	5YR7/6	基部12/12	
43	2	20-1	土師器	高杯	H16	S Z 164		(基)5.0	外:脚部:ケズリ 内:杯部:ナデ・脚部:工具ナデ	やや密	橙	5YR7/8	基部完存	
44	2	20-5	須恵器	杯蓋	H16	S Z 164			外:クロナデ 内:クロナデ	やや密	灰	N4/	小片	
45	2	19-5	土師器	杯	H16	S Z 164			外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	5YR7/6	口縁部1/12	
46	2	31-2	須恵器	鉢	B14	整地層		(口)17.2	外:クロナデ 内:クロナデ	密	灰	7.5Y6/1	口縁部1/12	
47	2	30-7	土師器	高杯	B14	整地層			外:面取りナデ 内:シボリ痕	密	橙	5YR6/6	基部完存	
48	2	8-2	須恵器	壺	D19	S H151		(口)21.5	外:クロナデ 内:クロナデ	密	灰	N5/0	口縁部1/12	
49	2	8-1	土師器	長胴甕	D19	S H151		(底)24.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	橙・褐灰	5YR7/6・ 7.5YR4/1	頸部1/12	
50	2	7-1	土師器	甕	B19	S H153		(口)17.2	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部5/12	
51	2	12-1	土師器	甕	B19-C19	S H153		(口)27.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ・オサエ・ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外:にぶい橙 内:にぶい褐	7.5YR7/4・ 7.5YR5/3	口縁部2/12 内面に煤付着	
52	2	8-4	土師器	高杯	B22	S H155		(頭)6.0	外:ミガキ 内:杯部:ナデ・脚部:シボリ痕	やや密	にぶい橙・ にぶい黄橙	5YR7/4・ 10YR7/4	頸部完存 3方透かし孔	
53	2	8-3	土師器	小形丸底壺	B22	S H159		(頭)7.4	外:ハケメ→工具ナデ 内:工具ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	10YR6/4	体部3/12	
54	2	7-2	土師器	長胴(?)甕	B23	S H160		(口)23.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙 内:褐灰	5YR7/4・ 7.5YR5/1	口縁部1/12	
55	1	13-1	土師器	長胴甕	B23	S K40		(口)27.4 (高)35.4	外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内:ハケメ→ナデ→ヨコナデ	やや粗	外:浅黄橙 内:浅黄橙	10YR8/3 7.5YR8/4	完存	
56	1	11-3	土師器	甕	B23	S K40		(口)16.0 (高)12.0	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ・工具ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙・褐灰	5YR6/6・ 5YR4/1	口縁部5/12	
57	1	8-1	土師器	把手付甕	B23	S K40			外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ	やや密	にぶい褐	7.5YR6/3	小片	
58	1	12-1	土師器	皿	B23	S K40		(口)15.8 (高)2.5	外:オサエ→ケズリ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→底部暗文	やや密	橙・にぶい橙	2.5YR6/6・ 7.5YR7/3	口縁部4/12	
59	2	7-4	土師器	皿	B23	S H160		(口)15.0 (高)1.8	外:工具ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→底部暗文	やや密	外:にぶい黄橙 内:橙	10YR7/4 5YR7/6	口縁部2/12	
60	1	7-1	土師器	杯	B23	S K40		(口)13.8 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙 内:橙	10YR7/3 5YR7/6	口縁部3/12 底部に刺突あり	
61	2	7-3	土師器	杯	B23	S H160		(口)13.2 (高)3.1	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部4/12	
62	2	4-1	須恵器	甕	C14	S B146	pit1 摂形	(口)26.8	外:タキ→カキメ・ロクロナデ 内:あて具痕→ロクロナデ	密	灰	10Y6/1	口縁部1/12	
63	2	5-6	須恵器	蓋	D15	S B146	pit6 柱痕	-	外:クロナデ 内:クロナデ	密	灰	7.5Y6/1	小片	
64	2	6-5	土師器	不明	D16	S B146	pit13 摂形	(口)11.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/12	
65	2	6-6	土師器	羽釜	B14	S B146	pit1 摂形		外:ナデ→貼付ナデ 内:ナデ	密	にぶい黄橙・ にぶい橙	10YR6/4・ 7.5YR6/4	小片 外面鍔下黒変	
66	2	6-4	土師器	椀	D15	S B146	pit8 柱痕	(口)12.0	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部1/12	
67	2	6-3	土師器	椀	D16	S B146	pit14 摂形	(口)12.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ・ハケメ→ヨコナデ	密	橙	7.5YR7/6	口縁部2/12	
68	2	4-3	黒色土器	椀	C14	S B146	pit1 摂形	(口)11.5 (高)3.9 (台)6.3	外:ナデ→ヨコナデ→ミガキ→貼付ナデ 内:ヨコナデ→ミガキ	密	外:にぶい橙 内:黒	7.5YR7/4 5Y2/1	口縁部3/12	
69	2	5-5	瓦器	皿	B16	S B146	pit16 摂形	(口)10.0 (高)1.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→底部暗文	密	灰	N6/0	口縁部2/12	

第6表 遺物観察表（2）

番号	次数	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等		法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
70	2	5-3	須恵器	杯	A13	S B147	pit2 挖形	(台)10.2	外;クロナデ・ナデ 内;クロナデ	密	灰白	5Y7/1	台部3/12
71	2	5-2	須恵器	高杯	A14	S B147	pit3 挖形	(基)3.8	外;クロナデ・ナデ 内;クロナデ	密	灰・灰白	N6/0・N7/0	基部3/12 3方透かし孔
72	2	5-1	須恵器	壺	A15	S B147	pit9 挖形	(台)10.5	外;クロナデ→クロケズリ→貼付ナデ 内;クロナデ	密	灰	N6/0・N5/0	台部1/12
73	2	5-4	瓦器	皿	A15	S B147	pit5 挖形	(口)9.0 (高)1.3	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N6/0	口縁部1/12
74	2	2-2	土師器	ミニチュア高杯	C14	S B149	pit2 柱痕	(基)1.9	外;ミガキ? 内;ナデ	密	橙	5YR6/6	基部4/12
75	2	2-3	土師器	手捏ね土器	C15	S B149	pit3 挖形	(口)4.7 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;オサエ・ナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4	完存
76	2	1-2	土師器	杯	B16	S B149	pit16 挖形	(口)12.5 (高)2.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;オサエ→ヨコナデ	密	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部4/12
77	2	1-4	土師器	甕	C15	S B149	pit2 挖形	(口)16.3 (頭)13.9	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	10YR8/4	頸部4/12 外面煤付着
78	2	1-1	土師器	甕	D15	S B149	pit9 挖形	(口)14.9 (高)14.7 (体)18.2	外;(上半)オサエ・ナデ (下半)板ナデ→ケズリ→ヨコナデ 内;オサエ・ナデ・工具ナデ→ヨコナデ	密	橙	7.5YR7/6	口縁部11/12 螺旋巻き上げ成形
79	2	3-1	土師器	甕	D16	S B149	pit19 挖形	(口)17.8 (頭)15.4	外;ハケメ→ヨコナデ・(下半)ケズリ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	5YR6/4	頸部1/12
80	2	2-6	須恵器	杯	D16	S B149	pit15 挖形	(台)13.0	外;貼付ナデ 内;クロナデ	密	灰	N6/0	台部1/12
81	2	3-3	須恵器	横瓶	B15	S B149	pit6 挖形	(頭)8.0 (体部高)16.0	外;クロナデ・タタキ→ヨコナデ 内;クロナデ→ヨコナデ	密	灰	N5/0・N6/0	頸部3/12
82	2	1-3	土師器	小型壺	C15	S B149	pit8 挖形	(口)10.4 (頭)8.7	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/6	頸部5/12
83	2	2-1	土師器	高杯	B15	S B149	pit1 挖形	(口)16.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/6	口縁部1/12
84	2	2-5	陶器	山茶碗	C15	S B149	pit7 挖形	(台)9.6	外;クロナデ→貼付ナデ 内;クロナデ	密	灰白	5Y7/1	台部2/12 渥美産
85	2	3-2	土師質	製塙土器	D16	S B149	pit20 挖形		外;オサエ・ナデ 内;オサエ・ナデ	密	橙	5YR6/6	残少量 志摩式
86	2	2-8	瓦器	椀	C16	S B149	pit19 挖形	(台)6.0	外;オサエ・ナデ→貼付ナデ 内;ナデ→底部暗文	密	灰	N4/0	台部2/12
87	2	2-4	黒色土器	椀	E15	S B149	pit5 挖形	(台)8.0	外;ナデ→貼付ナデ 内;ミガキ	密	にぶい黄橙	10YR7/3	台部4/12
88	2	2-7	瓦器	皿	D16	S B149	pit19 挖形	(口)8.9 (高)1.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N6/0	口縁部1/12
89	1	3-8	土師器	甕	F23	S K18		(口)16.9	外;工具ナデ・ハケメ?→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙	7.5YR7/6	口縁部1/12 外面に煤付着
90	2	10-2	土師器	甕	D8	S K82		(頭)10.0	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	10YR7/3	頸部2/12
91	2	10-1	土師器	甕	B11	S K93		(口)15.0	外;ナデ?→ヨコナデ 内;ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	10YR8/4	口縁部1/12
92	2	10-3	土師器	杯	B11	S K95		(口)16.0 (高)3.4	外;ナデ→ヨコナデ? 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	やや密	橙	5YR6/8	口縁部少量
93	2	12-2	須恵器	杯	B17	S D120		(台)11.2	外;クロナデ→貼付ナデ 内;クロナデ	密	灰	N6/0	台部2/12
94	2	4-2	瓦器	椀	F6	S B142	pit2 挖形	(口)16.1 (高)6.1 (台)5.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	7.5Y5/1・ N5/0	台部5/12
95	2	18-2	瓦器	椀	E6	S B145	pit4 挖形	(口)14.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや粗	灰	N4/	口縁部3/12
96	2	6-2	瓦器	椀	B16	S B150	pit1 挖形	(口)13.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白・にぶい黄橙	2.5Y8/7 10YR7/3	口縁部1/12
97	2	6-1	土師器	小皿	B16	S B150	pit1 挖形	(口)8.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12
98	2	11-5	土師器	杯	A17	包含層		(口)13.0 (高)1.3	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→放射状暗文	密	橙	5YR6/6	口縁部少量
99	2	10-5	瓦器	皿	E8	S K79		(口)10.0	外;ナデ→ヨコナデ? 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白	5Y8/1	口縁部2/12
100	2	11-4	瓦器	椀	E8	S K79		(底)5.8	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ→底部暗文	密	灰	N5/	底部3/12
101	2	10-7	瓦器	椀	D9	S K83		(口)14.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰	N4/	口縁部1/12
102	2	10-4	瓦器	椀	D9	S K84		(口)14.0	外;ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	浅黄橙	10Y R8/3	口縁部1/12
103	2	11-1	瓦器	椀	C12	S K106		(口)10.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰	N4/	口縁部2/12
104	2	10-8	瓦器	椀	H16	S X109		(底)6.0	外;貼付ナデ 内;ナデ	密	灰	N5/	底部3/12
105	2	9-1	瓦器	椀	D16	S X114		(口)15.7 (高)5.6 (台)6.6	外;ナデ→ミガキ→貼付ナデ 内;ミガキ・底部暗文	密	灰・白	N5/・ 2.5Y8/1	口縁部ほぼ 完存 ミガキ 4 単位
106	2	11-3	瓦器	椀	H16	S X117		(口)15.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ミガキ	密	暗灰	N3/	口縁部2/12
107	2	11-2	瓦器	椀	H16	S X117		(口)13.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰	N4/	口縁部2/12
108	2	10-6	土師器	小皿	C16	S X117		(口)8.0 (高)1.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙	7.5YR8/6	口縁部1/12
109	2	16-2	瓦器	皿	C17	S X118		(口)8.1	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	5Y5/1	口縁部1/12
110	2	9-2	瓦器	椀	C17	S X118		(口)15.5 (高)4.7 (台)5.6	外;ナデ→ヨコナデ・貼付ナデ 内;ナデ→ミガキ・底部暗文	密	黄灰・灰白	2.5Y4/1・ 2.5Y8/2	台部9/12
111	2	9-3	瓦器	椀	C17	S X118		(口)15.0 (高)4.5 (台)4.4~5.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ・貼付ナデ 内;ミガキ	密	灰	7.5Y6/1	台部完存
112	2	15-2	瓦器	椀	C17	S X118		(口)15.4 (高)4.0 (台)6.0	外;ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	5Y5/1	口縁部5/12

第7表 遺物観察表(3)

番号	次数	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等		法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項	
113	2	9-4	瓦器	椀	C17	S X118		(口)15.4 (高)4.7 (台)6.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ・貼付ナデ 内;ミガキ	密	灰	N6/・N5/	台部3/12	
114	2	16-5	須恵器	壺	C11	S D78		(台)7.6	外;クロナデ・ナデ→貼付ナデ 内;クロナデ	密	灰白・灰	5Y7/1・ 5Y6/1	台部4/12	
115	2	16-4	瓦器	椀	E12	S D78		(台)6.8	外;ナデ→貼付ナデ 内;底部暗文	密	灰	N5/0	台部1/12	
116	2	20-3	土師器	杯	C20	Pit4		(口)15.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→底部暗文	密	橙	5YR6/6	口縁部1/12	
117	2	18-4	瓦器	椀	F7	pit5		(口)15.3 (高)4.6	外;オサエ・ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰	N4/	口縁部3/12	
118	2	18-5	瓦器	椀	C16	pit4		(口)16.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰	N4/	口縁部1/12	
119	2	18-1	瓦器	皿	C12	pit1		(口)8.5 (高)1.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→底部暗文	やや粗	灰	N4/	口縁部8/12	
120	2	18-3	瓦器	椀	C12	pit1		(口)16.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	暗灰	N3/	口縁部3/12	
121	2	13-5	瓦器	椀	F3	S D52		(口)14.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N5/0	口縁部1/12	
122	2	14-4	白磁	椀	F5	S D55		(台)6.9	外;クロナデ→クロケズリー→施釉 内;クロナデ→施釉	密	素地:灰白 釉:灰白	N8/0 2.5GY8/1	台部3/12	
123	2	14-3	土師器	甕	E5	S D58		(口)15.0	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	在い黄橙	10YR7/4	口縁部3/12	
124	2	14-2	土師器	皿	F6	S D59		(口)16.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部1/12	
125	2	12-5	土師器	羽釜	E6	S D60		不明	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	やや密	在い橙	7.5YR7/4	小片	
126	2	12-3	瓦器	椀	E5	S D60		(口)15.2	外;ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N4/0	口縁部1/12	
127	2	12-4	瓦器	椀	E6	S D60		(台)5.8	外;ミガキ・ナデ→貼付ナデ 内;ナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N5/0	台部1/12	
128	2	13-3	瓦器	椀	F7	S D61		(口)14.6 (高)6.1 (台)6.0	外;ヨコナデ→ミガキ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白	N7/0・N8/0	口縁部1/12	
129	2	13-4	瓦器	椀	F7	S D61		(口)14.1	外;ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰	N3/0	口縁部2/12	
130	2	13-1	瓦質	羽釜の脚	F7	S D61		(径)1.5	外;ケズリ	密	灰・灰白	N4/0・N8/0	脚部のみ	
131	2	13-2	陶器	灯明皿	D6	S D61		(口)10.2 (高)2.2 (底)4.0	外;クロナデ→クロケズリー 内;クロナデ→施釉	密	素地:灰白 釉:灰白	2.5Y8/2 5GY8/1	底部3/12	
132	2	14-1	瓦器	椀	E7	S D64		(口)14.2~14.5 (高)4.5 (台)4.9	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N4/0	口縁部11/12	
133	2	15-4	瓦器	椀	F6	S D65		(口)14.0	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N5/0	口縁部1/12	
134	2	16-3	瓦器	皿	D6	S D67		(口)10.0	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N6/0	口縁部1/12	
135	2	15-6	瓦器	椀	D9	S D76			外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N5/0	小片	
136	2	16-1	瓦器	皿	A15	S D99		(口)10.0 (高)1.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→底部暗文	密	灰	N6/0	口縁部1/12	
137	2	15-3	瓦器	椀	B16	S D100		(口)14.5	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N5/0	口縁部2/12	
138	2	16-6	陶器	山茶椀	B16	S D102		(口)14.0	外;クロナデ 内;クロナデ	密	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	
139	2	15-5	瓦器	椀	C16	S D103		(口)13.0	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N5/0	口縁部2/12	
140	2	15-1	土師器	杯	B16	S D104		(口)12.3 (高)2.9	外;工具ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	在い黄橙・ 浅黄橙	7.5YR7/4・ 10YR8/4	口縁部4/12	
141	2	17-2	土師質	製塙土器	C17	包含層			外;ナデ	密	在い黄橙・橙	10YR7/4・ 5YR6/6	小片	志摩式
142	2	17-1	土師器	甕	C17	包含層		(口)13.6	外;上部ハケメ→下部ケズリー→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙・橙	10YR8/3・ 5YR7/6	口縁部2/12	
143	2	28-4	石製品	剥片	-	表採		(長)5.6 (幅)3.5 (厚)1.6	-	-	-	-	重量34.6 g	
144	2	28-5	石製品	石包丁	G3	包含層		(幅)3.6	-	-	-	-	重量35.18 g	
145	2	27-1	弥生土器	広口壺	C15	包含層		(口)16.8	外;ハケメ→櫛描横線文→貼付突帯 内;ハケメ→波状文	やや密	在い黄橙	10YR7/3・ 6/3	口縁部2/12	
146	2	28-1	土師器	有段鉢	B12	包含層		(口)15.6	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	在い黄橙	10YR6/4	口縁部1/12	外面赤彩
147	1	8-4	土師器	高杯	D27	包含層		(頸)4.5	外;杯部:ミガキ 脚部:ミガキ 内;杯部:ミガキ 脚部:ナデ	やや密	在い黄橙	10YR7/3	基部完存	3方透かし孔
148	1	8-2	土師器	小型丸底壺	C18	包含層		(頸)6.6	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	外;暗灰黃 内;灰	2.5Y5/2 5Y4/1	頸部4/12	
149	2	28-3	土師器	手捏ね土器	D12	包含層		(底)3.6	外;ナデ・工具ナデ 内;工具ナデ	密	灰黃	2.5Y6/2	底部完存	外面黒変
150	2	28-2	土師器	甕	-	包含層		(口)11.6	外;ハケメ→ヨコナデ→口縁刺突 内;ハケメ・ナデ→ヨコナデ	密	在い黄橙	10YR7/4	口縁部1/12	
151	1	1-2	土師器	甕	A19	包含層		(口)11.6	外;ハケメ→ヨコナデ 内;オサエ→ケズリー→ヨコナデ	やや粗	橙	5YR7/8・6/ 8	口縁部5/12	
152	2	27-4	土師器	小型壺	E10	包含層		(頸)6.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;オサエ・ナデ	密	在い黄橙	10YR7/4	頸部2/12	
153	2	27-3	土師器	甕	D15	包含層		(底)4.0~4.3	外;工具ナデ・ナデ 内;ハケメ・ナデ	密	在い黄橙	10YR7/4	底部完存	外面黒変
154	2	27-2	土師器	甕	D12	包含層		(底)4.0	外;ナデ・工具ナデ 内;ナデ・工具ナデ	密	在い黄橙	7.5YR7/4	底部完存	外面黒変
155	1	3-7	土師器	椀	F25	包含層		(口)11.2 (高)4.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・工具あり痕→ヨコナデ	やや粗	外;淡黄 内;在い黄橙	2.5Y8/3 10YR7/4	口縁部5/12	

第8表 遺物観察表(4)

番号	次数	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等		法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
156	1	3-4	土師器	椀	B20	包含層		(口)11.5 (高)3.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	外:浅黄橙 内:橙	7/5YR8/4 7.5YR7/6	口縁部6/12
157	1	11-2	土師器	椀	A17	包含層		(口)13.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	10YR8/3	口縁部5/12 外面一部黒変
158	1	8-5	土師器	高杯	F25	包含層		(口)13.8	外;杯部:ケズリ・ナデ→ヨコナデ 脚部:面取り 内;杯部:ヨコナデ→ミガキ 脚部:シボリ痕	やや密	外:オリーブ黒 内:黄灰	5Y3/1 2.5Y5/1	頭部完存 内面黒色
159	1	12-2	土師器	杯	G25	包含層		(口)17.3 (高)4.9	外;ケズリ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	橙	5YR6/6	口縁部3/12
160	1	7-3	土師器	杯	C22	包含層		(口)14.0	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→底部暗文	密	にぶい橙・橙	5YR6/4・ 5YR6/6	口縁部1/12
161	1	3-6	土師器	杯	D20	包含層		(口)11.1 (高)4.1	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	橙	5YR6/6	口縁部1/12
162	2	31-5	黒色土器	椀	D14	包含層		(口)13.2 (高)4.1	外;ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	外:橙 内:黒	5YR7/8 N2/	口縁部4/12
163	2	29-6	土師器	杯	D14	包含層		(口)12.2 (高)2.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	外:橙 内:橙	7.5YR7/6 5YR6/8	口縁部1/12
164	2	29-5	土師器	杯	D14	包含層		(口)10.8 (高)2.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/8	口縁部1/12
165	2	29-3	土師器	皿	E6	包含層		(口)19.0 (高)2.1	外;ヨコナデ→ミガキ・底部工具跡 内;ナデ→ヨコナデ	密	外:橙 内:橙	5YR6/6 7.5YR7/6	口縁部1/12
166	2	29-4	土師器	皿	-	表採		(口)17.0	外;ナデ・ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	外:橙 内:浅黄橙	7.5YR7/6 7.5YR8/6	口縁部2/12
167	2	29-7	土師器	皿	B10	包含層		(口)15.8 (高)2.2	外;ナデ→ヨコナデ→粗いミガキ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙	2.5YR6/8	口縁部1/12
168	2	29-2	土師器	甕	-	表採		(口)16.0 (頸)13.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;工具ナデ・ケズリ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙 内:にぶい黄橙	7.5YR6/4 10YR7/4	口縁部2/12 外面に煤付着
169	2	30-1	土師器	甕	B23	包含層		(口)26.0	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	橙	7.5YR7/6	口縁部2/12
170	1	2-2	土師器	甕	F23	包含層		(口)24.6 (頸)22.0	外;ハケメ→ヨコナデ 内;オサエ・ハケメ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙・ 灰白	10YR7/4・ 10YR8/2	頭部2/12
171	1	11-1	土師器	長胴甕	B23	包含層		(口)25.0	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙・ 浅黄橙	7.5YR7/4・ 7.5YR8/4	口縁部4/12
172	2	31-1	土師器	把手甕	E7	表採		(口)35.0	外;オサエ・ハケメ→ヨコナデ 内;工具ナデ・ハケメ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	10YR8/4 10YR8/3	口縁部1/12
173	2	29-1	土師器	甕	D6	包含層		(口)18.0	外;ハケメ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ・工具ナデ→ヨコナデ	密	外:浅黄 内:浅黄	2.5Y7/4 2.5Y7/3	口縁部1/12
174	2	30-2	土師器	甕	C17	包含層		(口)19.0 (頸)15.4	外;ハケメ→ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ハケメ→工具によるナデ→ヨコナデ	やや密	外:灰褐色 内:にぶい黄橙	7.5YR4/2 10YR7/4	頭部1/12
175	2	29-8	土師器	甕	J24	包含層		(口)14.8	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	内:浅黄橙 外:浅黄橙	10YR8/4 10YR8/3	口縁部2/12
176	2	30-4	土師器	甕	A14	包含層		(口)15.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部3/12
177	2	27-5	土師器	甕	A16	包含層		(口)15.0	外;ナデ・ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	5YR7/4	口縁部1/12
178	1	1-1	土師器	甕	B23	包含層		(口)26.0	外;ハケメ・オサエ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	10YR8/3	口縁部2/12 外面に煤付着
179	2	30-3	土師器	羽釜	E7	包含層		(口)29.0	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁部2/12 内面に煤付着
180	1	1-4	須恵器	円面鏡	G25	包含層		(上辺)12.7	外;ナデ・ヨコナデ→貼付ナデ 内;オサエ・ナデ	密	灰白・灰	N7/・N5/	5/12 5方透かし
181	1	4-3	須恵器	杯	E23	包含層		(口)16.9	外;クロナデ 内;クロナデ	密	灰白	N8/0・N7/0	口縁部2/12
182	1	4-2	須恵器	杯	G25	包含層		(口)18.0 (高)3.6	外;クロナデ→糸切り→貼付ナデ 内;クロナデ	密	灰	N6/0	口縁部1/12
183	2	31-4	須恵器	杯	B10	包含層		(台)11.9	外;ナデ→貼付ナデ 内;クロナデ	密	灰	7.5Y6/1	台部3/12
184	1	4-4	須恵器	蓋	E・F23	包含層		(口)18.0	外;クロナデ→ロクロケズリ→貼付ナデ 内;クロナデ	やや粗	灰	N6/0	口縁部3/12
185	2	31-3	須恵器	蓋	A16	包含層		(口)15.0	外;クロナデ→ロクロケズリ 内;クロナデ	密	灰	N6/0	口縁部3/12
186	2	37-1	須恵器	壺	-	包含層		(口)10.0	外;クロナデ 内;クロナデ	密	灰黃	2.5Y7/2	口縁部2/12
187	2	30-6	須恵器	壺	C11	包含層		(台)7.4	外;クロナデ→貼付ナデ 内;クロナデ	密	外:灰白 内:灰白	N7/ 7.5Y7/1	台部8/12 内外面に自然釉
188	1	9-1	須恵器	甕	A17	包含層		(口)22.0	外;クロナデ 内;クロナデ	密	灰	N4/0	口縁部5/12 内外面に自然釉
189	1	2-1	須恵器	甕	F23	包含層		(体)29.0	外;ヨコナデ→タタキ 内;ヨコナデ→タタキ(無文あて具)	やや密	灰黃・にぶい黄 2.5Y6/2・ 2.5Y6/3	2.5Y6/2・ 2.5Y6/3	体部2/12
190	1	4-1	土師器	羽釜	G22	包含層		(口)23.6 (ツバ)27.6	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙・浅黄橙	7.5YR7/6・ 10YR8/3	口縁・ツバ 径部1/12 外面に煤付着
191	2	39-1	土師器	羽釜	E15	包含層		(口)23.2 (ツバ)29.2	外;ナデ・オサエ→貼付ナデ 内;ナデ	やや密	浅黄橙・明赤褐	7.5YR8/4・ 5YR5/6	口縁部1/12
192	2	40-5	白磁	椀	G3	包含層		(口)14.0	外;クロナデ→施釉 内;クロナデ→施釉	密	浅黄	2.5Y7/3	口縁部1/12
193	2	38-1	白磁	椀	E5	包含層		(口)15.0	外;クロナデ→施釉 内;クロナデ→施釉	密	灰白	10Y8/1	口縁部1/12
194	2	40-7	白磁	椀	C17	包含層		(底)5.4	外;→ケズリ出し→施釉 内;→施釉	やや粗	灰白	2.5GY8/1	底部6/12
195	2	40-4	白磁	椀	B16	包含層		(底)6.6	外;クロナデ→ケズリ出し→施釉 内;→施釉	やや粗	(釉)灰白 (素地)灰黃	10Y7/・2.5 Y7/2	底部4/12
196	2	31-7	黒色土器	椀	E16	包含層		(台)8.6	外;ナデ・オサエ→貼付ナデ 内;ミガキ	密	外:にぶい黄 内:暗灰	10YR7/4 N3/	台部2/12
197	2	31-6	瓦器	椀	E4	包含層		(台)7.0	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ→底部暗文	密	外:灰白 内:暗灰	2.5Y8/2 N3/	台部3/12
198	1	5-4	瓦器	椀	E9	包含層		(台)6.1~6.3	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ	密	灰白・灰	N8/0・N4/0	台部10/12

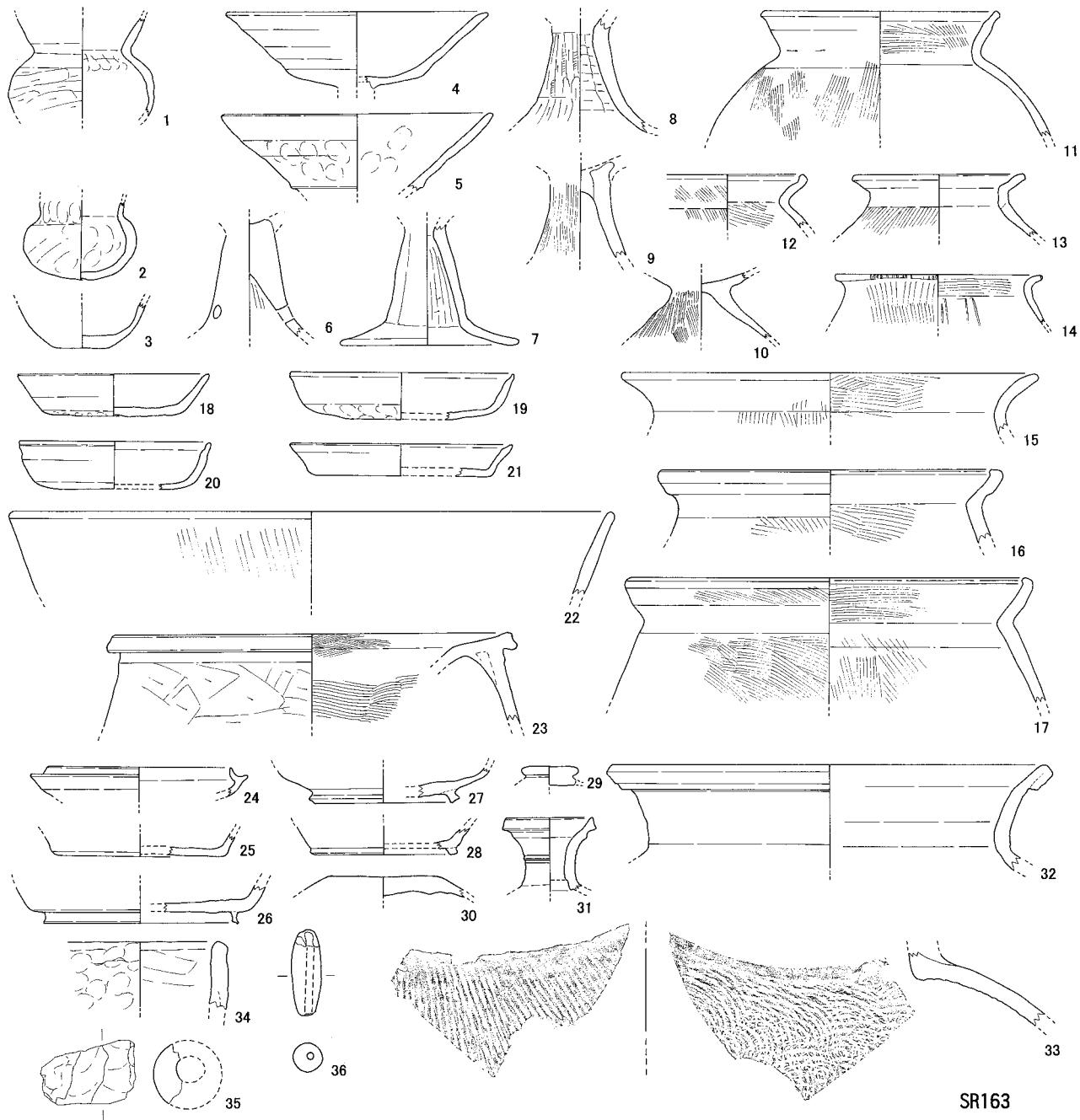
第9表 遺物観察表（5）

番号	次数	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等		法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
199	1	10-6	瓦器	楕	F 22	包含層		(口)15.1 (高)6.1 (台)5.6	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→密なミガキ・底部暗文	密	灰	N4/0	台部完存
200	2	35-1	瓦器	楕	F 7	包含層		(口)16.0 (高)5.9	外;ナデ・ヨコナデ→ミガキ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N4/0	口縁部7/12
201	1	6-2	瓦器	楕	E 10	包含層		(口)15.8 (高)5.8 (台)5.9	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ→貼付ナデ 内;ナデ・ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	10Y4/1 · N6/0	口縁部11/12
202	2	32-1	瓦器	楕	B 16	包含層		(口)15.4 (高)5.3 (台)6.0~6.2	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N5/0	台部10/12
203	2	35-2	瓦器	楕	G 4	包含層		(口)15.4 (高)5.1 (台)6.7	外;ナデ・ヨコナデ→ミガキ→オサエ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰・灰白	N6/0 · N7/0	口縁部4/12
204	2	34-4	瓦器	楕	F 5	包含層		(台)5.9	外;ナデ・オサエ→ミガキ→貼付ナデ 内;ミガキ	密	灰	N6/0	台部6/12
205	2	36-2	瓦器	楕	B 16	包含層		(台)6.6	外;ナデ・オサエ→貼付ナデ 内;ナデ・ミガキ・底部暗文	密	灰	N5/	台部9/12
206	2	36-1	瓦器	楕	C 11	包含層		(口)15.8 (高)4.0 (台)6.0	外;オサエ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ・ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N6/0 · N5/0	口縁部7/12 台部4/12
207	2	33-4	瓦器	楕	C 16	包含層		(台)5.7	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ・底部暗文	密	灰	N6/0	台部5/12
208	2	36-4	瓦器	楕	A15·B15	包含層		(台)4.8~5.1	外;ナデ・オサエ→貼付ナデ 内;ナデ・ミガキ・底部暗文	密	灰	7.5Y6/1	台部完存
209	1	10-3	瓦器	楕	C 12	包含層		(台)5.6	外;オサエ→貼付ナデ 内;ミガキ・底部暗文	密	灰	N4/0	台部8/12
210	2	34-3	瓦器	楕	F 5	包含層		(口)15.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ナデ・ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N5/0	口縁部2/12
211	1	12-3	瓦器	楕	C 17	S D 24		(口)14.5 (高)4.5 (台)5.5	外;ナデ・オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N4/0	台部5/12
212	1	6-3	瓦器	楕	C 11	包含層		(口)14.0 (高)4.5 (台)5.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	外:灰 内:灰白	N5/0 5Y8/1	口縁部4/12
213	1	6-4	瓦器	楕	C 16	包含層		(口)14.0 (高)4.0 (台)6.0~7.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	外:灰 内:灰白	N6/0 N7/0	台部7/12 台部の歪み大
214	1	10-2	瓦器	楕	C 12	包含層		(口)14.9 (高)4.0 (台)5.0	外;オサエ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N5/0 · 4/0	台部4/12
215	2	36-3	瓦器	楕	C 13	包含層		(口)16.0	外;オサエ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ・ミガキ	密	灰	N4/0	口縁部1/12
216	2	33-1	瓦器	楕	C 13	包含層		(台)5.5	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ・底部暗文	密	灰	N5/0	台部10/12
217	2	34-1	瓦器	楕	C 17	包含層		(口)15.3 (高)4.6 (台)5.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→底部暗文	密	灰・灰白	N5/0 · N7/0	台部4/12
218	1	1-3	瓦器	楕	B 19	包含層		(口)15.0 (高)4.7 (台)4.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付けナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰白	2.5Y8/1 · 8/2	口縁部ほぼ 完存 内外面に黒斑あり
219	1	10-1	瓦器	楕	D 12	包含層		(口)14.6 (高)4.2 (台)4.5	外;オサエ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N5/0	台部7/12
220	1	12-4	瓦器	楕	C 17	S D 26		(口)15.2 (高)4.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N4/0	口縁部1/12
221	2	40-2	瓦器	楕	F 5	包含層		(口)14.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ・ヨコナデ→ミガキ	密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部1/12 生焼け？
222	2	35-3	瓦器	楕	G 4	包含層		(台)6.1	外;ナデ・ミガキ・貼付ナデ 内;ナデ	密	灰	N4/0	台部2/12
223	1	6-1	瓦器	楕	C 12	包含層		(口)15.1 (高)4.6 (台)5.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	10Y5/1 · N4/ 1	口縁部ほぼ 完存
224	1	10-5	瓦器	楕	C 11	包含層		(口)15.4 (高)4.1 (台)5.1	外;オサエ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N5/0 · 4/0	台部完存
225	2	32-3	瓦器	楕	B 16	包含層		(台)6.0	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ・底部暗文	密	灰・灰白	N5/0 · N8/0	台部6/12
226	2	32-4	瓦器	小楕	C 12	包含層		(口)9.8 (高)2.8 (台)5.2	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ヨコナデ→底部暗文	密	灰	N5/0	台部5/12
227	2	36-6	瓦器	小楕	F 5	包含層		(口)8.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰	N5/0	口縁部1/12
228	1	7-4	瓦器	皿	C 11	包含層		(口)9.2 (高)1.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→底部暗文	密	灰白・灰	N7/0 · N4/0	口縁部2/12
229	2	33-2	瓦器	皿	C 14	包含層		(口)9.3 (高)1.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→底部暗文	密	灰	N5/0	口縁部3/12
230	1	5-3	瓦器	皿	E 21	包含層		(口)9.5 (高)2.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	やや密	灰白・灰	N8/0 · N6/0	口縁部9/12
231	2	32-2	瓦器	皿	B 15	包含層		(口)8.2~8.4 (高)1.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ・底部暗文	密	灰	N5/0	口縁部9/12
232	1	7-2	瓦器	皿	C 11	包含層		(口)8.9 (高)1.6	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→底部暗文	密	外:灰 内:灰	N5/0 · N6/0	口縁部完存 ゆがみ大
233	2	26-1	瓦器	皿	C 12	包含層		(口)8.8 (高)1.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→底部暗文	密	灰	N5/0	口縁部11/12
234	2	37-2	瓦器	皿	C 17	包含層		(口)8.8 (高)1.2	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→底部暗文	密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部10/12 生焼け？
235	2	36-5	瓦器	皿	C 17	包含層		(口)9.1 (高)1.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ・底部暗文	密	灰	N6/0	口縁部3/12
236	1	5-2	瓦器	皿	C 9	包含層		(口)9.1 (高)1.6	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→底部暗文	やや密	灰・灰白	N4/0 · N8/0	口縁部3/12
237	2	33-3	瓦器	皿	C 16	包含層		(口)8.3 (高)1.6	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→底部暗文	密	灰	N5/0	口縁部4/12
238	1	10-4	瓦器	皿	B 17	包含層		(口)9.6 (高)1.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→底部暗文	密	灰	N4/0	口縁部4/12
239	2	34-2	瓦器	皿	D 16	包含層		(口)9.9 (高)1.4	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→底部暗文	密	灰	N4/0	口縁部3/12
240	1	3-1	瓦器	皿	A 19	包含層		(口)9.0 (高)1.7	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ?	やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部3/12
241	1	3-2	瓦器	皿	C 16	包含層		(口)9.0 (高)1.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ?	やや密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部8/12

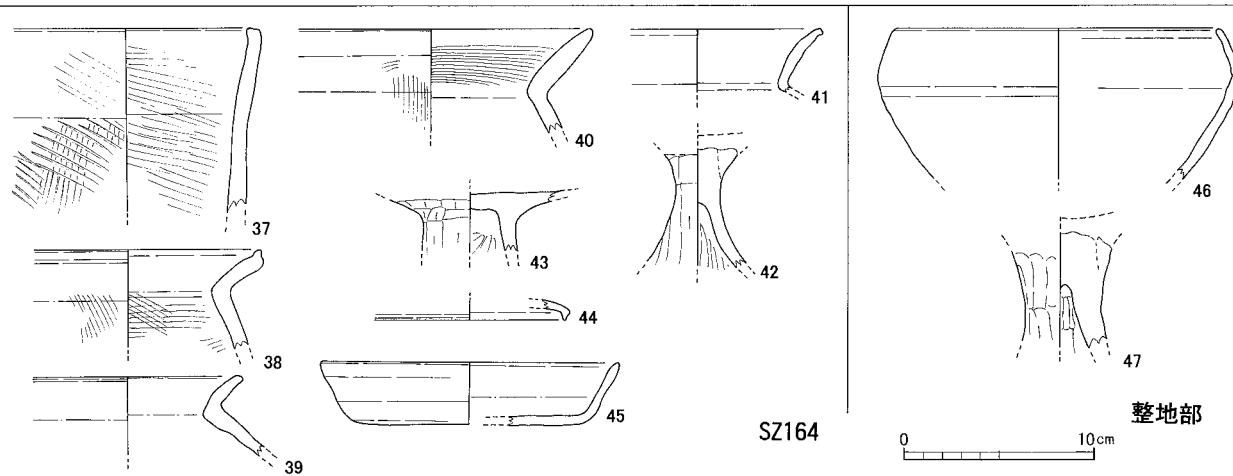
第10表 遺物観察表（6）

番号	次数	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等		法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
242	1	8-3	陶器	山茶椀	D13	包含層		(台)7.2	外:クロナデ→糸切り痕 内:クロナデ	密	灰白	5Y7/1	台部完存
243	1	9-8	土師器	皿	A17	包含層		(口)9.0 (高)1.65	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	橙	2.5YR7/6	口縁部4/12
244	2	37-6	土師器	皿	-	包含層		(口)8.0 (高)1.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部4/12
245	1	9-3	土師器	皿	A17	包含層		(口)8.8 (高)1.4	外:オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部5/12
246	2	39-2	土師器	皿	D14	包含層		(口)8.5 (高)1.3	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	10YR8/4	口縁部3/12
247	2	32-5	瓦器	皿	C12	包含層		(口)8.4 (高)1.6	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰	N5/0	口縁部5/12
248	1	9-7	土師器	皿	A17	包含層		(口)9.0 (高)1.7	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	橙	5YR7/6・ 6/6	口縁部11/12
249	2	8-6	土師器	皿	C19	包含層		(口)8.0 (高)1.1	外:ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	橙	7.5YR7/6	口縁部1/12
250	2	39-7	土師器	皿	C16	包含層		(口)7.8 (高)1.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部2/12
251	2	37-5	土師器	皿	A15・B15	包含層		(口)8.2 (高)1.4	外:オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部5/12
252	1	3-5	土師器	皿	D17	包含層		(口)9.2 (高)1.3	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部7/12
253	2	37-7	土師器	皿	-	包含層		(口)9.2	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部1/12
254	1	7-5	土師器	皿	C16	包含層		(口)10.0 (高)1.4	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部2/12
255	2	39-5	土師器	皿	B12	包含層		(口)8.0 (高)1.3	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	7.5YR7/6	口縁部2/12
256	1	9-6	土師器	皿	A17	包含層		(口)8.8 (高)1.5	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	橙・にぶい橙	5YR6/6・ 7.5YR7/4	口縁部完存
257	1	9-5	土師器	皿	A17	包含層		(口)8.9 (高)1.6	外:オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/12
258	2	39-3	土師器	皿	B14	包含層		(口)7.8 (高)1.1	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	5YR7/6	口縁部3/12
259	2	37-4	土師器	皿	C18	包含層		(口)8.6 (高)1.5	外:オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙・に ぶい黄橙	10YR8/4・ 10YR7/4	口縁部3/12
260	1	9-2	土師器	皿	A17	包含層		(口)7.8 (高)1.5	外:オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部4/12
261	1	3-3	土師器	皿	C16	包含層		(口)8.6 (高)1.2	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙・浅黄橙	5YR7/6・ 10YR8/4	口縁部3/12
262	1	9-4	土師器	皿	A17	包含層		(口)8.8 (高)1.6	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部4/12
263	2	39-4	土師器	皿	F5	包含層		(口)9.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗	橙	7.5YR6/6	口縁部1/12
264	2	37-3	土師器	皿	D16	包含層		(口)11.6	外:オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙	7.5YR7/6	口縁部2/12
265	2	37-8	土師器	皿	F7	包含層		(口)12.0	外:工具ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部1/12 外面に煤付着
266	2	8-5	土師器	皿	C19	包含層		(口)14.3	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/12
267	2	30-5	土師器	台付皿	B14	包含層		(口)8.8 (高)2.1 (幅)5.2	外:クロナデ→貼付ナデ 内:クロナデ	密	にぶい黄橙	10YR7/4	台部3/12
268	2	36-7	瓦質土器	皿	D18	包含層		(口)8.0 (高)2.4	外:ケズリ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰	N4/0	口縁部2/12
269	2	38-2	陶器	灯明皿	F2	包含層		(口)7.6 (高)1.6	外:クロナデ→口縁部施釉 内:クロナデ→施釉	密	淡黄	2.5Y8/3	口縁部1/12
270	2	40-8	磁器	小皿	B12	包含層		(口)6.1	外:ナデ→口縁部施釉 内:施釉	やや密	灰オリーブ・白灰	5Y6/2・ 5Y8/1	口縁部6/12
271	2	39-8	磁器	小皿	F3	包含層		(口)6.4 (高)1.1	外:ナデ→口縁部施釉 内:施釉	密	灰白	5Y8/2・ 5Y7/2	口縁部3/12
272	2	38-5	陶器	燭台	C9	包含層		(底)3.9	外:クロナデ→施釉 内:クロナデ→施釉	密	(釉)暗赤褐 (素地)灰白	5YR3/4・ 2.5Y8/2	底部3/12
273	1	5-1	白磁	椀	D18	包含層		(台)6.0	外:クロナデ→ロクロケズリ→ケズリ出し→施釉 内:クロナデ→施釉	密	灰白	(素地)2.5Y8/2 (釉)7.5Y8/2	台部2/12
274	2	39-6	陶器	天目茶椀	F3	包含層		(底)5.4	外:ケズリ出し高台→施釉 内:クロナデ→施釉	やや密	赤黒	10R2/1	底部3/12
275	2	38-3	陶器	鉢	F7	包含層			外:クロナデ→施釉 内:クロナデ→口縁部施釉	やや密	黑	N1.5/	小片
276	2	38-7	瓦質土器	不明	E6	包含層			外:ナデ? 内:ナデ?	やや粗	暗灰・灰黄	N3/・2.5Y7/2	小片
277	2	38-6	陶器	加工円盤	A16	包含層		(径)2.1	内外面施釉→周囲打ち欠き	やや密	黑褐・暗褐	7.5YR2/2・ 7.5YR3/4	-
278	2	40-1	陶器	擂鉢	C11	包含層		(底)11.0	外:ナデ 内:ナデ→櫛描	粗	橙	2.5YR7/6	底部3/12
279	2	40-6	土師質	土錘	C16	包含層		(長)4.6 (幅)1.3	ナデ・オサエ	密	黄灰	2.5Y5/1	ほぼ完存 重量6.02 g
280	1	14-4	鉄製品	刀子	C9	包含層		(残存長)5.2 (幅)1.8 (厚)0.65	-	-	-	-	
281	1	14-2	鉄製品	鎌?	D15	包含層		(残存長)4.2 (幅)2.7 (厚)0.4~0.9	-	-	-	-	
282	2	36-8	鉄製品	釘?	F6	包含層		(長)2.6	-	-	-	-	
283	1	14-1	鉄製品	釘?	C21	包含層		(残存長)4.9 (厚)0.6	-	-	-	-	
284	1	14-3	鉄製品	釘?	C21	包含層		(残存長)4.8 (厚)0.6	-	-	-	-	

第11表 遺物観察表(7)

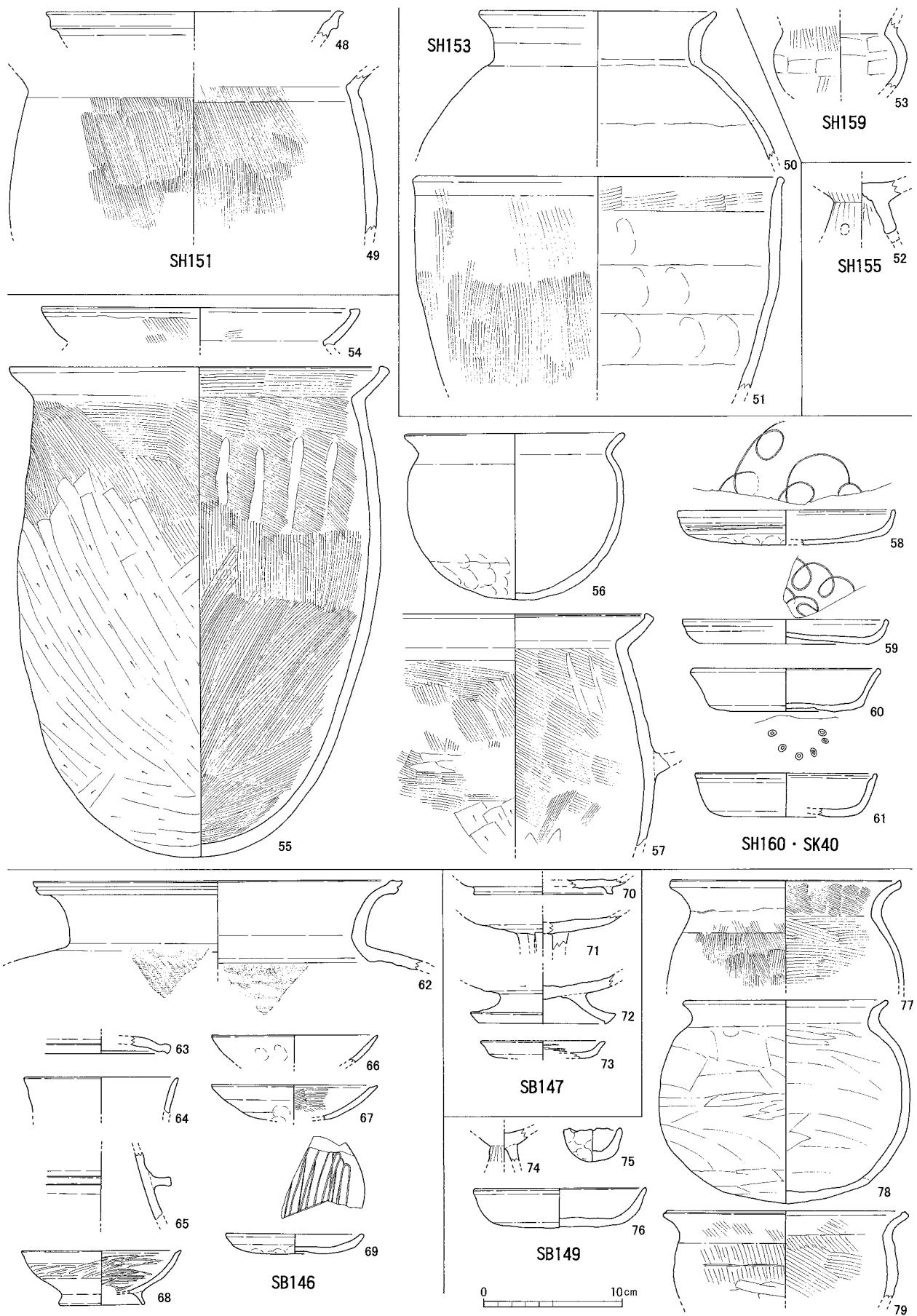


SR163

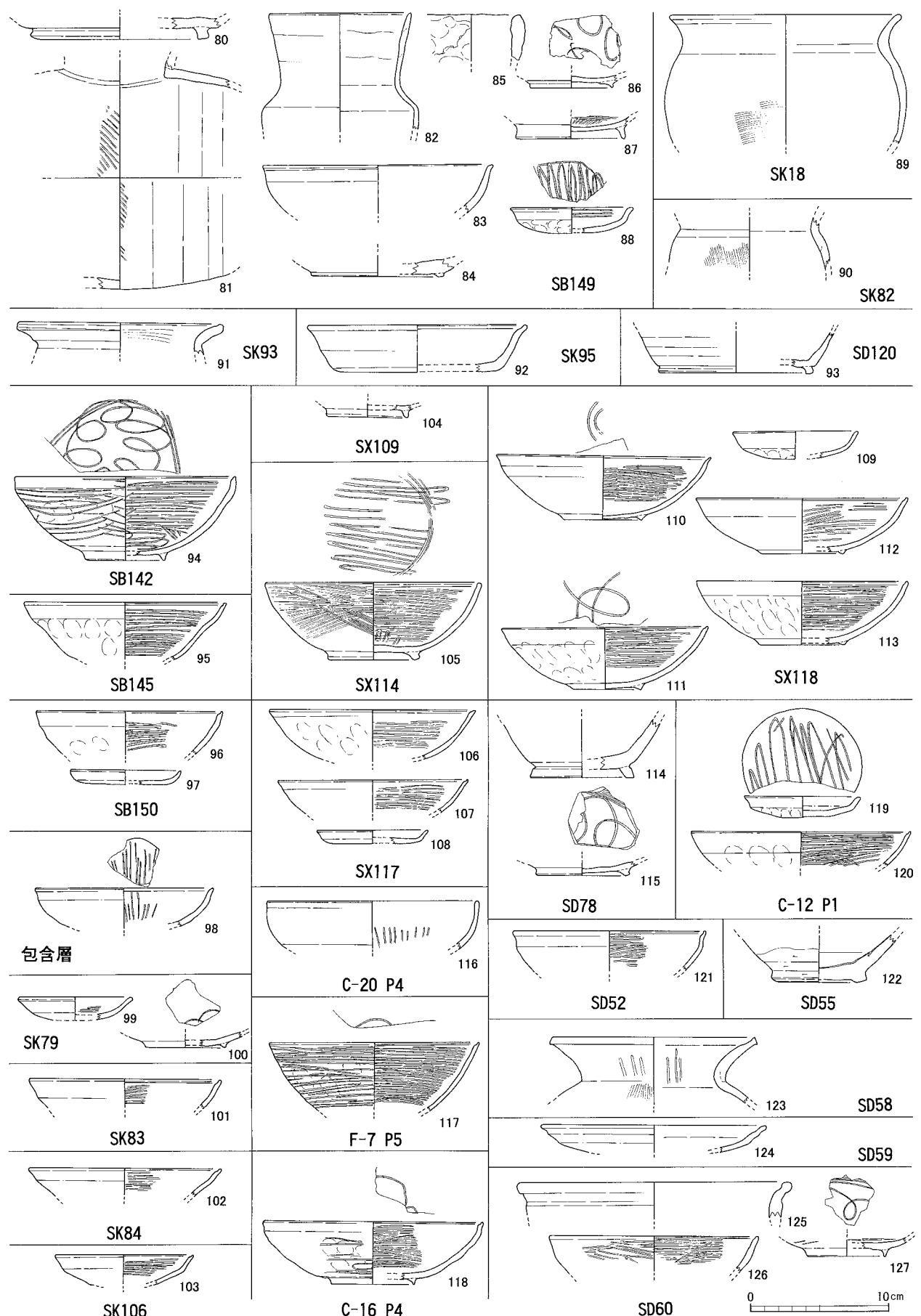


整地部

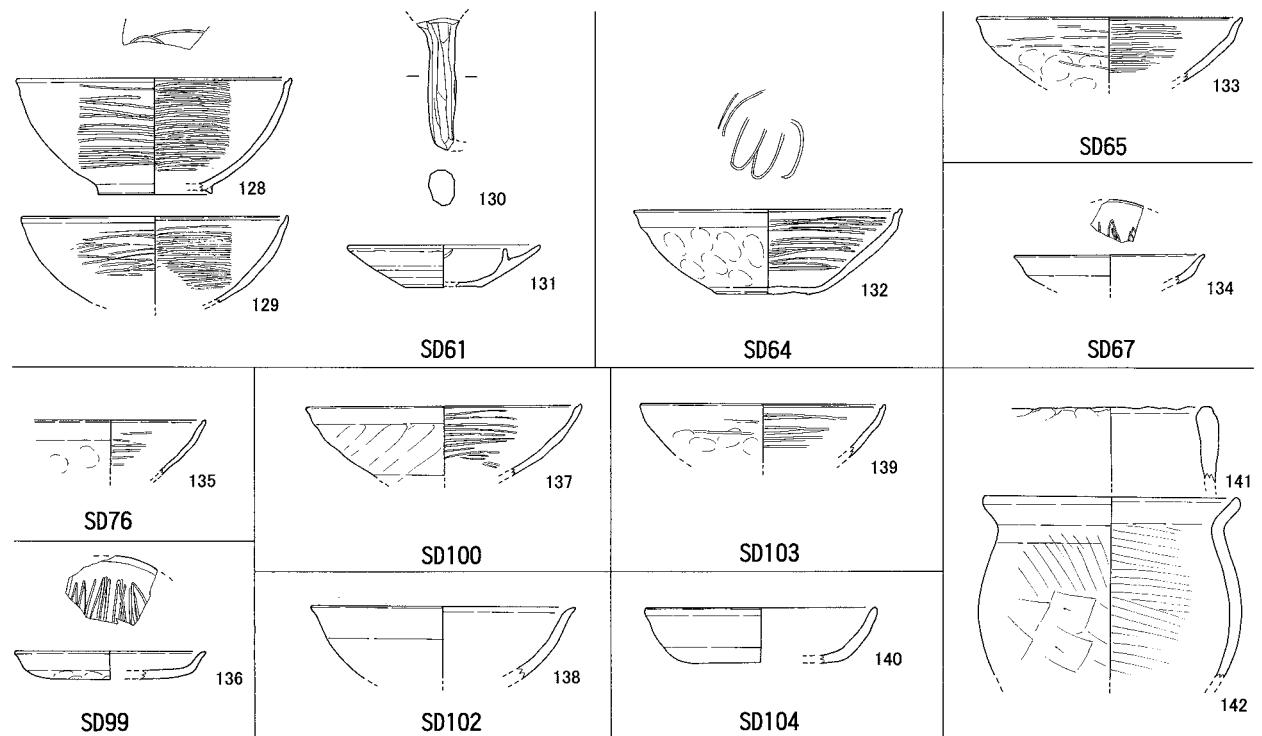
第17図 出土遺物実測図 (1) (1 : 4)



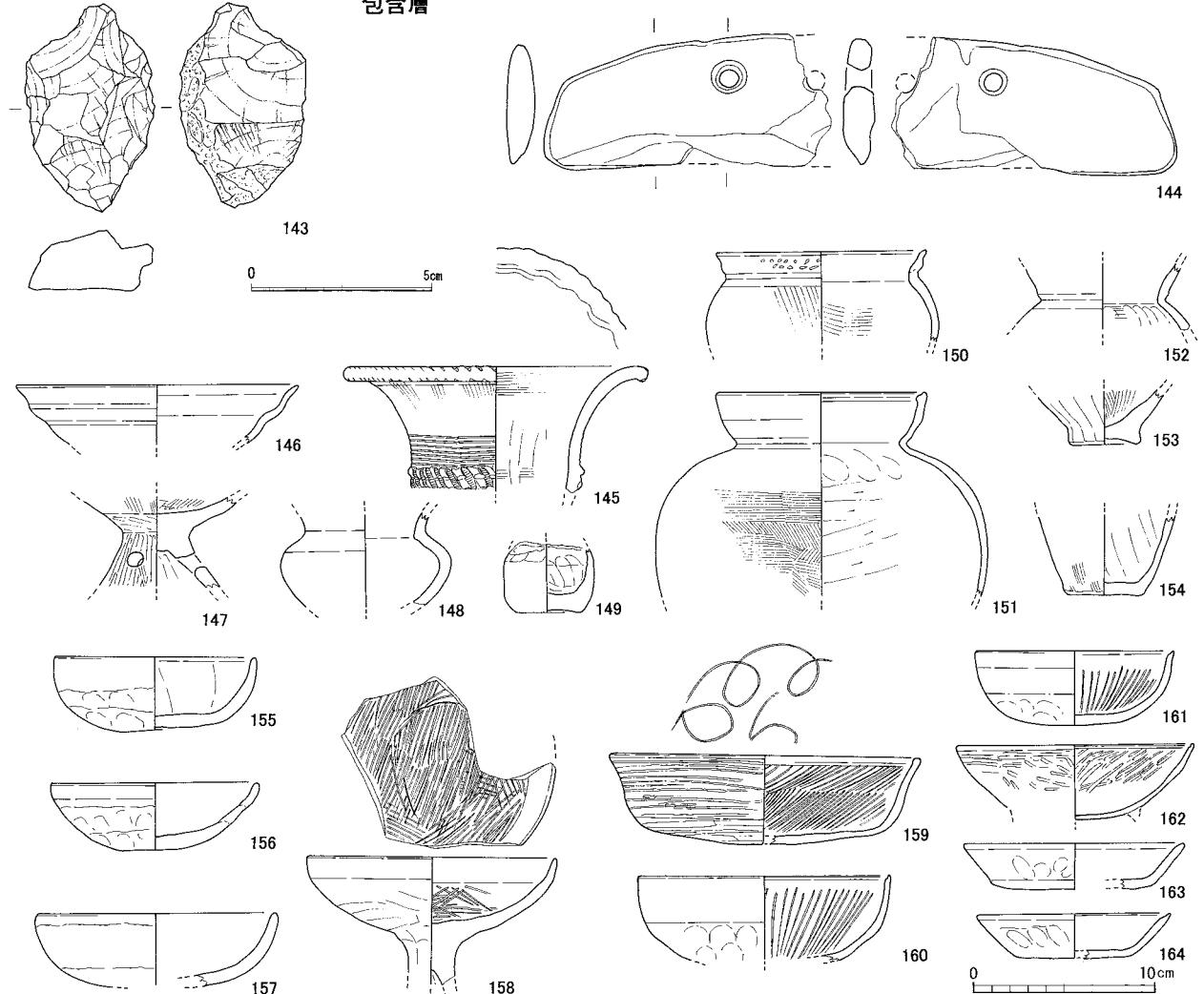
第18図 出土遺物実測図（2）(1:4)



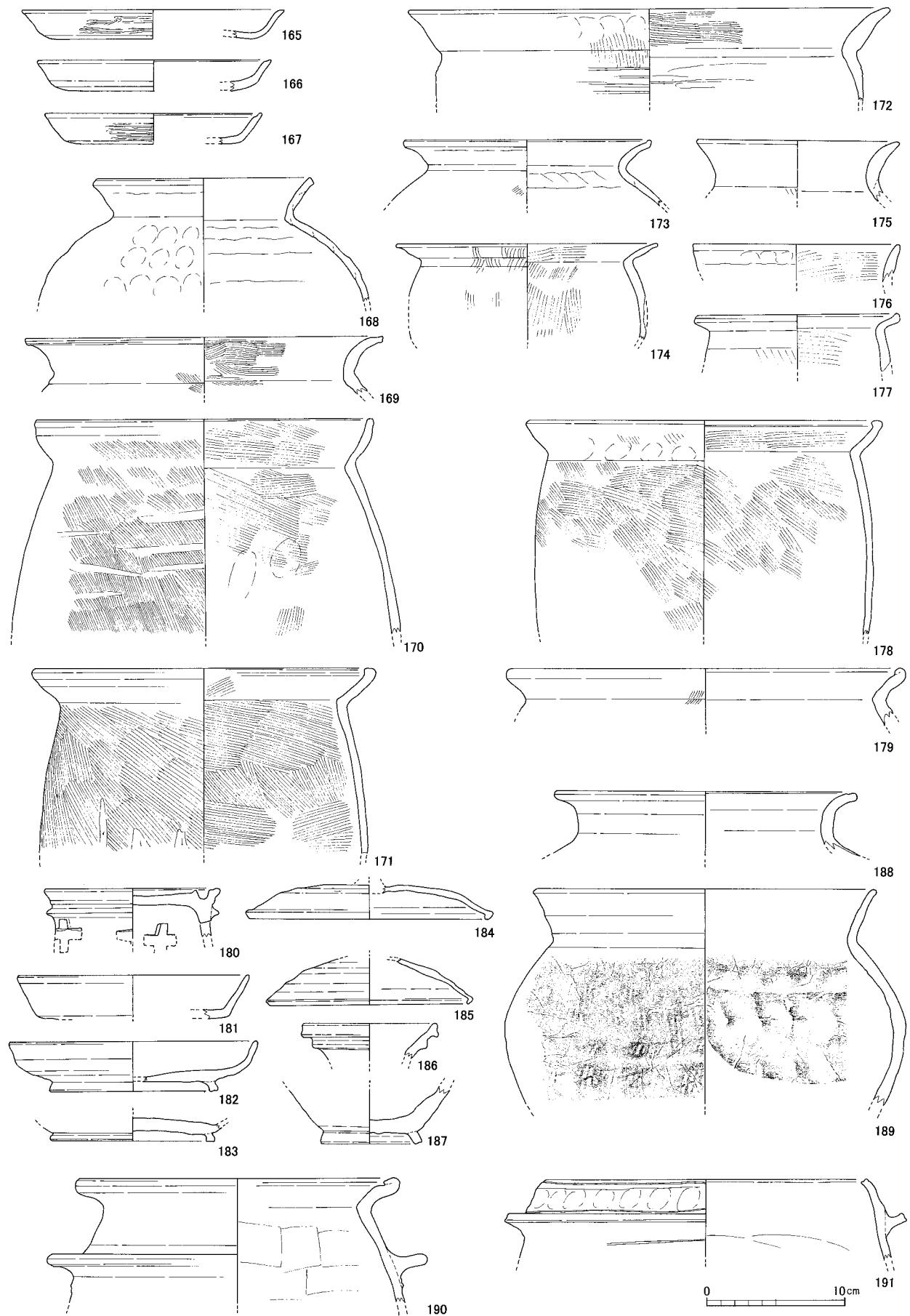
第19図 出土遺物実測図（3）（1：4）



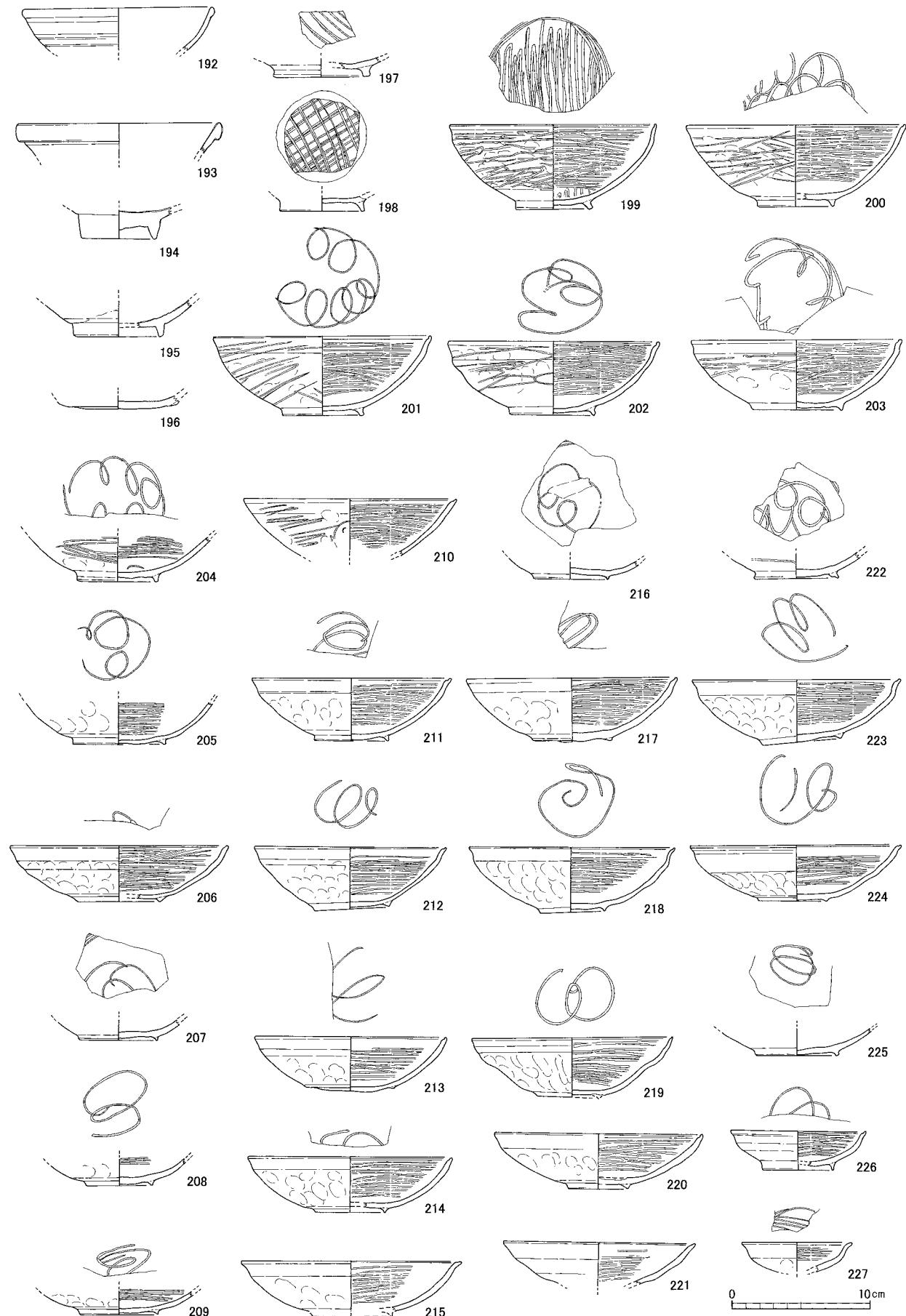
包含層



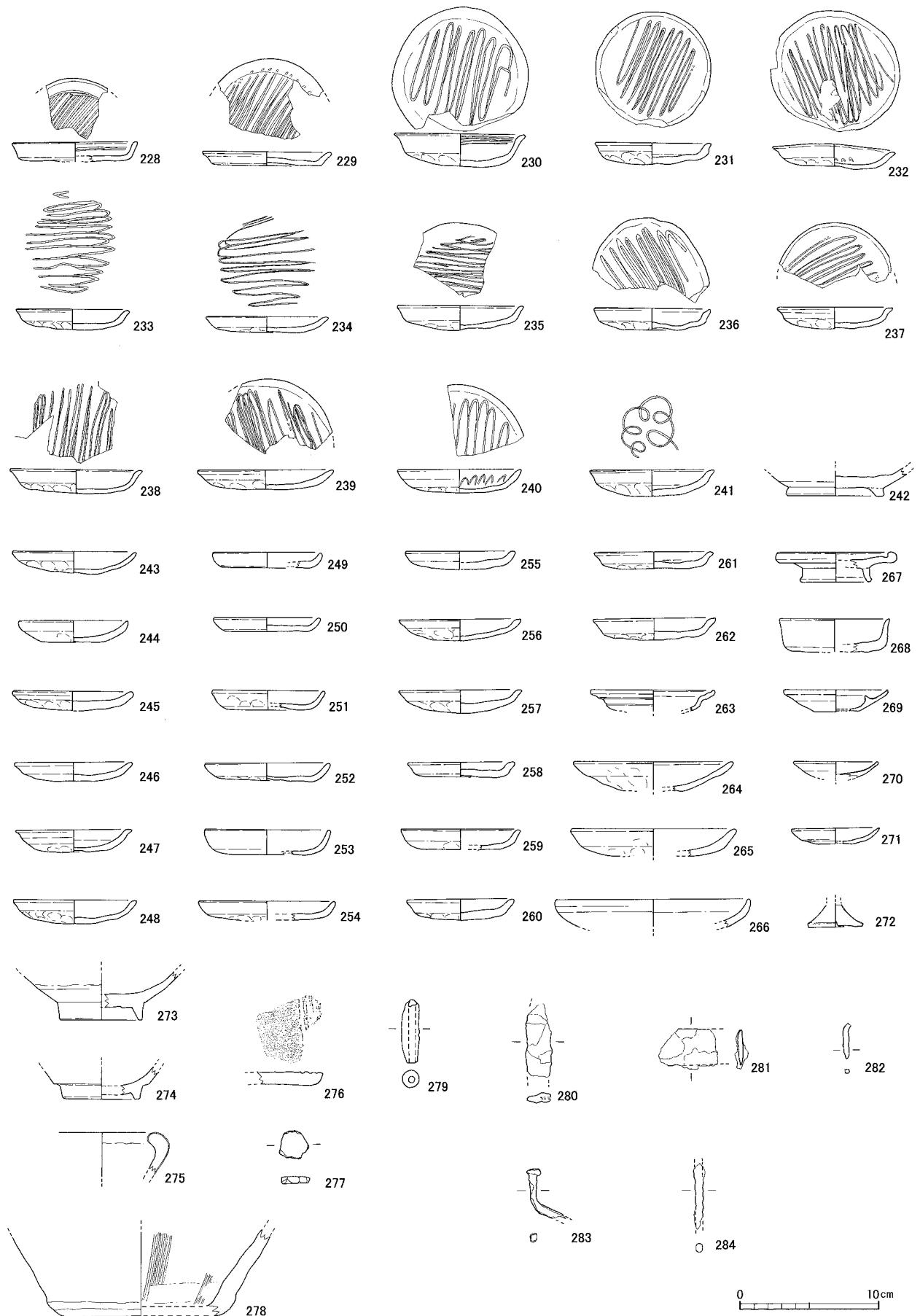
第20図 出土遺物実測図（4）（1:4、ただし143、144は1:2）



第21図 出土遺物実測図（5）(1:4)



第22図 出土遺物実測図（6）(1:4)



第23図 出土遺物実測図 (7) (1:4)

第6章 調査のまとめ

三石代遺跡の調査は、「前言」にも記したように、調査開始段階に、原因事業の工事中に横穴式石室を内包した後期古墳（天童山古墳群）が西側丘陵上で不時発見されるという事態が生じたため、緊急に調査スタッフを二分してその対応にあたるという不幸な状況の下、開始された。

さらに、調査地点のベースが木津川の堆積作用によ

る砂地という安定性に乏しいものであったため、特に遺構検出面の把握とその遺構確認は困難を極めた。

しかし、こうした遺構検出の難しい状況であったにも関わらず、古墳時代から中世に至る遺構・遺物が一定程度確認できたことは大きな成果であった。

以下、検出された時期毎に、確認された遺構と遺物をまとめておこう。

第1節 古墳時代以前の状況

確実に弥生時代に遡る遺構はないが、包含層から石庵丁（144）や弥生土器（14・145）が出土しており、近傍での弥生時代遺構の存在が示唆されるが、詳細は不明である。天童山古墳群が所在する丘陵部でも弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・遺物が確認されているが、三石代遺跡出土遺物は中期に遡るもので、直接的には関係しないであろう。

近隣の弥生集落をみると、木津川対岸の才良遺跡

も弥生後期の集落であるが、下郡遺跡では中期後葉の弥生土器も出土しており、断片的には当該時期の遺構も存在している。また、天童山を回り込んで木津川左岸の盆地南端部に入った森寺遺跡では、弥生時代後期の木製農具が出土している。木津川に流れ込む小河川脇を拠点に、盆地の開発が押し進められた様子を示すものであろう。

第2節 古墳時代の遺構と遺物

1 古墳時代集落について

古墳時代の遺構は、S R 163が形成される調査区最低位部の東側で、木津川が形成した自然堤防に向かって微かに高くなっていく部分に堅穴住居が集中して形成されている。残りが悪く、堅穴住居のプラン把握には問題を残す部分もあるが、11基ほどの堅穴住居が重複しながら存在し、さらに南側調査区外へ広がる様相を呈している。

当該時期遺構の確認範囲が狭く、集落の全体像については不明な部分が大きい。しかし、三石代遺跡として把握される南北に長い楕円形の微高地は、その中心部が調査区の南側へ広がっており、古墳時代の集落本体も南側へ広がっていた可能性がある。

ただし、西側丘陵上に築造された天童山古墳群（6世紀）と同時期の遺構は、少なくとも調査範囲内では明瞭には確認できなかった。

2 古墳時代の出土遺物について

古墳時代の遺物については、前期～中期の遺物は、量的には僅かではあるものの、包含層から出土した布留式系の甕など、東海地域よりも近畿地方との類縁関係を辿れる土器が比較的目立つ。この傾向は、高賀遺跡や城之越遺跡などこの地域の古墳時代遺跡一般に通じることであり、三石代遺跡の古墳時代遺物も量的には僅少ものの、基本的にはこの傾向の範囲内に納まる資料といえる。

（穂積）

第3節 古代の遺構と遺物

1 古代の出土遺物について

三石代遺跡からは、7世紀後半から10世紀代にわたる時期の遺物が出土している。これらの土器は、いわゆる「律令制土器様式」^①の範疇で理解できるも

のである。包含層からは、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期（7世紀代）の杯Cも出土している。この時期のものは、伊賀地域においては、森脇遺跡（第1図14）などで確認されているが、量的には少なく、「中南勢地域でのあり

方と共に通する」とされている。

また、特殊遺物として円面硯1点が出土している。これは笠井氏による伊賀の硯の分類におけるⅢ類に相当し、伊賀地域でも硯の分布が広がる時期のものに該当する。

2 古代の三石代遺跡の性格について

古代の掘立柱建物群から出土した遺物は、平安時代中頃のものを中心に古墳時代から中世のものまでが混入している。その理由としては、検出が困難な整地層の砂層での検出であったため、後世の遺構の切込みが確認できなかつたためでもあると考えられ

る。また、同様の理由から、プランや掘形の規模に関しても問題が無いとは言い切れず、これらの建物群について過大評価することは避けたい。

しかしながら、当遺跡からは円面硯や飛鳥Ⅲ～Ⅳ期のものと考えられる精製土器も出土しており、また第2章で述べたとおり、当遺跡近くに「郡」の名前のつく地名が集中し、近くを古代の主要道が通っていたと想定されることから、当地が古代において何らかの公的あるいは有力者に関連した施設であった可能性もあり、これらの掘立柱建物が倉庫として用いられていたことも想定できる。
(西村)

第4節 中世の遺構と遺物について

中世の遺構としては、掘立柱建物5棟と埋葬施設4基等が確認された。掘立柱建物のうち4棟は古代の建物群の西で、1棟と埋葬施設は古代の建物群と重複して確認した。これより東では中世の遺構は確認されておらず、土地利用の変化が見て取れる。

遺物は、瓦器椀・皿、土師器鍋・小皿を主体とし、青磁・白磁が少量混在するもので、この時期の伊賀では一般的に見られる組成である。これらの他に、山茶椀も尾張産4期および渥美産5期のものが各1点出土している。伊賀で出土する山茶椀は、この時期のものが多いと言われている。伊勢地域との関係が注目される。

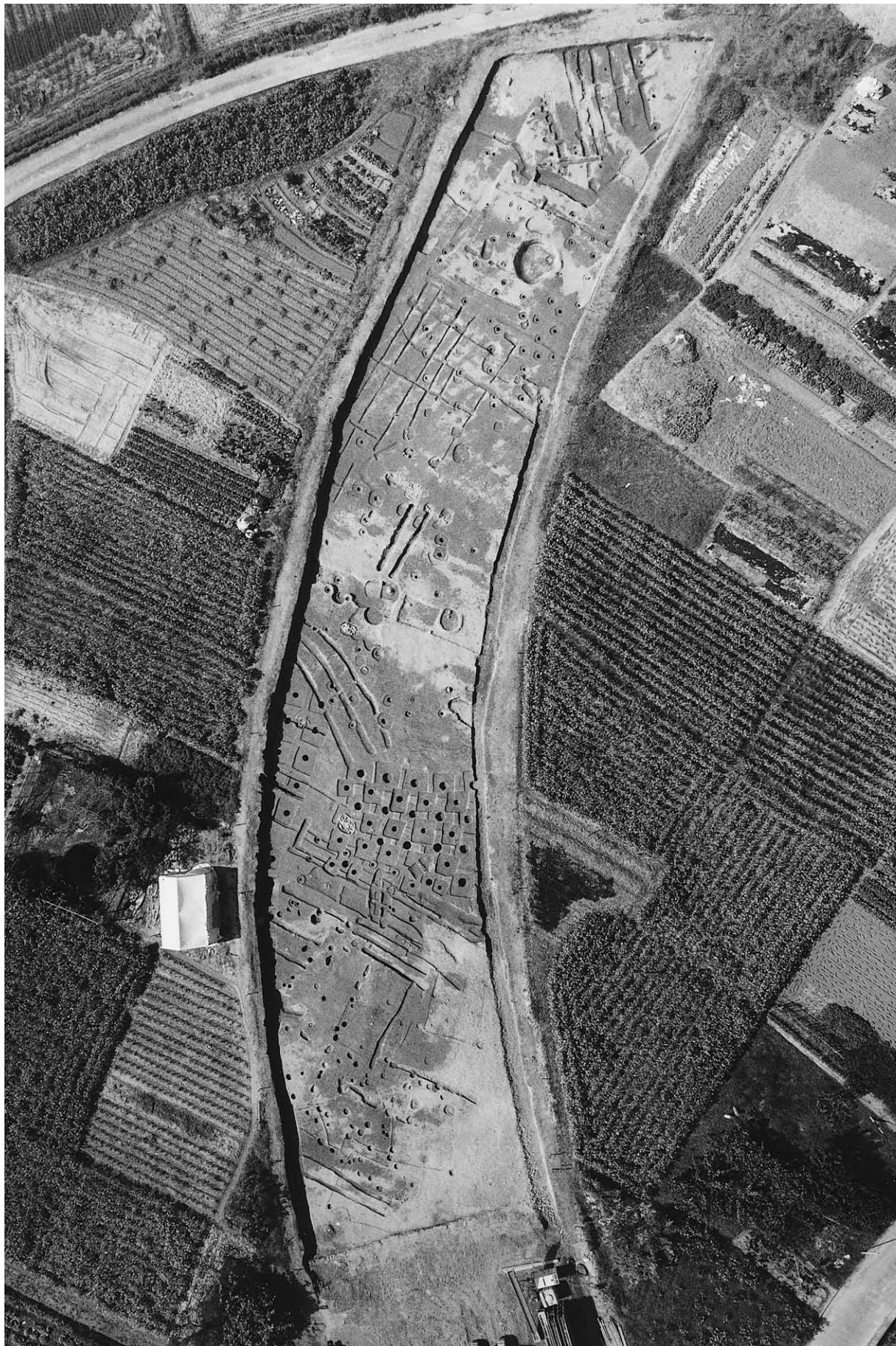
瓦器は、伊賀の瓦器碗編年の2期から6期（12世紀前半～13世紀前半）までのものが出土している。これらのうち、遺物番号96・97・99・102・127・236は灰白色系の色を呈しており、他の土器と区別される。また239は淡いピンク色を呈しており、二次焼成を受けた可能性もある。平成16年度に発掘調査を行なった上後瀬遺跡では終末期の瓦器で炭化していない瓦器が多く出土している。これらが灰白色を呈し

ているのは、焼成時に燻化不十分であったのか、また二次焼成を受けたのか、あるいは土中での埋蔵状況による影響を受けたのかは分らないが、今後の瓦器を見る上で注意すべき点の一つであるといえよう。

(西村)

[註]

- ① 『古代の土器1 都城の土器集成』（1992年、古代の土器研究会）による。
- ② 森川常厚『森脇遺跡（第4次）・遊山城発掘調査報告』（1995年、三重県埋蔵文化財センター）
- ③ 笠井賢治「伊賀地域における円面硯に関する覚書」（2004年、『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会）
- ④ 福田典明「伊賀地域における瓦器に関する覚書」（2006年、『中近世土器の基礎的研究XX』日本中世土器研究会）
- ⑤ 穂積裕昌『上後瀬遺跡発掘調査報告』（2006年、三重県埋蔵文化財センター）

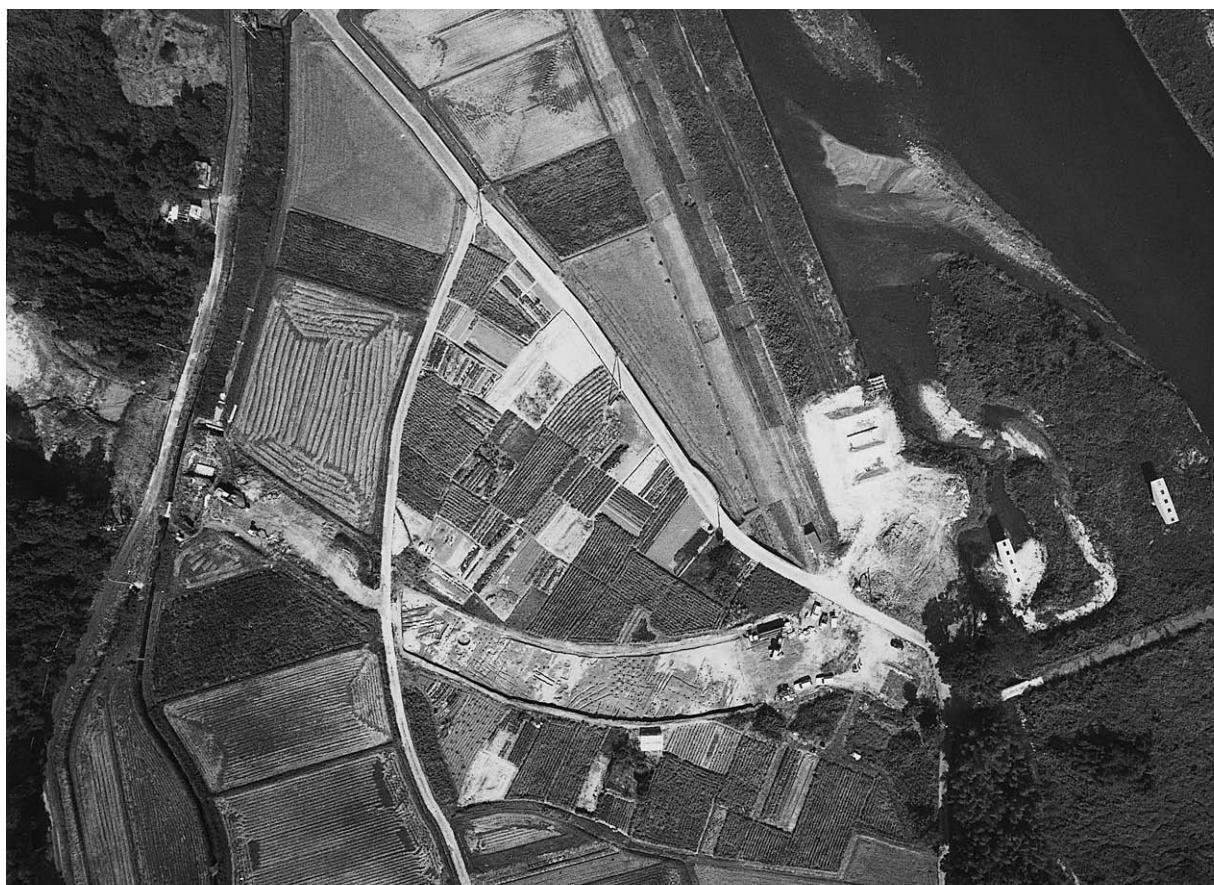


三石代遺跡下層（垂直写真）

図版2



三石代遺跡全景（西から・上方の川は木津川）



三石代遺跡調査区全景（画面左林の切り開かれている所が天童山古墳群、右が木津川）



上層東半部（西から）

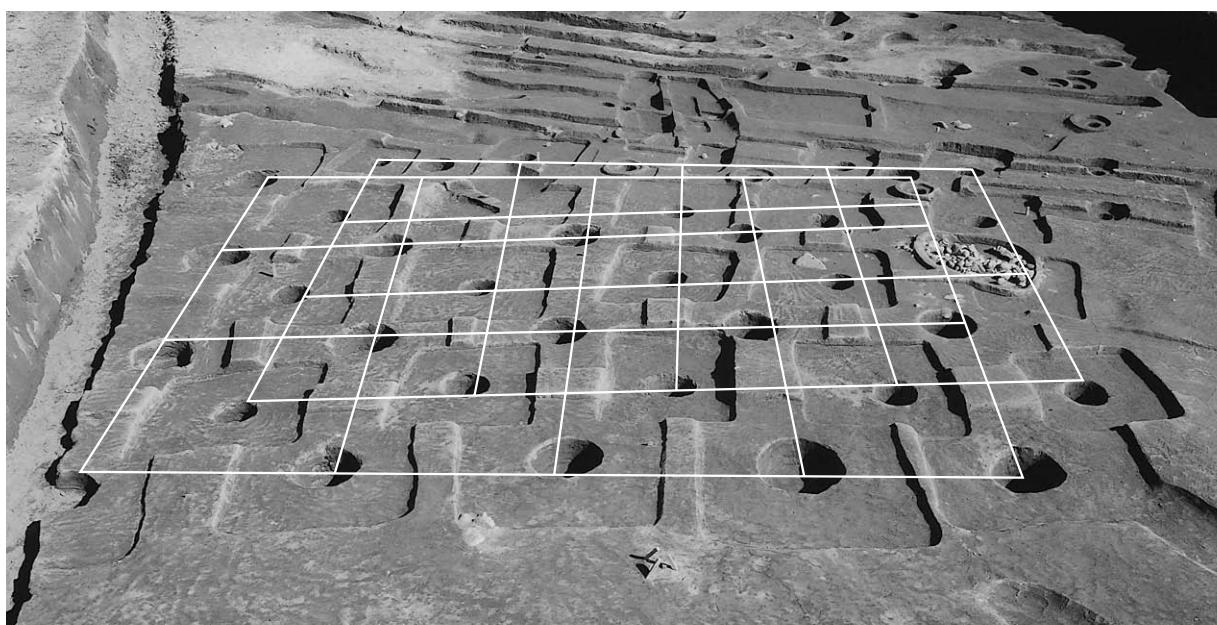


上層東半部（東から）

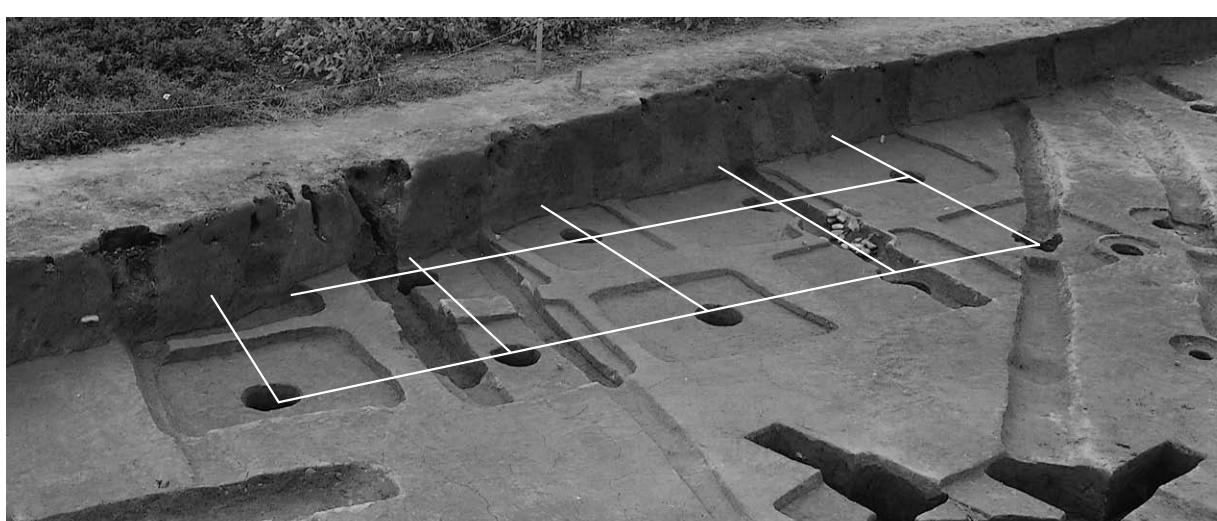
図版 4



S H151~159 (東から)

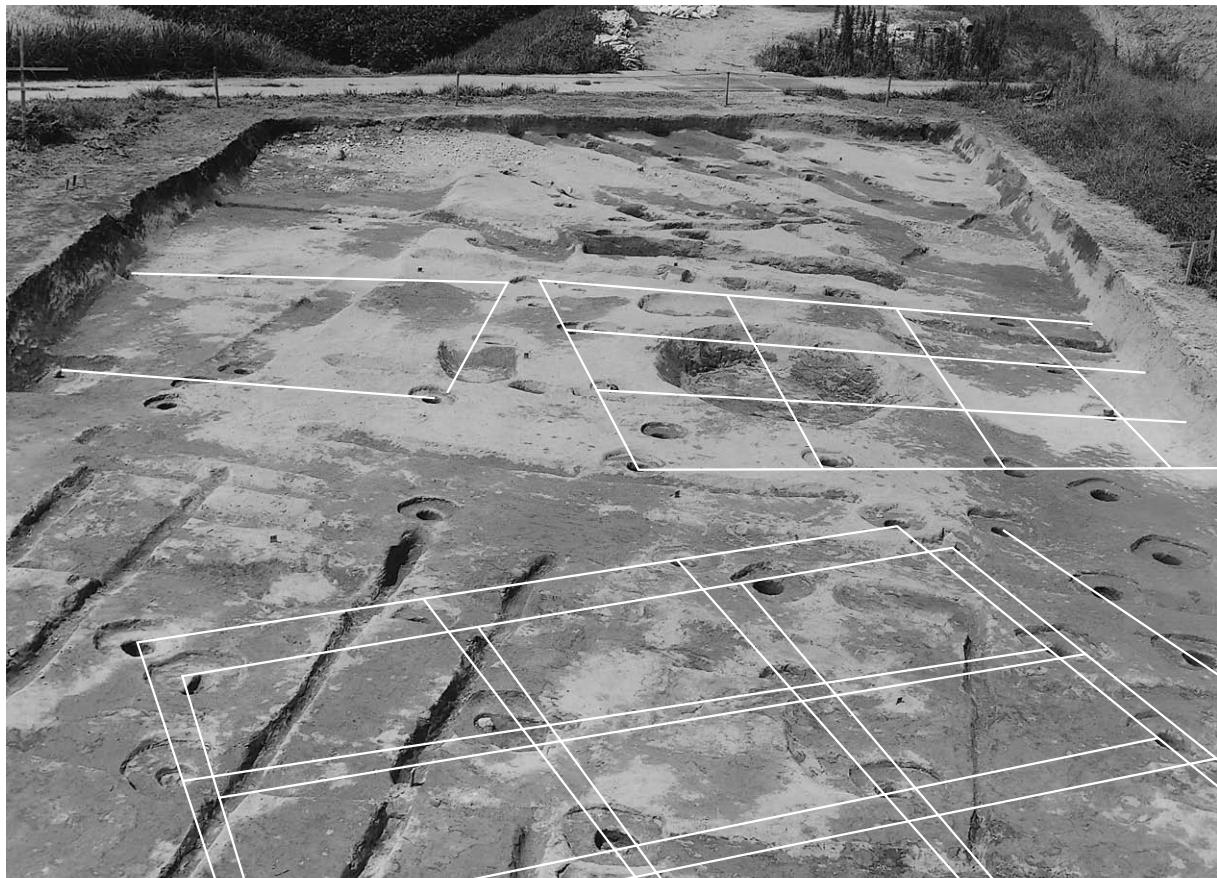


S B146・149 (西から)



S B147 (北から)

図版 5



S A141・S B142~145 (東から)



S X109 (西から)

図版 6



S X114 遺物出土状況（南東から）



S X117 (東から)



S R163（西から）

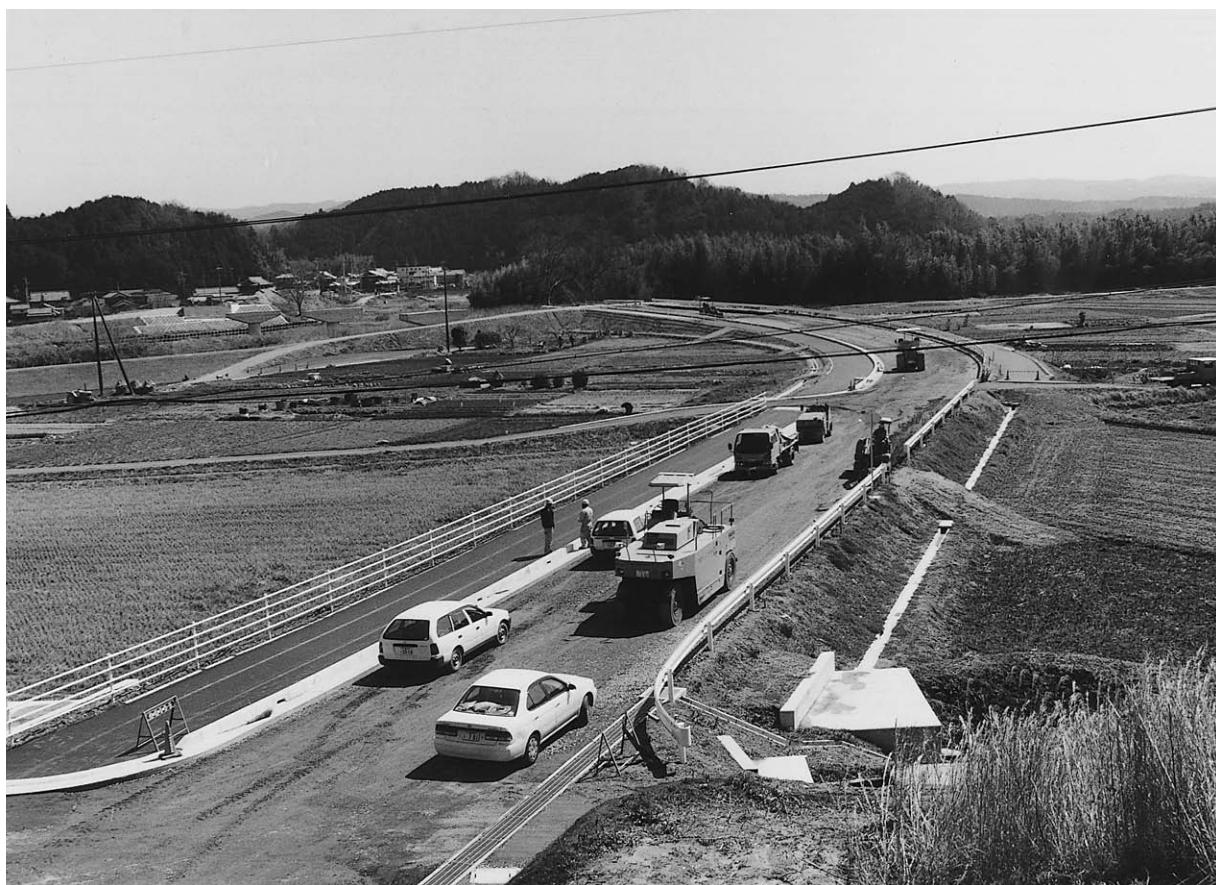


S Z164（北西から）

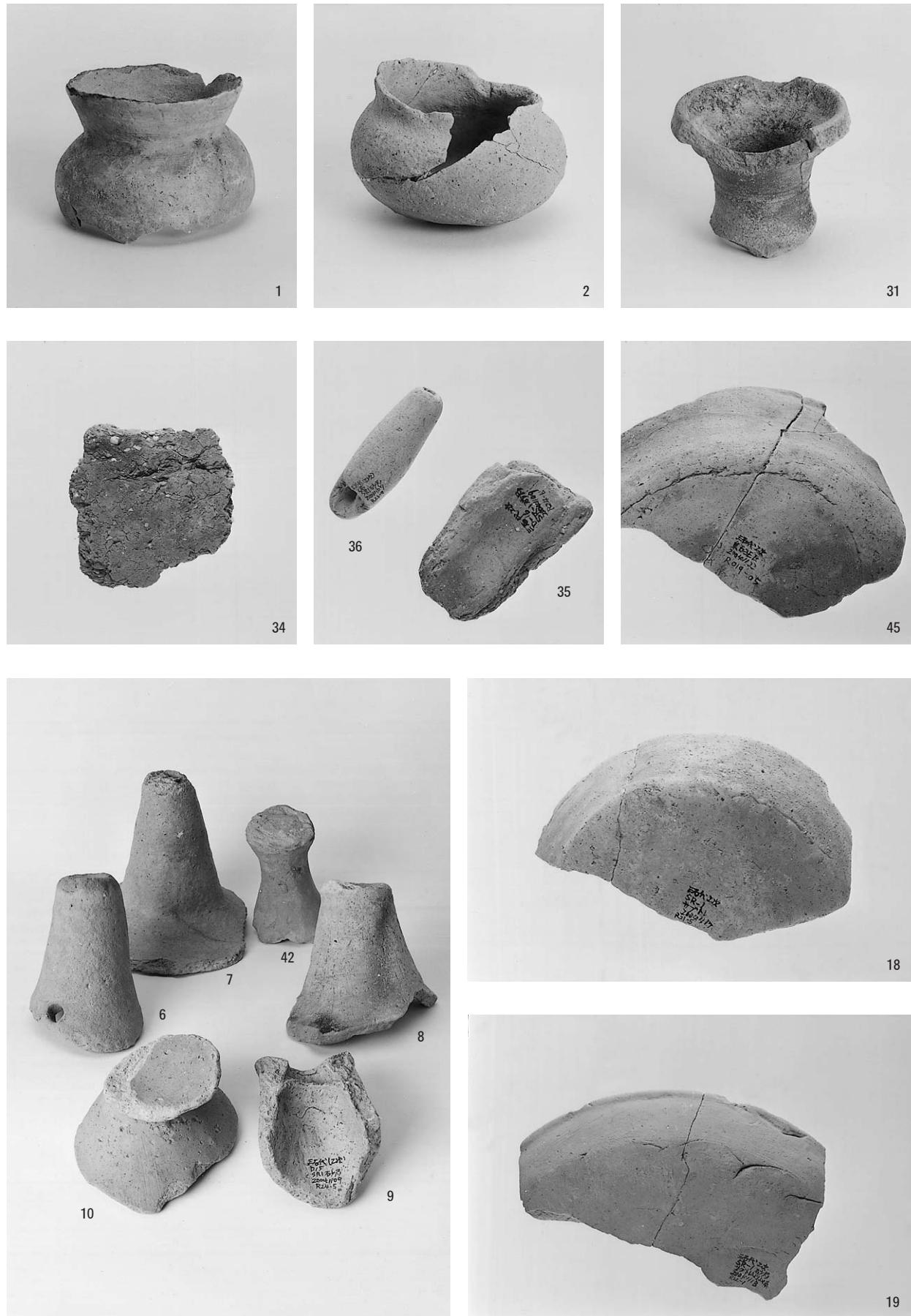
図版8



調査前風景（天童山古墳群から調査区を望む）



道路工事風景（西から調査区を望む）

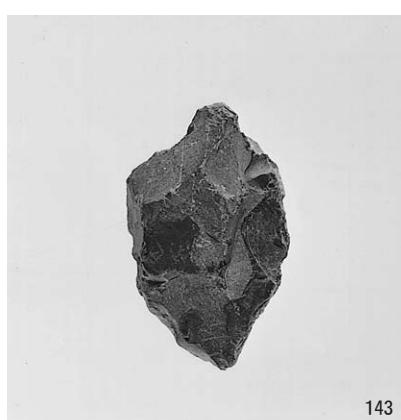


出土遺物 1

図版 10

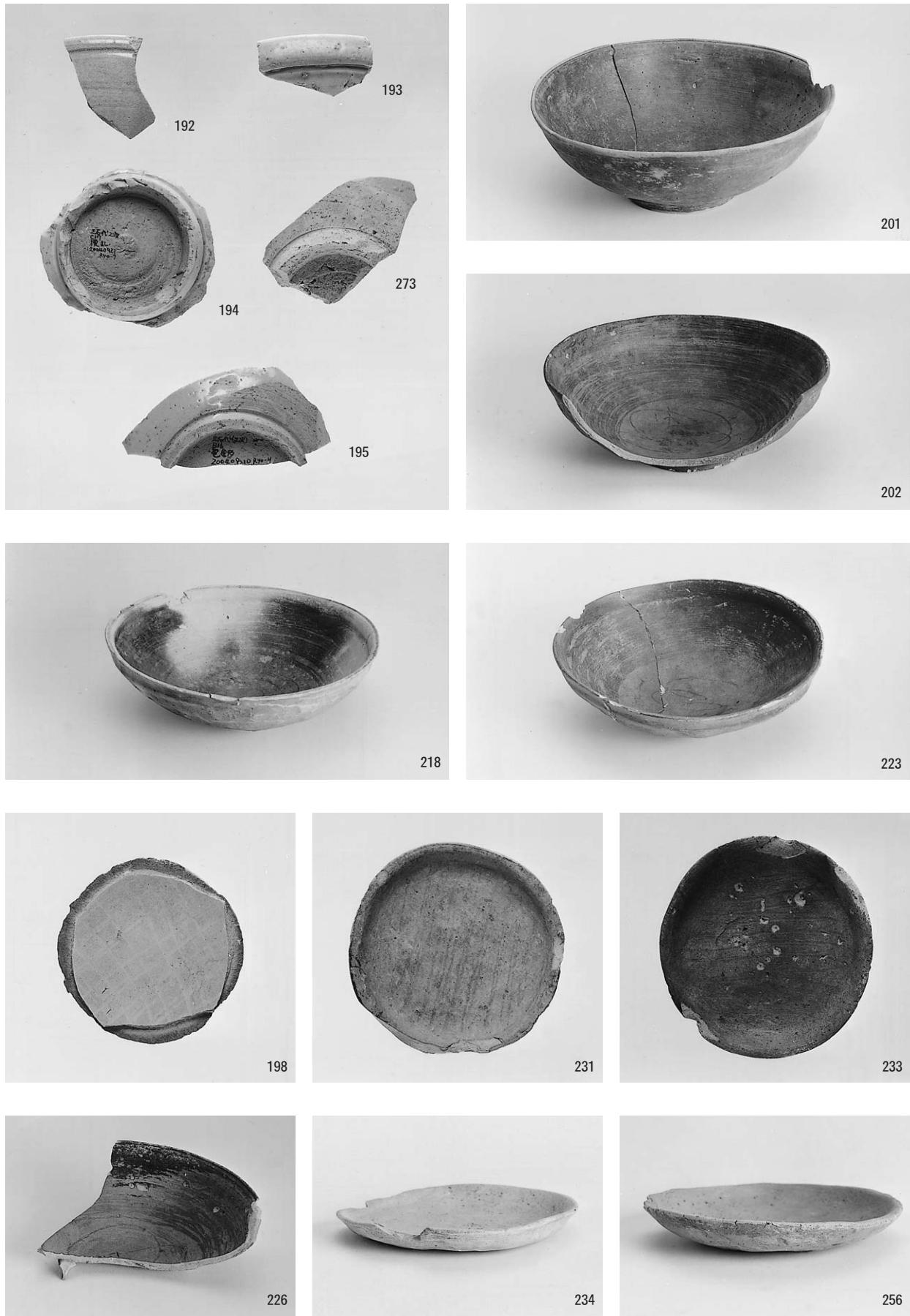


出土遺物 2



出土遺物 3

図版 12



出土遺物4

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告279

三石代遺跡発掘調査報告

－三重県伊賀市下神戸所在－

2007（平成19）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 光出版印刷株式会社
